
歌の力～混沌に咲く絆（はな）～

洒落頭社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌の力～混沌に咲く絆～

【Zコード】

Z9099W

【作者名】

洒落頭社

【あらすじ】

全ては、少女が歌で東京タワーを崩落させたことから始まった。

何食わぬ顔で、日常の学校生活を謳歌する夏華（主人公）。だがその実態は、東京タワー崩落事件の真犯人だった。

内に秘めた思いから家族には打ち明けられずに、そのことを隠し続ける夏華。

そんな彼女をどんな時も見守ってきた兄。

そんな彼をずっと見続けながら、叶わぬ純愛を嘆く姉。

そんな悲劇を何とかしようと、もうずっと前からもがいていた義弟。

これは潔癖症な妹（主人公）と豪快な兄、切れ者の義姉に中一^{オタク}な義弟が織りなす異色のファンタジー。

関東最大の暴力団組織、その会長を親にもつ夏華とその兄。関東最大の暴力団組織、その若頭（ナンバー2）を親にもつ義姉と義弟。

ヤクザ特有のダークで、どす黒い世界にあって果たして四人は本当の幸せをつかめるのだろうか！？

これは歌を巡る家族の、笑いあり涙ありの感動エンターテイメント。葛藤や衝突、そして絆を綴つたオリジナルストーリー。

主として、妹（美少女）と兄（美形）の家族愛がテーマに掲げられています（その他：ほのぼのとしたかけ合いや、合間で飛び交うギヤグ　切ないラブロマンスもあり！）。

この作品は歌詞を物語に絡めています。

登場人物紹介

登場人物紹介

本編未読の方は、ネタバレが含むことを理解した上でお読みください。

加藤夏華：

本作の主人公であり美少女。愛称は、「夏」。

潔癖症でやることなすこと、完璧にこなさなくちゃ我慢ならない性格。なのでバラバラになった今の家族に、多大な不満を抱いている。家族には秘密にしているが、禁じられた異能の力（歌うことで、そこに入れられた詞を現実に反映させられる力）を使い、東京タワーを崩落させた張本人でもある。

加藤冬治：

夏華の兄。妹とは違ひ豪快な性格で、一家の長として家族を支えている。

また、家族のことを一番に考えすぎるせいで、自分のことを等閑にしやすい。それ故、美男^{イケメン}でありながらに、女性にフられることが多々ある。

過去に、歌に関わる仕事をやっていた形跡あり。

加藤千己：
かとうちい

夏華の弟であり、冬治の弟もある。つまりは末っ子故、甘やかされて育てられてきた。
その反動なのか結果なのか、どうすれば怒られないかをよく知っている。

また、ゲームや漫画といった、一次元のものを愛する厨二病な少年。
それが災いして、身内によく迷惑をかけている。
ただそれが高じて、機械関係にはめっぽう強い。
戸籍上、夏華や冬治とは血縁関係があることになつてゐるが、実際に
は血の繋がりはない。

加藤千世羅：
かとうせら

夏華の姉にして、暴力団組織 白道会の会長。
はくどうかい

非常に頭の回る性格で、人を出し抜くことに長けている。
少々自己愛がすぎるくらいはあるが、家族を一番に思つてゐる。
戸籍上、夏華や冬治とは血縁関係があることになつてゐるが、実際に
は血の繋がりはない。

ただ千己とは血が繋がつており、実姉である。
昔、冬治とは恋仲にあつた。

華道花：
かどはな

夏華と冬治の実母にして、関東最大の暴力団組織

華道会の会長。

近藤
こんどう
：

千己と千世羅の実父にして、関東最大の暴力団組織
華道会の若頭。つまり、組織におけるナンバー2の実力者にあたる。

用語集

用語集

本編未読の方は、ネタバレが含むことを理解した上でお読みください。

かどうかい
華道会：

関東最大の暴力団組織。

はくどうかい
白道会：

東京都心に拠点を置く、一暴力団組織。

華道会から分派した組織であるにもかかわらず、華道会との対決姿勢を鮮明に出している。

先の東京タワー崩落事件で犠牲になつたのがその元組員だったこともあり、現在は騒然としている。

かぞく
歌族：

古くから華道家に脈々と受け継がれる、特殊な血統を持つ家系のこと

と。それは歌うことで、そこに込められた詞を現実に反映させられるという、異能が揮える家族だった。

現状この力を使えるのは華道会の会長
治、他には夏華の三人だけである。

ただ、二〇歳までは歌うことは厳禁とする掟がある為、夏華はしてはいけないことになっていた。

華道花と、その息子の冬

序章 勧善懲悪【東京タワー】（前書き）

この作品は、ストーリーに歌詞を絡めていきます。

また、シリアスありきの笑いと感動を主眼に置いてます。

9月の後半に初投稿し、現在、第一章に突入中です。

ペースとしては今のところ、毎日の更新がでけています。

P.S. :

どんな感想でも大歓迎です。ぜひぜひ作者に構つてあげてください
な！

序章 勧善懲惡【東京タワー】

序章 勧善懲惡

某日 深夜 東京タワー外縁

その日、携帯 タッチパネル式の液晶画面が、持ち主を死に追いやっていた。

その男は、真冬だというのに玉の汗をかいている。かけ上がる度、その雲が階下に落ちていった。力む両足は震え、足元が覚束ない。それでも、逃げるのをやめはしない。

思わずのけ反るほど、吹きつける強風が男の進行を妨げた。踏ん張りを利かせようとするが、よろめいてしまう。何度、落ちる！？ と思つたことだろう。もし手すりが無かつたらと、考える度ゾッとする。

この階段は折返し階段だった。巨大な電波塔の一角で、踏まれるその一段は赤い。総段数はおよそ六〇〇で、普通は登りきるまでに一〇分と経たないものだった。が、今まで必死だった男にとって、それは苦痛以外の何物でもない。

つまり、足で登るには不可能な距離だった。なのに男は駆け上がる。なのに男は登つていいく。その無謀とも言える高度を。

理由は決まっていた。こうすれば苦しめるからだ。現に男は、痛みで我を忘れる高さまで向かい、そこでお終りにしようと思つていた。

なのにできない。できなかつた。恐くて……たまらなかつた。

何度も覚悟はした。諦めもした。けれどもそれ以上に、生きたかった。それだけのこと。それだけのことで、ほんのわずかな奇跡に

縋る。

気づけば長時間かけ、到達する。てっぺん 大展望台前へと。同時に男はうつ伏せで崩れ落ち、倒れこんだ。その拍子に顔を打ち、目眩を起こす。肩で息をしていた。吐く息は白い靄となつて左右に四散し、儚げに消えていく。突つ伏した背中からは、湯気がゆらゆら立ち上つていた。ふくらはぎはパンパンに膨れ上がり、足裏には激痛が走つていて。一休みしたことで気づかされる、疲労困ぱい。もう一步も動けそうにない。痛い。痛くてたまらない。

もう後はここにじつをしていれば、何とかなるんじゃないだろうか？

それ以前に、持つてゐる携帯を投げ捨てれば、この状況から救われるのでは？

（どうして……どうして……）

男には分かつていて。その何れの問いかけも、こちらの願望でしかないことを。

（何で俺が……俺が一体何したっていうんだ……）

ふらついた足取りで何とか手を付き、立ち上がる。再度、痛みが走つた。堪えきれず倒れそうになつた所を、何かに支えられる。壁だ。

そこには、文字が書かれていた。が、涙のせいでうまく読み取れない。映る字体はぼやけ、ぐにゃぐにゃに踊つていて。それでも、何が書かれてるかは知つていて。なぜなら、過去に何度も足を運んだことがあるのだから。

壁の上部には『大展望台2F』と、そう明記がなされていた。

男は着こなした警備服、その胸ポケットに手を入れハンカチを取り出す。胸元には、かけられた名札があるが、そこに男の本名は無い。つまりは偽名。

男は大展望台、その内部へと足を踏み入れたのだった。

中の光景は真っ暗の一言で、窓から差し込む都会のネオンだけが
淡い光を放っている。加えて、営業時間外ならではの静けさ。さつ
きまでが強風の音やら、甲高い足音やらで騒がしかった分、より際
立つて感じられた。

暗闇と沈黙の中、男は徐々に落ちつきを取り戻していく。手に持
ったハンカチで余計な汗を拭い、被っていた帽子を取った。
顕わになつた顔面は、とても警備員向きではなかつた。強面で厳
つい中年男性。明らかに極道を踏んだ過去のある顔つきである。
男は恐る恐るといった感じで、今度はズボンのポケットに手を入
れた。感じたのは、過度の熱さ。その熱源を震えながらも驚撃むと、
外に取り出す。

それは最新の、タッチパネル式の携帯電話だつた。

そして、薄目ながら見た液晶画面は、真っ黒だつた。

「は……ははは

電源が勝手に落ちていた。つまりはバッテリー切れ。だから、も
うお終い。助かつたのだ。

チャリラリラーン

「――！」

その時、儂い願望を打ち碎く、絶望の旋律イントロが奏でられる。場違い
に陽気な、だからこそその不気味なサウンド。音源は電源を切つたは
ずの、この建物内のスピーカーから、最大限まで音量ボリュームが引き上げら
れている。

「ひぎいつ！？」

まだ何もされてないといつのこと、された後のような奇声を上げる
男。経験からくる条件反射のようなものだつた。

散々に打ちのめされてきたのだ。この詞うたに。

それは音痴な歌声　　あんまりな女声だつた。

？始まりの歌　五線譜じや伝わらない　十八番

ナバ

でかけましょう 世界を君色に塗り変えてこいつ?

Aメロが、男を発狂させる。

?でかけましょう?で何故か自身の体が浮き上がり、横へなぎ飛ばされる。窓をかち割り、夜空へと。

粉々のガラス片と共に、闇に投げ出された男は血まみれだつた。肌に刻まれた切り傷、そこから零れる生血より早くこの身は落ちてゆく。

凄まじい速度に、荒れ狂う風。体は否応なく振り回される。まるで糸の切れた人形のごとく、為すすべなく踊らされた。

冬空に、揺らめく人体が映えていく。

が、これで終わりではなかつた。

再び、男は建物に引き寄せられる。重力を無視した、圧倒的な引力。

同じように窓ごとかち割り、中へと転がされた。飛び散るガラス片が、その勢いの凄惨を物語つている。転がつて落ちた男は、その先で深い血溜まりを作つていた。

ここはさつきまでいた大展望台一階でなく、その下部にあたる大展望台一階。その無音の空間では、荒々しい息遣いだけが反響していた。

「うあ……くつ……」

呻き声は意味をなさない。伝わるのは、どうしようもない悲哀。苦渋の語感に包まれていた。

(どうして……どうして……)

叫びたい。喚きたい。けれども口が、動かなかつた。ただ熱い。唇だけじゃない。顔も首も胸も腰も足も。熱い。熱くてたまらない。微動だにしない、うつ伏せの五体。その壊れた瞳は、ある文明の利器を見つめていた。

携帯電話。その持ち主と同じく、傷だらけの。

もう動かないと見られる、そんな傷物の画面を見るにつけ男は目を疑つた。

(光って
る?)

電源が入れられたのだ。バッテリー切れの携帯に。ありえない現実に、ありえないこの仕打ち。気づけば、Bメロが終わるところだった。

卷之三

喰の奥からぐ(ぐ)ぐ(ぐ)と、苦しそうな引き笑いをする。それは、さきほどの安堵からくる笑いとは全くの別物。死を悟った人間が最後に見せる、あの世への笑みに近いものがあつた。異なる点があるとすればそれは、男が泣き笑いしてること。足搔くことを諦め、それでも生きたいと思つてしまつてゐる。願つてしまふのだ。そんな、板ばさみの自嘲。どうしようもなく切ない、生死の葛藤がそこにはある。

(これも 詞がやつたんだ)

間違いない。」の携帯の非現実さは、Bメロが起こしている。そして、その画面には身の毛もよだつ四文字が並べ立てられていた。

そして、差
懲悪懲善

おおお!!
サビが歌い終わると同時に、横一線の何かが、男の田線を横切つた。
響くのはキーンという耳鳴り。

そして、日本一有名な電波塔は真つ二つに裂けた。

出来上がったのは台形と、地に突き刺さる逆三角形。非現実的な光景がまた一つ、都会の夜景に映えていったのだった。

序章 効善懲惡【テレ庇中継】（前書き）

視点が、警備員からある人物へ変わっています。

序章 勧善懲悪【テレビ中継】

『たつた今緊急速報が入りました！ 東京都港区にある日本を象徴する電波塔、東京タワーが真つ二つに切り離され、その上部にある先端が、公道の路面に突き刺さっているとのこと… 繰り返します。たつた今』

部屋にあるテレビ、その画面内では「緊急速報」とのテロップと共に忙しなく番組が変更されていく。

電波塔が崩落したというのに、テレビ映りに何ら問題はなかつた。それもこれも新しくできた東京スカイツリーのおかげと見ていいだる。

女は手に取つたりモコンをその騒がしさに合わせ、チャンネルを変えた。が、ある局では生中継を、また他局ではその道の専門家を招いての実況見分をと、やつてることは変わらない。

どにもかしこもうるさい。女はその元凶にチャンネルを合わせると、終に電源を落としたのだった。その後、ため息をつく。

吐息で震えた唇には、艶やかな紅のルージュが塗られていた。靡く黒髪に、ファンデーションやらマスカラやらで整えられた顔つき。齡の割には背伸びした、そんな色香を漂わせていた。

チャリラリラーン

馴染みの着メロ（イントロ）が聞こえる。それは、大好きな人の歌。

女は携帯を手に取ると、通話ボタンをプッシュする。その後、それを耳に当て声を発する。「もしもし」でない第一声を。

「説明はいらない。もひ、ニコースで知つた」

と結論だけを告げる。相手からの音声はない。沈黙が場を支配した。

ややもして、プツツという音が聞こえる。電話が切れたのだろう。

「これで……やつと始められる」

女は徐に立ち上ると扉を開け、風呂場へと向った。その後、脱衣所にて洋服を脱ぎ、装饰品を外して生まれたままの姿になる。その裸は玉肌だった。まるで女神の彫刻を思わせるかのよう、均整の取れた美。女性の象徴でもある一つのふくらみは、申し分ないおやかさだった。

女は風呂場の電気をつけ、その中へと入る。次にカラランを回しシャワーを浴びた。その際、思わず口ずさまれた鼻歌。

その声色は、あの東京タワー内で響いた音痴なたてものあんまりな女性そのものだった。

ややもして、女は風呂から上ると寝支度に入る。持ってきたタオルケツトを手に取り、まずは体を拭いていった。すぐそばには洗面所。

女は桃色の可愛らしいネグリジエに着替えると、今度はそこで濡れた長髪を乾かす。芳香性の強いシャンプーを使つてゐるせいか、ドライヤーの風と共に、椿の香りが鼻腔をくすぐつた。鏡に映る風呂上がりの、くつたりした顔。そこには妙な艶っぽさが醸しだされていた。

そうして髪を乾かしきつたら、後にやるのは決まりだと。歯を磨き口を濯ぬすぐ。ただそれだけ。

口内をすつきりさせると、女は床につくべく自分の部屋に戻つた。薄暗く冷えた廊下を歩きながらも、手持ちの保湿用クリームを肌にこすりつける。感じるのはヌルヌルとした感触と、ヒヤッとした冷たさ。辺りがぼんやりしてるので分からぬが、きっと光沢ある、てかてかの肌になつてゐることである。

そんな何でもないことを思つてゐる最中、異変は起つた。どこからか声が漏れ聞こえてきたのだ。

それは、女性の色っぽい嬌声。音源は自分の部屋のすぐ隣。もつと正確を期せば、そこにあるもつ一つの部屋、その扉を隔てて向こう側から。

こつものことだった。

なので女は気にせず、自分の部屋への扉を開ける。重い足取りそのままにベッドに腰をかけると、枕元に置かれた携帯 タッチパネル式の液晶画面を操作した。そこでのやるのは決まり」と。朝の日覚まし、アラームの設定だった。

一通りすべきことを終わらせると、つけっ放しだった電気を消す。と同時に、暗闇が部屋中を満たした。女は慣れた足取りで布団へと入る。

布団に包まれた、温いベッドの中。

なのに女は寒かった。真冬だからではない。無論、季節ならではの寒さに両手両足を冷えきっている。すぐには寝つけそうにない。両耳が冷たく、思わず顔まで掛け布団を引き上げてしまつ。が、そうではない。問題は、その寒さではないのだ。

悪寒。

実の所、女が苛まれてるのは、この類の寒さだった。

(とうとう、やつたんだ)

静寂の中、とうとう今日のことが反省されてしまつ。見て見ぬふりなど、できようがなかつたのだ。

遂に罪を犯した。取り返しのつかない大罪。

背負つたものの重たさに、心が押しつぶされそうになる。知らず震える手で、震える自身を抱きこむ。

それでもやめない。やめてはいけない。

必要だからだ。必要悪。

それでも、けれども、

(..... 苦しい)

女は胸に手を当て、目一杯握り締める。掴まれた、何でもない痛みに泣きそだつた。堪らずベッドの端、そこにぴたりとくつ

けられた壁へと体をすり寄せる。その壁を蹴てた向こう側には、さつき聞いた嬌声が今もなお鳴り響いていた。

「…………」

皿をつぶつ、耳を済ませることで聞こえる、もう一つの声色。

それは、大好きな兄の声。

その声が聞けただけで、女には十分だった。彼がいる。それはもう、どうしようもない安心感だった。悪寒も、痛みも、罪も、その重みも　その全てから守られる。守ってくれるという絶対的な関係。それが、この家族のあり方。

とはいって、この冷え冷えの体感である。すぐには寝つけない。まどろみに落ちゆくまでの数十分。もどかしくはあった。寒気もした。それでも、

「…………」

やつぱつ感など、何一つとしてなかつたのであつた。

第一章 不確かなる眞実（うた）【始まりの朝】

第一章 不確かなる眞実^{うた}

女の朝は、今日も変わらずだった。

目覚ましのアラーム　　その着メロが、頭に響いてくる。
すかさずピッと、それを一音で止めた。動きに無駄がない、一瞬の出来事。必要最低限の情報で事なきを終えるあたり、その潔癖さが垣間見える。

というより、女はそもそもが潔癖症だった。それも極度の。本人はそれほどでないと思つてゐるが、周りから言わせるとそうだった。

「うーん」

気だるそうに上体を上げると、眠気眼をいくらかこする。愛らしいその仕草は、男性陣が色めき立ちそうな可憐さが窺える。女はこすつていた手を持ち上げると、ゆっくり背伸びをした。気持ちよさに変なへタレ声を上げてしまう。

「ふわああ

自然とでる大きなあくび。その開かれた大口を、女は咄嗟に手で隠す。恥じらいはどんな時でも忘れない。

起き上がるとベッドを這い出し、窓側に向かつた。

後、カーテンを掴むと横に押し広げる。当然の如く、部屋に差し込む陽光。覚悟してたものの、眩しさに目はしばたたかれる。

けれども、おかげで室内が明るくなつた。カーペットでは所々に陽だまりが、揺れてはたゆたつてゐる。

「…………よし！」

女は気合を入れた。それは別に、これから今日も頑張るぞ、といふような呑気なものではなく自己暗示のようなもの。自分に言い聞かせてゐるのだ。なぜなら、ここからは別人になるのだから。罪を犯

した女ではなく、一家族の妹 加藤夏華として。

夏華はこれから会おうとする人に、話せないでいたのだった。自分が罪人であることを。

だから演じなければいけない。こなさなければいけない。いつも通りを。これまでもそれで通してきた。だから大丈夫。

夏華は一度、両頬をぱんと叩くと扉に向かつた。ためらいなくその取っ手を掴み、捻ると押し開ける。勢いで廊下を半円に回ると、すぐ隣の扉を先と同じく押し開ける。

そして機械的に開けた先 ベッドには、裸の一人が寝そべっていたのだった。

加えて、カーテンの隙間からの木漏れ日が、ぐつたりした二人を照らしている。つんと鼻をつくのは、雄雌の動物的な匂い。劣情の余韻からくるそれは、まぐわいあってこそ、そんな情景で満たされていた。

いつものこと。

毎度のことなので驚きもしない。初見ではさすがに、とんでもな反応をしてしまったがもう慣れてしまった。

最初にこれを目にしたのはそう、中学一年生の夏、八月一四日の一三時一〇分、一階のリビングであった。喉が渴いたと思って起きてしまったのが、運の尽き。当時、思春期真っ盛りの夏華にとつて、その情景は衝撃的だったしかいいようがない。顔を赤らめ「ご、ご、ごめんなひやいっ！」なんて言つてた初心な自分がそこにはあつた。

とはいって、今ではもう高校生の身分。あの時のこととは人生の恥ずかしい汚点として、懐かしむ程度のものになつていた。

相手の女性は、初めて見る顔だった。齢は一〇代後半くらい。セ

ミロングの髪を少しカールさせることで、愛らしさを演出している。それは強気で、どちらかといつと男勝りな顔つきとはギャップがあり、だからこそ魅力的だった。細身の体にはシルエットなく、すらりとした脚には自然と目がいつてしまふ美しさがある。

可愛いというよりは格好いい。

可愛いというよりは綺麗。

女っぽいというよりは男っぽい。

実の所、兄が付き合う女性は皆、この三条件に当てはまる人ばかりであった。

（これで何十人目、いや、もう一〇〇人は超えてるのかな？）

もうこの女性で何人目になるか分からぬ。そのくらいに遊び人な彼。

夏華は、その家族に第一声を発する。朝の挨拶を。

「おはようございます、兄さん…………冬治兄さん！」

その一声に兄 加藤冬治は、案の定起きやしない。三〇代そのままに、豪快ないびきをしていた。暑苦しくない程度の短髪に、精悍な顔立ち。腹筋は割れ、とはいえたマッチョとは違う、いわゆる女性好みの筋肉美を備えた体つきだった。イケメンという言葉がぴったりな、そんなビジュアル。兄妹揃つてのこの端整さは遺伝故の、そんな生来のものがあった。

「起きてください。朝ですよ。起きてください」

一ワトリのようにベッドの周りを行ったり来たりし、同じ言葉を繰り返す。正直、肩を揺すれば起きるだろうが如何せん、今の兄は不潔だ。潔癖症の妹としては、触ることに比類なき抵抗を覚える。どうすべきかと悶々してゐる内、ふと視界の片隅に馴染みの物体をとらえた。

アコースティックギター。

弾き方など一切知らないが、これが楽器だといつてぐらいは分かる。つまり、音が鳴るもの。

夏華は、壁に立てかけられたその楽器のベッドを掴むと、一気に

一弦から六弦までかき鳴りした。

途端、ベッド上に二つの裸体が跳ね上がる。

「じつやう起きたようだ。夏華は改めて言い直す。
「おはようございます、兄さん」

第一章 不確かなる眞実（うた）【兄妹で和氣藹々】

「何だ何だ何だ何だ！？」

と騒ぐ兄。さすが音楽に關しては反応の早い」と。一方、相手方の女性は、布団を引き寄せては体を隠していた。

どちらもこちらに気づいてる様子はない。なので身を乗り出し、顔を見せてみた。満面の笑みを。

「朝ですよ。起きてください」

「あれ、夏？ お前どうして」

夏華を「夏」の愛称で呼ぶ、冬治。疑問に思うのも無理はない。だって彼の中での妹は今、友達の家でお泊りなのだから。

「さつき帰ってきたばかりなんです」

夏華は「」もらず平然と言つてのける。真つ赤な嘘だった。

「そつかあ……朝ごはんは？」

と喋る冬治は氣だるそつだった。寝癖がついたままの頭を搔いている。

「食べてません」

「ん。分かった。ちと下で待つてろ。すぐ用意する」

必要最低限の情報を交わすと、夏華は向きを翻した。廊下へと。

一瞬、相手方の女性と目が合つた。合わせるつもりはなかつたのだが、あまりにもこっちを見るものだから罪悪感に駆られてしまつた。きっと彼女からすれば、「この子、妹さん？」からの「どうも初めまして」を言いたいのだろう。これまで幾度となく繰り返されてきたのだ。それくらいは分かる。

とはいえ、夏華は会釈も挨拶もしなかつた。それは別に、兄妹愛とか家族愛とかそういう感情からではない。単純に憐れみから。どうせこの後、一分も持たず別れるのだ。変に情けをかけて縋られでもしたら、たまたもんじやない。

そんな予感に耽る背中 その背後に、致命的な一言が発せら

れた。

「とりあえずお前、もう帰れ」

それは冬治から恋人に向けた、明確な突き放し。彼の声色は粗雑で、何より冷ややかなものだった。

（はい修羅場確定）

夏華の逃げる足は自然と早足になる。そのまま廊下に出ると一旦散に階下を目指した。途中、

「そんな言い方つてないじゃない！！」

怒声がこだました。パンツと乾いた音も聞こえる。引っ叩かれたのだろう。思った通りだった。が、となるとこのままではまずい。夏華は階段を一段飛ばしで駆け下りると、リビングに滑り込んだ。すると、少しして後バタバタと、荒々しく階段を下りる音が鼓膜を揺らす。

少しして扉が開き、閉まる音がした。さつきの女性が帰ったのだ。あの早さからいって着の身着のまま。

「……ふう」

思わずホッとする夏華。毎度のことだが、この一時はいつになつても慣れるものじゃない。痴情のもつれがどんな齢でも起ること同じく、男女関係というのはかくもハラハラさせられるものだった。何分か経つて後、派手なトランクス一丁の冬治が、体を引きずらせながらも一階から下りてくる。左頬には立派な紅葉てがたが赤く色づいていた。

「これまた思いきり引っ叩かれましたねえ。差し詰めBパターン？」

「Bパターン？ なんだそりや」

朝っぱらからビンタを受けた男らしく、冬治は不機嫌そうにリビングに入ってくる。そのままの足取りで夏華を横切り、奥の台所へと進んだ。その際、なんてことない仕草で妹の頭を撫でる兄。

「これまで兄さんがフられてきた過程を五つに分類してみたんです。

Bパターンは暴力沙汰。ちなみにAパターンは自然消滅でCパターンは

「はいはい分かった分かった。それより顔洗つてうがいしてきな」
「わらの長けた分析力を無碍にする、冬治。彼は台所で、料理の下ごしらえをしてい。

一方、夏華も台所までついてきていた。そして兄を手でしつしと、
どけの合図を送つて脇に寄せさせる。水場に独占市場を築いた夏華
は、悠々とカラントを捻つて水を出した。

「分かつてます。だからついてきたんじゃないですか」

「はあ？ だつたら早く洗面所に」

そう喋る冬治の言葉が途切れる。彼の視線は、妹に釘付けだつた。
かくいう夏華はといふと身を乗り出し、その迸る水に横から口を差
し込む。

うがいしていた。

すかさず兄がそのカラントを全開にする。

「あばばばばばっ！？」

口内に尋常でない水量が注ぎ込まれ、夏華は悶絶する。軽く溺れ
ていた。鼻の奥にまで水が這い上がりてきて、顔を泣きつ面にさせ
た。

「何てことするんですか兄さん！？」

「バカが、お前は。コップも使わずに直になんて」

「バカなのはそっちの方です！ 知つてます？ コップ一つとつて
みても塵や埃、果てにはばい菌なんものがウジャウジャと」

「んなの、一回洗えば済む話じゃねえか」

「んなの、いちいちやつてたら面倒くさこじやないですか」

「お前……」

冬治は、痛い子を見る目でこちらを咎める。が、夏華は意にも介
さなかつた。こういう性分である以上、むしろ彼の方が間違つて
とすら思つてゐる。

「とりあえずお前、やるなら洗面所にしろ。少なくとも俺の見えな

い所で

「何言つてるんですか？ 兄さん」

「ん？」

「あつちだと蛇口と洗面器の間が狭すぎて、顔が入れにくいくらいです。その点、ここだと広いじゃないですか。といつも、でなきやここまで来るなんで非効率的なことはしません。悪しからず」

言つてカラランをさつきとは逆に回す。水の出を抑えると、髪をかき上げ身を乗り出し、迸る水に横から口を差し込む。

改めてうがいをした。

改めて兄がそのカラランを全開にする。

「あばばばばばっ！？」

夏華は狭い立ち位置で、漫画ぱりこ足をばたつかせる。わざわり水の勢いが強かつた。

「バカか、お前は」

「何がですか！！」

「だから洗面所行けて」

狭い空間で、兄妹がささいな口喧嘩を繰り広げる。これまたいつものこと。

なので決着がつくまでには時間がかかるであつたとを、夏華は覚悟せざるをえなかつたのだった。

第一章 不確かなる眞実（うた）【兄妹で和氣藹々】

うがいと洗顔とを済ませた夏華は、身支度も終わらせていた。うつすらと分からぬ程度の薄化粧に、きちんとスカートの丈を守つた制服を着こなしている。見本の女子高生といいつた所だ。ついでに黒フレームの眼鏡もかけるものだから、その雰囲気はまさに優等生。

「早くしてください。今日は登校日なんですから」「わーってる。ちと待ってくれ」

台所の騒がしい油の音と共に、冬治の声が聞こえてくる。只今、料理中だ。とはいへ、作つてるのは朝食ではない。朝食はすでにテレビに並べられてる。今日の「」飯はチャーハン。お味噌汁の代わりには酸辣湯^{サンラータン}。おかげには餃子と……

（悪意だ。悪意が見える）

冬治にそんなつもりはない そう知つた上でも、夏華は疑つてしまつ。

この中華地獄は、妹に対する当てつけではないのか？

実は胃がもたれる女性に興奮を覚える、そんな家族に言えない悩みを抱えてるのではないか？

兄は中国人で……となると自分も中国人で、中華を食べさせることには、まだ日本人と自覚してる妹に対する、ある意味でのショック療法なのか？

男という生き物は、そもそも中華しか作れないようにできるのではないか？

頭を巡る雑多な問いかけは、後になる度おかしなことになつていく。ともかくにも、言えることがあるとすれば一つ。それはつまり、救いようのない悲劇だということ。

過去に一度だけ、夏華は「中華なんてもう懲りごりです…」を「」押ししたことがある。案の定、兄とは大喧嘩になつたが、こちら

としても色々な意味で引けなかつた時期だつたのだ。

そうして次の日、学校の楽しいお昼時間にて開かれた弁当箱。中身は純和風だつた。おにぎりが三つ。ただそれだけ。たくわんすら添えられてない。それで十分だつた。

この一時、夏華は人目も憚らず涙した。あの感動は、あの感激は、時が経つても忘れられるものではない。その気持ちは收拾がつかず、今でもコンビニのおにぎりを見る度、胸を詰ませてている。それくらいに衝撃的な一幕。だから、この時は思いもしなかつたのだ。終わりが、もうすぐそこまで来ていることを。

それは食べた時にやつてきた。おにぎりのタネ　　具材は、酢豚だつたのだ。

当時、料理のレパートリーが少なかつた冬治は三つしか作れなかつた。酢豚、チャーハン、そしてラーメン。不幸なのは、夏華がそれを知つてしまつてゐるといふ点。加えて弁当箱には、おにぎりが三つ。

夏華の目が眩んだ瞳が、急激に冷静さを取り戻していく。すると、どうだらう。三つの三角の内一つだけ、明らかに萎びた、むしろビチャビチャなソレがあつた。所々原型が崩れ、米粒の隙間からは二ユル二ユルの

「ひいつ！？」

「どうした？ 何か悲鳴みたいのが聞こえたけど……それより、ほら」

こちらが心の傷を回想をしてゐる内に、どうやら冬治は料理を作り終えようだ。テーブルに置かれる、三つの箱物。一つは白色、一つは紺色、最後の一つは赤色の風呂敷に包まれてゐる。お弁当だ。ちなみに白の弁当箱は、夏華のお昼用だ。

「今回もよろしく頼む」

「かしこまりました」

言つて夏華はわざとらしくかしこまる。よつやく、二人が食卓についた。

「ではでは…… いただきます」

「いただきまーす」

お決まりの声をかけ合い、食事に入る。夏華は、事前に台所から持ち出したキッチンペーパーで、まずは油の吸い出しに終始したのだつた。

第一章 不確定な眞実（うた）【兄妹で和氣藹々】

「お前なあ……」

その一言を皮切りに、冬治の説教が再び始められる。片や夏華は「はいはーい」で受け流すと、雰囲気を和らげるべく、テーブルに置かれたりモコンを手に取つた。

テレビをつける。

「夏。食事中にテレビを見るんじゃない
「はいはーい」

空返事しながらに取り合わない。夏華は、ぱさぱさにしたチャーハンをレンゲで掬うと、かつこむ。ふわっと、芳ばしい香りと共に馴染みの薄味が口いっぱいに広がつた。

丁度そこに、映像と音声が入つてくる。それは現場付近、その上空からのリポート。ヘリを利用しての実況中継だつた。

『……』
『……』
幸い深夜の出来事ということもあってか、特に目立つた混乱、被害等は見受けられません！ ですが、ここから見ていただければ分かるでしょうか？ 分断された逆さまの先端に、上を失つた東京タワー……そびえる光景はまさに異様といった所です！ そして、それ以上に奇妙なのがこの断面！ 綺麗に真つ二つとなつています！ さきほど、東京タワー建設に携わつた方からお話を聞くことができましたが、このような形での崩落は構造上ありえないとのこと！ ならば、なぜ犯人はこのようなことができたのでしょうか？ 謎が深まるばかりです！ どうやつたらこんなことができるのか、また誰が、何の為にこのようなことをしたのか……今後警察の実況見分を待つて、明らかになると思われます！ こちらからは以上です！』
プロペラ音がけたましいせいか、ナレーターの男は大声で、眼下に広がる景色を中継している。必死さと緊迫感がよく伝わつてくる。スタジオへの返し方も上手で、ベテランの域を感じさせた。

一方、冬治はといふと、画面を見ず黙々と酸辣湯をすすつてい
る。夏華と向かい合わせに座つてゐるが、そもそもがテレビから背を
向ける格好なのだが、どちらにせよ彼が食事中、別のことをする
ところではない。それは、たとえば緊急速報をやつしていく、その
音声が耳に入つてきたとしても同じこと。

普段、これでもかといふくらい荒さが田立つ兄でも、それが家庭
のことになると一変するのだ。古風な考え方を貫き、そうするよう
家族に言い聞かせる。一家の長と云のはどこもかしこも、こんな
ものなのかもしない。

そんな余計なことを夏華が考へてゐる内に、いつのまにか画面はス
タジオを映していた。そこでは襟元を正したアナウンサーの女性が、
つらつらと手元に置かれた原稿を読み上げている。

『　　のようです。唯一犠牲になつた同電波塔の警備員、室井健人むろいけんとさんについてですが、警察の調べによると実は暴力団組織、白道会はくどうかいの元組員だったとの情報が入つてきており、それが今回の東京タワ
ー崩落事件と何らかの関係性があると見て現在　』

大事な締めの言葉、その直前でピッという効果音と共に画面が真
っ黒になる。夏華はリモコンを置いたはずの位置に田を向ける。
ない。

次に冬治の方に目を向ける。

あつた。

誰が肝心の所でテレビを消したかは、言つまでもなかつた。

「兄さん。それは宣戦布告ですね？」

「はあ？」

「まさかこんなことになるなんて……正直失望しました。リモコン
を奪い合つが兄妹の常といえども、妹思いの兄さんならきっとしな
い、そう信じていましたのに」

「十分思つてゐるじゃないか」

「どこがですか？」

その問いに冬治は、信じられない一言を発した。

「だつてテレビ見ながらじや味、分からんだろう？」

普通の答え。真っ当な回答。それでも、夏華は耳を疑つた。

（ 中華を、味わつて食べると？）

日々、料理を作つてくれる冬治には感謝している。が、ここ一〇年以上、夏華の朝食といったら中華なのだ。ならばと、夕食といえば中華なのだ。

ずっと中華中心の食生活を送つてきた。最近では通りで「ラーメン」というのぼりを見かけては、知らず地団太を踏んだもの。それでいてこの中華を味わえなど、夏華にとつては挑発行為以外の何ものでもない。

つまり、やることは一つだつた。

「兄さん…………あなたという人はあつ！」

そして、兄妹喧嘩は始められた。

何時間と待たず始められる一人のささいな喧嘩。

当の一人は暴力行為はないものの、熾烈な舌戦をくり広げている。それは家族ならではの、厳しい言葉の連續。「中華ばかり食べさせるなんてありえない……健康管理がなつてないんですよ！ そんなんで保護者面ですか！」から「そんなんだから女性にフられるんです！」という意味不明のものまで、様々。

無論、冬治も「食事でのマナーはな、普段やつとかないといざつて時にできやしないんだ。困るのはお前なんだぞ！」から「そもそも潔癖症なのが悪い！」という訳分からぬものまで言いだし、引けはとらなかつた。

相変わらずな二人に、毎度の口喧嘩。

それは無駄に見えて実の所、夏華にとつて大切な家族の時間でもあつた。

第一章 不確かなる眞実（うた）【歌聴きながらの登校】

「ほりもついんな時間になっちゃたじゃないですか兄さんのクソバカ！」

食卓での家族喧嘩といつ、ありきたりなことをしてしまった結果、気付けばもうこんな時間。夏華は玄関で靴を履きながら、踵かかとをトントンしていた。はめた腕時計で時間を確認しながら、出入り口の扉に手をかける。と同時に、

「夏」

声がかけられる。

「何ですか！」

焦つてるせいか、同じテンションで返してしまつ。

「行つてらっしゃい。気をつけて」

それは当たり前の、何てことない決まり^いと。夏華はまともに取り合わない。

「はいはーい。行つてきます」

そのままの勢いで玄関を出た。すると眩しい照り返しに晒され、少しふらついてしまう。カラッとした冬空。雲一つない青空に、今にも吸い込まれそうだった。見上げると一度ツグミが三羽、蒼穹に羽ばたいていく。

「寒つ」

室内との温度差に、体を身震いしてしまつ。

夏華はすぐ側に止められた自転車のスタンド、そのロックを外すと蹴り上げた。後、跨る。

サドルにお尻を乗せると冷氣のせいか、腰を上げるほどに冷たかつた。

これで出かける準備は整つた。夏華は制服のポケットをまさぐると、その中にある紐状の物を掴み取り出す。イヤホンだった。その先端は、MP3プレーヤーに取り付けられてる。

ペダルを漕ぐと共に、押された再生ボタン。

初めて流れるのは、大好きな兄の歌だった。

今では表舞台で歌われることのなくなった、そんな昔の思い出。

「…………よし！」

そして、夏華の一日が始まった。何が起こるか分からぬ、だからこそ憂鬱で、だからこそ希望ある、そんな一日が。

チャリラリラーン

それは陽気な旋律 インストロ あの東京タワー アマチュア で流した曲と、全くの同曲だった。違うのは歌い手が夏華でなく、冬冶だということ。

夏華はハンドルを握る指で、小刻みにリズムを取つた。そうしたくなるくらいに、キャッチーな音律。

流れる景色は、ついさっきまでとは明らかに違つたのだった。

?始まりの歌 五線譜 ジャ 伝わらない ナバ 十八番

でかけましよう 世界を君色に塗り変えてこう？

Âメロに、夏華は穏やかな気持ちになつた。澄んだ、人を奮わせるだけの声質。飾らないそれは、磨かれた宝石に似た円熟度を放つていた。

元気が出るテンポの良い入り。

暖かな曲想は、冬というよりは春のうららかを思わせる。そういう意味では、これから季節にぴつたりだった。

一方、自転車に乗つた夏華は歩行者らを追い抜き、坂道を下つていく。住宅に面したそこは、地元の人人がよく使う道だった。一つまた一つと、家々が流れていく。

いつもの光景。

けれども歌を聴く夏華にとって、映る光景は一味も一味も違つた。道行く人が明るく見え、どんな暗い顔をしたサラリーマンでも、

その瞳の奥に宿る強さを見ていた。

並び立つ何てことないガードレールや、冷たいアスファルトの路面。そんな氣にも留めないものが、一瞬にして煌びやかな花道へと移り変わる。

今日もここから、一日が始まる。

ここからが、一日の始まり。

当たり前すぎて忘れがちな、そういう一步の重みを歌は気づかせてくれる。

勿論、大袈裟といえば大袈裟。

けれど楽しかった。ただ純粹に、歌の世界に浸かってみたい。変な見栄も、意地も恥も脇に置けさえすれば いくらでも世界は自分色に塗りかえることができる。

? 青空 太陽 どしや降りの心

うらはらの心 精一杯のSOS

響く マイミユージック あなたの痛みに
贈ります 目一杯の ラブソングを！？

Bメロは、Aメロのテンポに合わせながらも、よりリズミカルなものだった。段々と盛り上がりしていく定石のメロディーライン。

ただ、夏華は歌を聴いてる最中、急に顔をしかめる。今頃になつてあの、東京タワー崩落事件のことが頭をよぎつたのだ。

取り返しのつかないことをした。そのことへの罪悪感は拭えないが、それとは関係なく歌われる詞が夏華の心を揺さぶっていく。そこに込められた真心は、より人を高揚させ、浮き足立たすだけの魅力で溢れていた。

サビ前の伴奏で、ドラムの打音が強くなつていく。それに合わせ、ギター・ベースを含めた音の総和が一気に耳へ押し寄せてきた。否応なく、聞き手のボルテージは高められる。

いつしか夏華は罪の意識など、どこか隅の方に追いやってしまつていた。

勿論、仮初めといえば仮初め。

歌が終わればまた現実に戻り、罪悪感に苛まれることになるのは分かっている。それでも忘れられた。赦されていた。

この一時ばかりは確かに、夏華は救わっていたのだった。

? 真っ逆さまに落ちた あなたを救うための フレーズ

響かせるよ

どんな遠くからでも 届かない声にも フレーズ

届いてるかな

あなたが幸せでも 不幸せでも どんな君でも僕は待ってるから
嬉しくなつたら 苦しくなつたら いつでもおいで

聴きにおいでよ あなたが選ぶ十八番ボクを?

（メロ）（サビ）は、流れるようにしたためられた調子だった。勢
いが感じられるそれは、これからを祝福する、そんな後押しが込め
られている。

ともすれば、今の心境にぴったりの詞。

慰めになればと選んだ曲。

それが自分の心にどう響いたかは、上手く説明できない。
変わったことといつたら、漕ぐペダルの回りが知らず速められた
ことくらい。

気づけば、坂道は平坦な道へと切り替わっていた。後はうねるよ
うに舗道を蛇行し、いつもの上り坂を越えれば、そこではもう学校
が見えてくる。

とはいって、それまでに待ち受けているのは真冬の厳しさ。歌を聴
き入つてたら寒さを忘れました、なんて都合の良いことは起こらない。
現に手袋を付け忘れた夏華の手は、寒風で痛いくらいに凍えて
いた。耳回りもこの寒さで真っ赤になり、堪えきれず手で擦つたほど。
けれど。

けれども歌を聴いてると何故か、逃げたくなるような世界はその

寒さえ、その痛みさえも嫌いになれない世界へと印象を変えていつたのだった。

第一章 不確かなる眞実（うた）【学校に到着】

「おはよーう

「おはよーう」

学校に着いた夏華は、自転車を所定の駐輪場に置くと、そこで鉢合わせた顔見知りと声をかけ合っていた。

女学生同士ならではの、歯の浮いた声色。

正直、あまり慣れたものではなかつた。ただ、学校生活を快適に過ごすためにはなくてはならないものもあるので、満面の笑みでこなしていく。

駐輪場のある校舎裏からぐるりと回つて表に出ると、そこでは登校する学生でごつた返していた。

（間に合つたあ……）

たくさんの人人がいるおかげで、夏華はホツとしていた。そのまま、その大勢の流れに混じつて校内へと入る。下駄箱に辿り着くと靴からなのか、そこ特有の何とも言えない匂いが鼻についた。

下駄箱は左から一年生、二年生、三年生の順に区分けされている。夏華は高校一年生なので、真ん中を突き進んだ。周りを見ると心なしか、急いでる人がちらほら見受けられる。まだ時間はあるが安全を期したい、そんな微妙な頃合なのだろう。

人に流されやすい性格なのか、何だか夏華も焦つてきた。自分の下駄箱から上履きを取りだすといい加減に履き、まずは三階を目指す。ちなみにここは三階建てで、三階から一年生、二年生、三年生の順に階を下がつていく形をとつていた。^{テリトリー}と、いうことは夏華が本来向かうべきは一階で、三階は一年生の領域である。

けれども、そこに行く理由はちゃんと存在していた。渡さなければいけないのだ。妙に重く、パンパンになつてゐる学生鞄の中にあるものを。あの弟に。

従つて夏華は、急いで階段を駆け上がつていったのだった。

「 い、 ですってえ……？」

三階ところ、 いつもより多い段差を駆け上がってきた夏華。 すました顔して息切れしている。 が、 時間は待ってくれないので、 彼がいるであろう教室で恥ずかしながらそのクラスメイトを呼んだのだ。 そして、 呼び出してくれるよう頼んだのだが、 当の本人はまだ来ていないとのこと。

そもそも下級生ばかりの所にぽつんといる上級生というだけで、 尊めを受けてるも当然だつた。 登校中のドタバタがあつてか、 実際はさほど注目されてないが、 夏華自身は顔を真つ赤にさせている。

（あんのおバカ）

怒りの矛先は、 まつすぐ弟に向いていた。

夏華は今度、 階段を駆け下りていく。 長年の付き合いからか大体の居場所は分かつていた。 とはいっても、 ゆっくりなどしていられない。 何せ階を上がつてくる学生らの雰囲気が、 危機迫るものなのだ。 「 どけどけどけえ！」 とでも言つてるかのよくな瞳で、 突つ込んでくる男子学生すらいる。

もう、 時間がない。

夏華は、 最悪の事態を想像しながらも足を走らした。 一階 そ のパソコン室へと。

後によしよ。 そう何度も思うが、 どうにも踏み切れない。

実際、 遅刻などしたことのない自ら。 ではそのこだわりを捨てても渡さなければならない物なのか、 と問われればそうでもない。 そうでもないのだが結局の所、 一階まで来てしまつている夏華なのであつた。

校内に、 無情の鐘が鳴り響く。

夏華はとりあえず弟を引っ叩こう、 そう心に誓つていた。

パソコン座前まで歩くと、その扉を開き中へと入る。

(……いた)

案の定、彼 加藤千己かとう せんじはそこにいた。ずらつと並ぶ数十のパソコン、その内の一つに座っている。入ってきたこちらを気にもせず、勝手に電源を入れたであろうパソコンの画面を見ていた。打たれるキーボードのかちやかちやした音が、静まり返った空間にはよく響く。

夏華は一回散に千己の元へと向かつた。彼は一年生だが、とてもそうは見えない小柄な体型をしている。そのことは彼もコンプレックスに思つてゐるようで、弄るこれでもかといつぶらに怒る。ただ、その形姿に合つた可愛らしい顔つきをしているので、夏華はむしろ背がちつちやくて良かつたなと思つていた。よく反射的に抱き締めたくなるのだ。そんな時、手が届く高さにあるといふのはとても素晴らしいこと。

とはいへ、今の千己は何か違つた。

まるで時代劇に出てくる悪代官のよつな下卑た笑みで、口角を釣り上がらせてはニヤニヤしていふ。彼はいつもかける黒縁眼鏡を手で少し持ち上げて、下した。その仕草もキザっぽい。

とにかく気持ち悪いので夏華は千己の近くまで行くと、とりあえず引つ叩いた。

「どへええ！？」

リアクション

普通、叩かれた人がおよそ言わないであろう反応をする彼。姉は弟の将来が心配だった。

「アンタねえ……そういう中一的な所、どうにかなさい。それより何やつてんのよ、チコチコ」

「チコチコ言うな！ ウインカーか俺は。つて何だ、夏か」
もう一発引つ叩いた。

「ぎやぴー！？」

「言つか！」

思わずツツ「んでしまつ夏華。

「何がだ！ て、いか何しやがる！」

「姉さんと呼びなさい。後、田上の人に対しては敬語。親しき仲にも礼儀あり、でしょ？」

「出たよ潔癖症^{けっぴ}」

まるでアメリカ人、ぱりに両手を肩の所に上げ、横に動かしヤツテラレナイヨを表現する。その、ひらひらさせた掌を夏華は掴むと、軽く関節技を決めたのだった。

途端、千己が泣きべそをかく。

「……たく」

どうにも姉の前では、甘えがちな性格が出てしまつようだった。夏華は痛めた千己の手を撫でると、抱き締める。

「ちゅういな」

一瞬、彼の口から聞き捨てならない腹黒さを耳にした気がした。が、母性本能をくすぐられた夏華は姉っぽいことをしたくてならない。なので今のは特にお咎めなしに

「臭い」

というか、そんなことより千己の体臭の方が気になつていた。少しきつめのそれは、友達には分からぬ^{にお}が身内には分かる、そんな微かな臭い。

夏華は注意せずにはいられなかつた。

「アンタ、昨日お風呂に入らなかつたでしょ？ 体を不潔にしてると女の子にモテないわよ。それに学生服も皺^くくちゃだし、髪もボサボサ」

「三次元らしいもの言いだな。結構。俺の生きる一次元じゃあ、そんなん『くくんくん。弟君の匂いがする。えへへ』で済ませられちまうんだなこれが！」

「今日はきちんと、家に帰つてきなさいよ。昨日のは私から兄さんにちゃんと理由付けといったけど、今日も帰つてこなかつたらアンタ

……無断外泊つてことになるからね」

夏華は、千己の相手はせずに用件だけ伝える。そして、鞄を開け取り出した。紺色のお弁当を。

「出たな中華弁当！」

「いちいちうるさい。もう」

夏華は彼の妙なテンションに辟易しながらも、どうしてか同情していた。中華づくしに苦しめられてきたのは、何も夏華だけではないのだ。

「ここまできたら色々と諦められるでしょう？　はい。後これ

もう一つ、小さめで円錐状のタッパをその弁当の上に置く。その際、何かタップンといった水音がした。小脇にはレンゲ。

「おい今タップンって言つたぞ！　タップンで！」

「だから……デザートよ」

「な訳あるか！　ていうかアレでしょー。アレなんでしょー。弁当にあるまじきアレやつちやつたつことだよね！　あのビチャビチヤでニコルニコルの」

「ひいっー？」

一人して身震いしてしまった。条件反射の賜物。だが、夏華は仮にも姉である。なので、できるだけ千己を落ちつかせられるよう、努めて優しく語りかけた。

「安心なさい。麵は伸びるでしょうなど、味は保証できる。お昼休みになつてからだつて傷んだりはしないでしょーし……周りなんて気にしないで啜れば」

「俺にそんな勇気はねえ！」

夏華にもそんな勇気はなかつた。お昼休みにラーメン弁当なんて、いじめてください、そうクラスメイトに言つてみようつなものだ。

「私だつて辛いのよ。こんな、朝からなのよ

込み上げるものをおさえきれず、胸を詰まらした。すると、千己がその頭を撫でる。お互いこの一點については、どうやら気持ちが通じ合つてゐるようだつた。

「俺ら、苦労が尽きねえな」

「ええ……ところでアンタ、パソコンで何やつてたの?」

言いながら夏華は、パソコンの画面を見やる。そこには、有名な2チャンネルと呼ばれるサイトの画面が映っていた。要は何か提示された話題について、色々な人が色々なことを語り合つ、そんな感じのものだ。

彼が開いてたブラウザの画面、その左上に表示されていたのは「東京タワー崩落事件」という文字の羅列。

夏華は中をちょっと覗いてみた。

第一章 不確かなる眞実（うた）【2チャンネル】

ぶつちやけ誰の仕業だと思つよ？ 何かニュースじや暴力団だの組織ぐるみだの言つてるけど実際どうなん？

うーん。何か白道会が絡んでるみたいなこと言つてるけど、どうだろうな。だつてあそこ、規模小さくね？ 華道会くらいでつかな組織なら、あのくらいできても不思議じやないけど

知つてるか？ 白道会つて実は、華道会からの分派なんだぜ

マジか！？ ジやあ白道会の裏には華道会が糸を引いてて、それで日本を狂氣の沙汰に……ブルブル

ただの暴力団抗争の一種じやね？

てか、さつきの華道会と白道会の件は釣りだぞ！ くだりみんな騙され

るな！

釣りじやねえし……てかそんなことして何になるん
実はやつたの、俺だ。生まれつき世界を変えられるんだ。言いたいことは？

給料上げてくれ

あのさ、自分だけかもしれんけどこれつてさ、9・11を思い出さね。あの貿易センタービルに突っ込んだヤツ

あー、てことはテロ！？ イラクから！？ いやいや北朝鮮からか！？

いやいや。無知すぎるだろおまこら。そもそも9・11の貿易セントラービル崩落には、綿密に計算された計画だつたんだよ。人種のつぼとも言うべき多民族国家のアメリカは元々、多くの民族対立や遺恨を抱えている。で、あの広大な領土。何か大きなきつかけでもあれば、そういう問題が一気に噴出して、アメリカつて国がバラバラになる恐れすらあつたんだ。そこでテロリスト達が考え出したのが、あの9・11。アメリカの象徴とも言える建物をぶつ壊すこと、国家分裂を図つた。発生直後、街のあちこちに母国の星条

旗が掲げられるのが目立つたりしたのは、その反動 アメリカの危機感の表れつて訳。で、分裂しそうになつた国家を再び一つにする為に、同じ方向を向かせる為にイラク戦争を吹っかけた。それに比べて日本はどうだ？ 多民族じゃないわ、東京タワーはただの観光名所だわ、全然違うじやねえか。電波塔の役割を担つてゐる東京スカイツリーなら、まだ話は分かるけど

東京タワーって…………日本の象徴的存在じやね？

はいはい。ま、要はテロと

そそ。テロテロ

待て待て。ヤクザの件はどうなつた？

いやもう何かどれも違くな。そもそもあんなん、人ができる業じやねえつて。何かもつとぶつ飛んだ何かが作用してさあ神だ

「ななな何てことしやがる！！」

途端、千己の抗議の声が飛ぶ。気づいたら夏華は、パソコンの電源ボタンを指圧していた。

結果、真っ黒になつたパソコン画面。とはいえ、強制終了させた夏華に負い目など皆無だつた。

大体どのスレが弟のものか分かつてしまつ。それだけに、やつぱり姉は弟の将来が心配でならなかつた。

「こんなくだらない仮想世界とは早くおさらばなさい。いいわね？ 後、サボるなら最低限の出席日数は守ること。でないと

「でないと？」

「兄さんに知られる」

「…………！」

脅しとしては十分すぎる言葉だつた。千己は肛門が縮こまつたといつた所だらうか、体を強張らせている。

「ま、私がチクるなんてことはないから、そこは安心なさい。といふことで私は授業に出るんで、また後でね」

そう言つて用事を済ませると、夏華はやつと自分のことをすべく、

一階への一步を踏み出したのだった。

校内に、無情の鐘が鳴り響く。

一回目の鐘の音、ということとは朝礼が終わり、一時間目の授業が始まつたということ。より教室に入るのが気まずくなつたのを思い知られながらも、かといって向かわすにはいられない性分の夏華であった。

第一章 不確かなる眞実（うた）【華道会と白道会】

夏華は、学校の授業を一時間田の中頃から参加し、残りの授業も無難にこなしていった。途中、お昼休みに「私今日、食堂で食べることにしたの」という嘘をつき、食したあの味は今でも思い出さない。わざわざ屋上という寒空に出たせいで、リップクリームを塗った唇は紫がかつてしまつたもの。たまたまそこに居合わせた千己の、箸を持つ手は震えていた。冬空の下、思わずそんな彼を抱き呴び泣いたことはこの一家にとつて珍しいことではなかつた。

いつもして何だかんだで、気づけば放課後。

夏華は再び下駄箱の所まで来ていた。とはいって、このまま家路に着くわけでもない。やることがあるので、渡さなければいけない。少し軽くなつた学生鞄の中にあるものを。あの姉ひとに。

夏華はすべきことの為に靴を履いて、校舎を出る。見える風景は登校時の、学生がわんさかいた時とはガラリと変わつていたのだった。

黒塗りのベンツが止まつてゐる。校庭　　グラウンドを横切つた先、つまりは夏華の目前に。

煌びやかな艶に美しい曲線のフォルム。

全長にして五メートルはあるうか。

「ドドン！」といつた効果音が聞こえてきそつなくらい、その車は校庭に映えている。

ただ、それ以上に夏華が気になつてるのはタイヤ痕の方。

まるでその車体でグラウンドをドリフト走行してきたかのように、そこかしこにそれが散見される。土に残るそれらは、ここでこれから部活をしようという人達にとっては、この上ない迷惑行為だった。よく漫画などにある、不良が主人公の学校に乗り込んでくるよりた

ちが悪いように思える。ただ、下校する学生らにとつても先生らにとつても、これは見慣れた光景なので何も言わない。というか、見て見ぬふりをしていた。が、問題の渦中にいる夏華はそれがしたくてもできない。

（また……）

夏華は心中穏やかでなかつた。それでも驚かないのは、前例があるから。じつこうのが実の所、自身に友達ができるづらい理由でもあつた。

じつらが待つてみせても、どうやら何も起こりそうにない。なのでまずはいかにも高そうなベンツ、そのバンパーを蹴り上げてみた。途端、車のドアが開き、が体の大きいスース姿の男が飛び出でくる。強張つた顔つきで頬には、刃物によるものか痛々しい裂傷の痕が刻まれていた。厳しいその風貌は四〇代の齢に合つた、そんな雰囲気を醸しだしている。

その中年男が放つ渋い一声。

それは、

「お嬢！ 何するんですか！」

およそ現実世界では耳にしない呼びかけだつた。おそらくは弟によるものであろう。

夏華は頭痛でもないのに、頭を抱えた。

「近藤。何ですか、その呼び方は」

「い、いえ。千己坊が、お嬢は本当はそう呼ばれたいんだつて、そう教えていただきまして」

「私はこれまでも、そしてこれからも、そんな呼び名に喜びは覚えることはないでしよう。だからいつも通りの呼び方に戻してください

い

「分かりました！ お嬢！」

分かつてないようだつた。

夏華は困つたように人差し指をおでこに当てる、考へ込む。

（あんのおバカ。この堅物に何言つた？）

基本的に近藤という人間は仁義に熱く、義理堅い。なので、言われたことはバカの一つ覚えみたいに遵守するのだ。が、さつきの言葉には耳を傾けなかつた。こんなこと普通は考えられない。

するとパシャッと、何かのシャッター音を耳にした。見ると、近藤がこちらに向か写メを撮つてゐる。あまり見ない、といつより初めての光景だつた。

「近藤」

名前を呼びながら睨みつける。

「あ、すみません。けど仕方ないんです。ミッションが……」

「ミッション?」

さつきの「お嬢」といふ「ミッション」といふ、何やら一次元の匂いがプンプンする。

夏華はその写メールを撮つた携帯をやおら彼からもぎ取ると、画面を覗く。

映つっていたのは、困り顔をする夏華だつた。

とりあえずはその画面を閉じ、次にメールの受信ボックスを開いてみる。すると、新着で未開封なのがあつた。一件。送り主の欄には「当局」。

読んでみる。打たれていた文面は非常に簡素なものだつた。

『それが萌え』

夏華は思う。なるほど、そういうことかと。

次に、開封済みのも読んでみる。すると、

『今回、君に与えられた指令は夏華こと、加藤夏華の送迎。ただ、いつもとは勝手が違う。どこからか敵に、その情報が漏れてしまつたのだ。よつて奴らは君が停車させる所定の位置に合わせ、狙撃手を忍ばせている恐れがある。なので今回、相手の裏をかき校内に乗り込むとしよう。無論、車でだ。が、そこも安心できる環境とは言ひがたい。おそらく最大の難関はグラウンド。最も見晴らしがよく、故に仕掛けられやすい。更に事前探査してもらつた所、その地中にはBAUER24という最新鋭の地雷が至る所に埋められててゐる

とのこと。それは人が安堵すると爆発するという、とにかく一癖も二癖もある厄介物だ。つまり君は校庭に入つたら、敵の照準が車体に合わぬよう撓乱させ、且つ下に潜む爆破物を回避しながら進まなければならぬ。とても困難な道のりだ。が、君ならやつてくれる信じている。こちらからは以上だ』

『夏華の言動には注意せよ。奴は仮にも女子高生キャラ。必然的にシンデレラがついて回る。今更、このことに説明はいるまい？ 嫌と言つたら好き。やめると言つたらやつてくれ。つまりは嫌よ嫌よも好きの内という設定で、一次元では空氣と同じ扱いを受けている。故に廃れたテンプレだが、そこには鉄板ならではの熱き萌えが

メールの文面にはまだ続きがあつたが、もう十分だつた。何で校庭がアクション映画ばりの惨状になつてているのか、何でこちらが呼び名の訂正を求めても流されたのか、色んなことがよく分かる。（こういつたてんやわんやを楽しめる場所といつたら……あそこしかないか）

そう思いながら、夏華は学校の屋上を見上げる。と同時、小さな人影が引っ込んだ。

（もうバレてるつて）

高みの見物と洒落込んだつもりであろうが、姉は何もかもお見通しである。

「近藤^{これ}、携帯、没収しますね」

「え、ですがこれからその画像を若い衆に高値で売りつけるつていう、実はお嬢が人気者だつていう設定を」

「近藤……あなた、んなダンディな声で何言つてやがりますか。何でもかんでも人の言つこと、丸呑みにしそぎなんです。いいですか。千己の言つことは全部でたらめです。私の言つことだけを信じなさい。いいですね？」

「え、ですが」

「いいですね？」

「は、はい」

「これだけ念押ししたことで、ようやく近藤は夏華の『いつ』とを聞くようになる。

「では、まず呼び名から改めましょう。でも、いつも通りに呼んでください」

「え？ 私、いつもは夏華様と」

「夏ちゃん」と

「夏華様」

「夏ちゃん」と

有無言わざぬ視線で、夏華は近藤の答えを待つ。

言わせたい。何か言わせたいのだ。

対して彼は一瞬、引きつった顔を見せる。が、すぐに気持ちを改めるように佇まいを正した。

（……言ひ気だ）

自分で振ったくせして正直、おつかなびっくりな面持ちの夏華であつた。

そして近藤は、遂にあの言葉を口にする。

あの渋い重低音で。

あのファンシーな名を。

「お母様が待つておられます。行きましょう」

「かあっ！」

たまらず夏華は腹を抱えて、車のボンネットを叩く。

「おやめください！ 夏ちゃん！」

加えて、近藤のダンディズムが追い込みをかける。夏華はたまらなかつた。

「夏ちゃん！ 夏ちゃん！」

爆笑に拍車がかかるばかり。むしろ近藤という人間はわざと言つてるんじゃないかと、そんな悪戯すら邪推してしまつ。

結局の所、姉弟共にやることは似たり寄つたりなのであつた。

第一章 不確かなる眞実（うた）【華道会と白道会②】

「 ちゃんと校庭を元通りにするとか、後片付けはしてくださいよ。堅気かたきの人には迷惑をかけない。そうですよね？」

車内に乗り込むと同時に、夏華は運転席に座る近藤を正す。

「 重々承知しております。その点は抜かりなく」

という彼の言葉に、夏華は窓からグラウンドを覗いてみると、せわしなくトンボをかける厳つい極道の人らが窺えた。いつも銃チャカやら薬ヤクやらが専売特許な人達。それだけに、やつてることが子供のおままで滑稽けきだった。毎度、どこから降つて沸いたんだと思うのだが、この組織の規模から言えば何があつても不思議ではない。

もう車は走り出していた。見える校庭の景色は流れていき、後に見えなくなっていく。

「 言つても無駄だということは分かつてますが、近藤。学校にまで押しかけてくるなんてこと、しないで頂きたい。おかげで私、今日も学校で気まずい思いをしました」

「 それは誠に心苦しい限りです。ですが、そうであるなら定期的にお母様にお会いになつてください。でないと、またこんなことの繰り返しになつてしまします」

「 だつたら母さんが家うちに来ればいいでしょ？」

「 それ……本気で仰つてるんですか？」

勿論、憎まれ口にすぎなかつた。その理由は単純明快。

もし万が一にも母が家に来て、兄と出くわそうものなら血の雨が降るからだ。それは冗談でも誇張した表現でもない。事実、そういう過去があるのだ。

どどのつまり、母と兄は犬猿の仲だといつ」と。

「どうか、夏華が母と会うと、こと自体すら、ともすれば危ない橋を渡つてゐるということになる。当然、兄はそんなこと知らない。知らうものなら、家族喧嘩では済まない抗争が起つて。本当にそんなことが起きてしまうのだから、心は休まらない。」

夏華の家系、その相関関係はとても複雑なのだ。

そして、そのことは夏華や近藤に限らず、この組織を生きる人間にとつては周知の事柄。つまりは悩みの種といつことだつた。

「にしたつてこのままじゃいざれ、学校から家に連絡が来ますよ。そしたら必然的に保護者である兄さんに話が伝わる訳で……どうにしろ取り返しのつかないことに」

「安心してください。そこはきちんと圧力はかけ ぬおつ！？」
近藤が素つ頓狂な声を上げる。それもそのはず。夏華が後部座席から、前の運転席を蹴つ飛ばしたのだ。

「何がどうしてそんな脅迫めいたことをしたってんですかええつ…」「おやめください夏ちゃん！ 悪ふざけにも程がありますぞ」
呼び名のせいなのか、どちらかといつと近藤の方がふざけてる気がする。無論、こちらとて高校二年生にもなつて座席を蹴ることに喜びを覚える、そんな能天気な生き方はしてこなかつた。ちゃんとそれ相応の理由があるのだ。

夏華はちょっと色々考えてみる。

そういえばさつきの一時間目、遅刻してきたのに先生から何も言われなかつたなあとか。

そういえばここ最近ずっと、先生の笑顔が妙に痛々しかつたなあとか。

そういえば帰り、教卓に置かれた出席名簿で自分の所を覗き見したら、無遅刻無欠席になつてたなあとか。

こう振り返つてみると夏華は、思い当たる節がありすぎて逆に困つていた。なので憂さ晴らしにもう三度、同じ所をゲシゲシ蹴る。対する近藤は、反応もバカの一つ覚えみたいに忠実だつた。

「夏ちゃん！ 夏ちゃん！ 夏ちゃん！」

喧嘩を売つてゐる そう感じずにはいられない。
実際、高級車の乗り心地が最悪な夏華だった。

第一章 不確かなる眞実（うた）【華道会と白道会③】

そうじつしてゐる間にもベンツは、他の一般車と同じく公道を行っていく。すると、前方の信号が赤になり、道路上に多くの車列が並んだ。明らかに他車と一緒に画すその形は、周りから注目を浴びるには十分だった。前後左右から、車内を窺おうとする奇異の視線を感じる。

夏華は何も悪いことはしていないといつて、小さく体を縮こまらせた。恥ずかしさからか、顔回りがいやに熱い。

（どうか私、用があるんですけど）

鞄の中に入ったお弁当を、姉に渡さなければならぬのだ。冬といつ季節性もあってか、食材が傷むことはないだろうが、それでも早く渡すにこしたことはない。ただ、文句を言おうにもその相手は、一度言いだしたら聞かない性分。夏華自身、近藤については重々承知してるので何も言ひようがなかつた。

とはいへ、別に母と会うことには抵抗はない。むしろ母のことは大好きだし、毎日会えるものなら会つていい。そもそも家族して、てんてバラバラなのがおかしいのだ。けど、そんなことを口にしようものなら兄が悲しむ。露骨に辛そうな顔をさせてしまう。それだけはさせたくないのに、けど、どうしてなのがが分からなくて……。結局、無知で無力な自らは何もできなかつた。

今までは。

（ 　ん？ ）

制服のポケットから、何やら振動を感じる。携帯のバイブレーション。さつき近藤から取り上げた物ではなく、自分のからだつた。夏華がポケットからそれを取り出す頃には、震えは止まつていて。その短さからといってメールの着信。

夏華は携帯画面から受信ボックスを開く。すると新着メールが一件、届いていた。開いてみる。

『助けてほしいか？』

送り主の欄には「チコチコ」。弟からだつた。傲慢なその文面は、屋上から人を見下したテンションそのままに送つたといった所だろう。

とはいへ、かくも女性というのは偉そうな人が嫌いなもの。なので当の夏華は返信しなかつた。

すると、携帯がバイブする。ついさっきと変わらずの、着信メール。

夏華は再度同じ動作を繰り返し、それを開いてみた。

『助けてほしいですか？』

敬語になつていた。弟思いの姉としては、思わずクスリとしてしまつ。きっとメールを送つた後に、反省したのだろう。こちらが返信しなかつたというのもあるが、それ以上に千己は心配症なのだ。普通なら「めんどくせえ奴」という括りの下、切つて捨てられる所だが、そこは家族。

夏華は彼が好きそうな文面を思案しつつ、指を走らせ文字を打つていつた。結果、できた完成形がこれ。

『助けて。弟君』

送信した。すかさず返信される。

『音声メッセージでよろ』

という文字と共に、添付ファイルがあつた。何やら見たことない文字の羅列。開いてみるとその文字を選択し、決定ボタンを押し込む。

途端、タッチパネル画面いつぱいにコンテンサマイクが現れた。その画面下には横棒のゲージがあり、周囲の音量に合わせ上がったり下がつたりしている。と、なるとこのゲージはボリュームにあたり、送話口から音を取つてるのであらう。

(声を吹き込めつこと…)

添付ファイルの使い勝手が分からぬ、夏華だつた。おやじくは千己自作のアプリ。

何を隠そう、彼は機械関係にめっぽう強くてアプリに限らず、ブラックボックスとも揶揄されるパソコンの性能もいかんなく發揮させられるのだ。が、それが時には行き過ぎて一時、取り返しのつかないことになつたことがある。本人曰く反抗期だつたとのことだが、そんな言葉では済ませられない大惨事だつたのだ。

オタク文化を規制する公的機関にサイバー攻撃を仕掛けたり、ホームページ検索で「中華」と打つて出てきたページにウイルスをばら撒いたり、週間オリコンランキングの一位から一〇位までを全てアニソンに置き換えるというハッカー紛いの児戯じぎまであつたというのだから、警察沙汰だつた。

それと比べるにつけ、今の千鶴は大人しくなつたものだ。おかげで家族の心労は軽減された訳だが、代わりにそのツケがこちらに回つてくるというのだから、ままならない。

とりあえず夏華は、携帯の送話口に声を吹き込んでみた。

「タスケテ。オトウトクン」

抑揚も声量もない、言葉の羅列。外国人口調の如きそれは、感情が全くこもつてなかつた。

すると、まだ何も操作してないのに、画面に「メール送信中」との文字が映し出される。声が吹きこまれたら送信されるよう、設定が施されていたのだ。

少しの間、夏華が手持ち無沙汰で待つていると、画面に「メール受信中」との文字が浮かび上がる。それに合わせ携帯を弄ると、新規メールを開いた。

「あれ？」

そこで夏華は戸惑う。文面がないのだ。あるのは添付ファイルだけ。開いてみる。

途端、またしても画面いっぱいに何かが展開した。といつても今回は千鶴のオリジナルではなく、youtubeなどにありがちな動画からの引用。どうやらアニメのようだつた。勿論、それがどのアニメか特定できるほど、夏華は一次元に精通してない。なので、

ちんぶんかんぶんな面持ちで、ただぼーっとしていた。

視線の先では、萌えキャラと思しき女が絶対絶命の危機に陥つて。少女漫画に出てきそうなビックリおめめに、お姉さん風の顔立ち。そして彼女が見つめる先、悪役（怪獣）を隔てた奥には、千己に瓜二つの少年が……

（ 嫌な予感がする）

夏華による一抹の不安をよそに、画面上の二役は勝手にクライマックスを築いていく。

ヒロインであろう女が、少年を見ながら大粒の涙を垂らした。こちらの情報不足もあってか全くもつて感情移入できないが、それでも言つてある「台詞」が分かつてしまうのだから、不幸極まりない。

そして女は叫ぶ。目一杯に叫ぶ。おぞましい萌えボイスで、あの台詞を。

「助けてええ！！ 弟きゅうう 」

絶叫の最中、それは消えた。

というか夏華が電源ボタンをこれでもかと押し、画面」と消し去つた。結果、電源の切れた携帯。

思うことは一つだつた。

（……アイツめんどくせえ）

せつかく改心したと思つてメールを返したといつのに、終いにはあんな言い方まで強要するという偏愛ぶり。千己は恩を仇で返す変態だつた。おまけに車内に変な声が響き渡つたせいで、夏華は変な羞恥プレイを味わわされる始末。

すると、そんな雰囲気を気遣つてか近藤が声をかけてきた。

「大丈夫ですか？ 夏ちゃん」

「喧嘩売つてます？」

「はい？」

「あ、いえ」

遊び心で決めた呼び名に、逆に弄ばれるという夏華。

「あの、気にならないでください。ちょっと弟の残念な嗜好に打ちひ

しがれていただけ ってあれ?」

話しかけられ、顔を上げてる内にようやく気がつく。

車が停まっていた。

長らく携帯と睨めっこしてたせいで、他に気が回らなかつたようだ。

「ええ。着きましたよ」「

まだ状況を上手く把握できない夏華に、近藤は言つて聞かせる。

「そうでしたか。着くの、意外に早かったですね」

いつもとは違う体感での到着に、少しばかり呆気にとられていた。すると、そんな夏華の耳にコンコンと、窓を叩く音が入つてくる。振り向くとそこにいたのは、

「母さん!」

窓越しに映る、優しげな微笑を向ける女性に思わず大声を上げる。過剰に反応してしまつたのは、嬉しかつたから。何せ一月ぶりの再会である。

五〇の大台をとうに越えてる母はここ最近、老け込みが目立つようになつていて。単にたまにしか顔を合わせていないからそう感じるというのもあるが、それだけでない焦燥感というか、疲労が顔に滲みでいる。彼女の立場からすれば、必然と言つておかしくない兆候であろう。けど、『^{わたくし}える影響は何も悪いことばかりでもない。

本来であれば「私やもう長くないから」なんて達観した生き方をする齡だというのに、母の瞳は未だに生気が宿り、ギラついている。加えて、白髪であるはずの長髪を黒色に染め、小奇麗に束ねることで若々しさが醸しだされていた。風貌は、傍から見ると近寄りがたい威厳を放つているが、それもまた彼女の重責のこと。

夏華は車の扉を開けると、外に飛び出した。そのまま一田散に母へと抱きつく。一方、彼女の方も両手を広げ、受け入れる格好で抱き返した。そして、愛しむように娘の髪を撫でていく。

「元気についてたか? 怪我は? 食事はちゃんと良い物を食べているか?」

「はい。怪我もなく、元気にやつてます」

親の心配に夏華は答えていく。さすがに最後の質問はスルーしたが、かといって酷い食生活を強いられてる訳でもなし……毎日お弁当も含め三食、手料理をふるまつてくれるのだから、その点だけ見ればむしろ健全だった。

「母さんの方は？」

言つて、今度は夏華が母の心配をする。間近で見る彼女の顔。少し頬がこけたであろうか。もう随分な歳だし、無病息災でいることの方が稀だ。

「もしかして何かの病氣にかかる？」

「「おら夏。勝手に私を病人扱いするな。今だつてほれ、この通りピンピンしておる」

「本当にですか？」

「本当よ。あ、それはそつと夏。話は変わるがな」

「 会話」

親子の会話に割つて入る、渋い男声。いつの間に外に出たのやら、近藤によるものだった。

「分かつておる。今言おつとしてた所よ」

「会長」と呼ばれた母が、近藤の声に応える。

「そうでしたか。申し訳ございません。無粋な真似を」

「いや。お前の心配は重々承知している。さすがにこんな所で立ち話など、正気の沙汰でないわな」

そう話す二人の会話を聞いて、夏華は不思議に思つた。

（こんな所？ 何で実家をそんな他人行儀な口ぶりで……）

と思つたところで辺りを見渡してみる。

ここは、高層ビル群の一部として屹立する建物だった。近代建築の極みを骨の髄までしゃぶったかのような意匠が、至る所に凝らされている。下へ目を向けると大理石の床があり、左へ目を向けると、豪邸にありがちな噴水広場があつた。その広場からの水飛沫が、小さな虹を創つてゐる。

最後に右へ目を向けるとあつたのは、そびえ立つという表現がピツタリな丸型の巨大ビルディング。時が夕刻とすることもあつてか、茜色に染まつたガラス窓の照り返しは弱く、おかげでその趣深い美しさを直視できていた。

夏華はこの光景に見覚えがある。だから、ここがどんな所か知っている。だから、とんでもなくおつたまげた。

「つてここは白道会の總本山じゃないですか！？」

たじろぐ夏華に、他の一人は動じない。

どう考へてもおかしかつた。

ここは夏華の実家ではなく、白道会がその基盤を置いている丸ビル。

そして白道会とは、先の東京タワー崩落事件で犠牲になつた人物が、前に所属していた暴力団である。また、関東最大の暴力団組織

華道会との対決姿勢を鮮明に打ち出している暴力団でもあり、つまりは、

「いやいやいや！ どちらかといつと一人の方が冷静でいられないのでは？ だつて二人は」

「だからさつきの話に戻るのだがな、夏」

言つて母が、夏華の喋りに割つて入る。

そして告げた。これまたとんでもない無理難題を。

「私の力になつてくれないか？ この華道会と、白道会の架け橋に」

つまりは、かとうはな華道花 夏華の母は親であると同時に、華道会を牛耳る長でもあつたのだつた。

最近のエレベーターといつもののは、よくできている。

昔はガタンゴトンと駆動音がしたものだが、夏華達一行の乗つたそれは静かだつた。更には、外が見渡せるガラス張り仕様だつた為、景色を満喫できるというサービス付き。ただ、底も含め四方八方が透明なのは、利用者によつては、恐怖のアトラクションに様変わりする危険性も孕んでいた。

夏華達三人が乗るエレベーターは、あつといつ間に五階一〇階と、階を通り越していく。重力がかからないよう巧みに設計されたであらうが、それでも下に押し付ける圧力が三人に降りかかつた。微々たるものだが確かに力。だといつのに、当の夏華は微動だにしなかつた。

「どうか、それどうじやなかつた。

（何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに……）

自分の世界に引き籠もり、同じ疑問をループさせている。心の病み方が尋常でなかつた。現実逃避とでも言つていいのかもしない。できるだけ後方に入る一人は見ないようにしている。そうすることで、少しでもここに居ることを忘れていたかった。

とはいへ、このままではいけないとも思つてしまつ白ら。その、どこかに潜むちつぽけな良心が、状況を整理させていた。

（現在、白道会の本拠地に華道会の重鎮らがやつて来てる。で、白道会と華道会といつたら水と油くらいの敵対関係。これら二つから導き出される結論は？）

抗争、そんな言葉しか思い浮かばなかつた。ならばと対抗策を練るつにも、この丸ビルに入つた瞬間から、そんなこと考えようがないくらい切羽詰つてゐる。だだつ広いエントランスを一步踏み込んだ途端、「ああん！？」だの「てめええ！」だの罵声が飛び、強

面の男達に飛びかかられてた。無論、一女子高生を襲うなんてことはなかつたが、殴られそうになる母を見る娘というのは、精神衛生上非常にようりしくない。

即ち、ちょっとした抗争なら既に始まっていたのだ。

「近藤。最近のお前はたるんである。仮にも若頭なら、日々の鍛錬を怠るでない。動きが鈍くて目も当てられなかつたぞ」

「申し訳ございません。もう現場を退いて、五年以上は経つので」母と近藤が何てことない会話をする。その彼のスーツは、誰かしらの鼻血で少し赤黒くなつていた。何せ迫つてくる白道会の組員を、丸ごとのしてきたのだ。正直、五人くらいまでなら数えられたが、それ以降はあまりの壮絶さに悲鳴ばかり上げていた。

おかげで今の夏華はみつともないくらいにげつそりし、声はガラガラに嗄れかかっている。

そんな、ぐつたりした人間が考へることといつたら、やつぱり愚痴だつた。

「何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに……」というか私、一七なのよ！ はめを外すつて言つても、恋バナとかガールズトークとか、そういうのが積の山なんじやないの？ 友達いなけれど。スカートの丈折つて膝上まで見せたり、髪染めたりして、ただただ先生に怒られるのが恐い そんな年頃よ！ 怒られたことないけど。大体血つて何よ血つて！ 血飛沫浴びる一七の女子なんて、どんだけ獵奇的だよ。言つほど浴びてないけど……」

心の中だけで呴いてるつもりが、知らず口に出てしまつていて。精神の不安定ぶりが、如実に表れていた。何か後方で「くうつ！」といった、夏華を哀れむかのような男の涙声を聞こえる。こいつの方が泣きたいぐらいだった。

ついさつきの反省も踏まえ、今度こそ頭の中だけで思考を留める。（そもそも一人だけで白道会に乗り込むつてどういうこと？ 無謀もいいとこだし、向こうに殴つてくれと言つてゐるようなもの。今回

は、たまたま人気がなかつたから良かつたものの、もし普通の人だからりがあつたら、いくら近藤とて無事では済まなかつたはずよ）刹那、エレベーターが停止し、夏華のうだうだも途切れた。見上げてみる。階は最上階である「二〇」を示していた。前方の扉が開く。

「さて、行くぞ」

華道花が、先頭を切つて前に出る。

釣られるように近藤も出た。

片や夏華は、ここで一階のボタンを押してエレベーターを閉める幸せを考えていたが、行動に移せるだけ勇気は持ち合わせていない。従つて、嫌々ながら前に出たのだった。

この階層は一本道だった。三人は、赤のカーペットで敷きつめられた廊下を、ゆっくりとした足取りで進みゆく。途中、所々に設えられた照明器具は、通行者の歩みに合わせ光るセンサー式だった。加えて、放つ輝きは高級感を煽る、厳かなもの。

周りの雰囲気に当てられたのか、夏華の表情は自然と引き締まつたものになる。とはいえ、普段ここに来る時は、こんな緊迫した面持ちになどなりはしなかつた。となるとやはり元凶は、前方の二人。

夏華が思つことは一つだつた。

（姉さん、きつと怒るだろうなあ……）

自然と、鞄を抱き込む両腕に力がこもる。それもそのはず。

元々下校した後、ここに足を運ぶ予定だつたのだ。が、よもやこんな形での姉に会おうとは思つてもみなかつた。

横幅のある回廊は、徐々にそのうねりを減らしていく。そして終に、突き当たりを迎えたのだった。

視界の先に佇むのは、木製に似せた両扉。

実は自動開閉式であるそれは、差し詰め様式美といった所である

う。

(あれ?)

夏華は不思議に思った。それは、普段と違っていたから。いつもならあの扉の両脇には大柄のガードマンが一人、張り付いてるはずだというのに現状、誰もいなかつた。

(何で?)

「やはりか」

そうほやく母は、まるで何もかも見通してゐるかのようだつた。

「母さん。やはりつて」

「夏。それはいいから、とりあえず先に入つておくれ。私からだと、何かと厄介になるから」

夏華の聞いたそうな空氣は無碍にして、母は本題に入つていく。一方、こちらとしては気にならないでもなかつたが、あえて踏み込むほど野暮なことはしたくなかった。

故に夏華は、足並みを緩めた一人に代わつて前へと出る。両扉の近くまで行くと、ウイーンという機械音と共に、扉が開かれた。その最奥では、馴染みのあの人人が、黒革のソファーベッドに座つて電話をしている。

齡は二八歳。セミロングの髪を少しカールさせることで、愛らしさを演出している。それは強気で、どちらかといふと男勝りな顔つきとはギャップがあり、だからこそ魅力的だった。細身の体にはシミ一つなく、すらりとした脚には、自然と目がいつてしまふ美しさがある。

可愛いといふよりは格好いい。

可愛いといふよりは綺麗。

女っぽいといふよりは男っぽい。

というか、

(うつわー。やつぱそつくり)

今朝、兄と一夜を共にしていた女性の外見と、全くと言つていいほど遜色がなかつた。

そんな姉 加藤千世羅ちせらが、電話越しに発する音声。
初めて聞こえてきたのは、罵詈雑言だった。

第一章 不確かなる眞実（うた）【華道会と白道会5】

「だからウチは関係ないって言つてんでしょうが！！　んなしつこいんなら奴さん、確たる証拠出せつてーの！　こちとら朝から、ウチの者達を出張らせてそれどころじゃないんですね。ええ……任意同行？　なら正式に逮捕状を取つたら、またおかげ直しぐださい。それでは！」

ありつたけの皮肉を込め、姉は電話を切る。

「警察からか？　近いうちに、ガサまで入るんじゃないかの」

その仕草に、声をかけるべきでない人が先手を打つた。

喋りかけたのは、華道会の親玉。

夏華はただただ天を仰ぐ。

（てか私という緩衝材は！？）

先頭に立つてゐるといふのに、でくのぼうな自ら。

そもそも場の雰囲気を和らげる為、第一声は託されたとばかり思つていた。夏華が間に入ることで、少しでも双方がいがみ合わぬよう、火花を散らさぬよう心配り。少なくともその意図はあつたはずなのだ。なぜならこの丸ビルに入る直前、母は「華道会と白道会の架け橋になつてくれ」といつた趣旨の発言をしてきたのだから。

しかしながら、蓋を開けてみればこの顛末。

先走りしやすい母の発言で、自分の立場は台無しになつていた。

後、夏華ができることといつたら、所在無さげに俯くくらいなもの。

（私の存在意義つて一体……）

だつたらどうして巻き込んだ！　と嘆かずにはいられない。が、そんなことお構いなしに、局面は張り詰めたものになつていつた。姉を見ると、下を向いている。その背後からはどうしてか、焰の如き激怒と大蛇の如き殺意が迸つてゐるよう感じられた。見えるは

ずのないそれらは、五感として捉えようがないはず。これは田の錯覚、もしくは自身の情緒不安定さからくる強迫観念に違いないと、そう結論付けていた。でないと、やつていけそうにない。

「あらあら。これはこれは……今日は珍客が多いこと多いこと。テレビなんて見る暇さえなかつたけど、きっと今日の運勢は最悪ね」姉がこちらには視線を向わさず、冷戦の口火を切る。

「それは嘘よな。今日び、ニュースを賑わして東京タワー崩落事件。それとの兼ね合いでお前さんとこの白道会は、引っ張りだこだつていうじゃないか？ 羨ましい限りだ。会長」

「お褒めに預かり光榮です。それに、何かとウチの者とも遊んでくれたみたいで」

と言いながら、近藤に田を向ける。途端、彼の全身がビクンと波打つた。

（恐ろしい。恐ろしそぎる）

あの近藤をもつて、あの^{リアクション}反応。蛇に睨まれた蛙といった所だらう。

同じ力モられる側の夏華にとつては、とても他人事ではない。

「それより、座つてもいいかね。老体に立ち姿はきついでの」

「冗談。お帰りを」

そう口にしながら、不気味な笑みを浮かべる姉。対する母も母で、笑顔を作つたまま歩みを進めると、彼女の向かいに鎮座する同色のソファーべッド、そのふくらみに腰掛けた。結果、対面する形になる姉と母。

建前といつ名の仮面を被つた殴り合には、ここからが本番のようだつた。

とりあえず夏華は、ここでじつとしていても埒が明かないので、渦中の一人がいる所まで歩いていく。近藤も右に同じくといつた様子で、そそくさと同じ拳動を見せていた。

ここは東京都心に拠点を置く、白道会の会長室。

姉の好みからか、内装は白と黒を基調にした、シックな^{あつら}謎えだつた。目に付く物といつたら本棚に机、他には接待用のソファーが一

対あるだけ。

そんな質素さが目立つ一角で、激しく燃え盛る一人の鍔^{つば}迫り合いが佳境を迎えていた。

「にしても、これまた大それたことになつたわいね。今じゃビニもかしこも、この話題で持ちきりよ」

「生憎と、そんな無駄話ができるほど暇ではないんでね。単刀直入とこきましよう。丸ビルにまで乗り込んできた用件は？」

「……何が狙いよ？」

「いやはや、東日本を裏で操る方とは、およそ見受けられない洞察眼ですね。白道会^{ウチ}がやつたと、そういう見立てですか？」

「それ以外なかろう。消去法よ」

「ならば、そちら以外考えられないのではないかと」「何だと」

母は威圧しながらも、訝しげな表情をする。

「腹の探し合いなんて、する必要すらないのでは？」^{だつてそうでしょう？}塔をぶつた切るなんてありえないこと、歌^{かずく}族の血筋を引くあなた以外、誰ができるつていうんですか」

「私がやつたと？ 何の為に？ あんなモタレ（三下やくざ）一匹を消すのに、わざわざ大仰なことはするまい。^{おとこ}というか、私の血統を受け継いでいる者は他にもいる。お前があの冬治をそそのかしてやつた そうではないのか？」

「あの男、ですか。自分の息子に対して、随分な言いようだ」

「奴はもう、華道家から勘当された身。私の子は夏だけよ」

「なるほど。ですが、彼の性格はよくお知りのはず。アイツが歌を人殺しの道具に使うなんて、まかり間違つてもありえません」

「だから言つておる。お前が、そそのかしたんだと」

「これでは堂々巡りですね。まともな議論ができそうにない」

「壯絶な舌戦は、じわじわと相手を追い込む、そんな女ならではのねちっこさがあつた。

（歌族、か。やつぱりそこに行き着くのね）

一人のやり取りを聞きながらに夏華は、この血族について少しばかり考えさせられていた。

歌族とは、古くから華道家に脈々と受け継がれる、特殊な血統を持つ家系のこと。それは歌うことで、そこに込められた詞を現実に反映させられるという、異能が揮える家族だった。

即ち、その力はあまりにも人外で且つ、持て余すもの。

現に夏華が真つ二つにした東京タワーも、その異能によるものだつた。それだけの凶悪さ故、幼い頃から歌うことは、いけないことだと教えられてきた。殊今に至つても、歌うことは学校も含め、決してしてはいけないことだと厳しく戒められている。

「歌族というのはな、部外者が一朝一夕で理解できるようなものではないのだよ。古よりその家だけに受け継がれてきた、由緒ある血統故の『撻』。それなぞ、お主のとり知るところではあるまい？ 軽はずみな発言はやめなされ」

と蔑む母に対し、姉の切り返しは博識なものだつた。

「『撻』というのは、決められた歳までは歌つてはいけないとする決まりでしょうね。現代では、その境目が二〇歳に上げられてること。あ、でも歳のくいすぎたあなたには、関係ない『撻』でしたね。ごめんあそばせ」

二人の会話は、段々と内輪の話になつていいく。それは部外者からすれば、何を言つてるかさっぱりな話だつた。が、身内である夏華からすれば、何もかもが知つた話。

第一章 不確かなる眞実（うた）【華道会と白道会⑥】

（……あの掟のことでしょうね）

そもそも「掟」については、随分前から知っていたのだ。何せそう言い聞かされてきたのだから。だから、自分がその禁を破つてることも自覚している。

「……何故お主がそれを知つてある？ もしやあの冬治から無理矢理聞きたした、そうなのか？」

母がピリピリした表情で姉を問いただす。対する彼女はあきれていた。

「何でそうなる。曲がりなりにも私達は家族なんですよ？ 普通に教えてもらつただけです。理由は、あなたじやできなかつたことをする為。夏華を守る為です」

「何が家族よ。おぞましい。貴様らが、勝手に裏で手を回して作った紛い物ではないか」

「紛い物で結構。少なくともそつせざる状況にまで追い込んだ、あなたには言われたくない台詞ですね。それに私を叩くのが実にお好きのようですが、お忘れなく……あの戸籍偽造から何から何まで、やつたのはあなたのお子さん 冬治ですよ？」

その言葉に母は、苦虫を噛み潰したかのような顰め面しかづらひを見せる。一方、夏華にとつてこの話は幼い頃の出来事だつただけに、どういう経緯とかはすつ飛ばして結果だけを知つていた。

即ち、戸籍の偽造。

元々、異能を司る華道家には一人の跡取りがいた。それが華道会会長 華道花の息子である冬治と、娘の夏華。

また、事実上の会長に次ぐ実力者であり、華道会を支える若頭近藤には一人の跡取りがいた。それが彼の娘である千世羅と、息

子の千己^ち。

つまり夏華にとつて、血の繋がつた兄妹は冬治だけなのだ。したがつて本来なら千世羅は義姉にあたり、千己は義弟と相成る。しかしながら、世間体的にはそつはならなかつた。なぜなら兄が裏で手を回し、戸籍を偽造したから。結果、できた新しい関係。冬治、夏華、千世羅、千己　この四人は、一つの別な家族として生まれ変わつたのだ。

苗字もそれぞれ、華道と近藤から加藤へと改名し、その筋から足を洗つた。

その、はずだつたのに、

（……姉さん）

どういつ訳か数年前、千世羅だけがこの華道会に戻つてきたのだ。

そして裏切つた。

さすがに華道会を真つ一つにするほど、とはいかないがそれでも組織内が揺らぐくらいに大きな反逆。そして反目した同胞を集めできたのが、あの白道会なのである。

（そういえば学校のパソコン室で見た2チャンでも、白道会は華道会の分派だとなんとか、当たらずとも遠からずな話があつたわね）

そう思いながらも夏華には分かつていた。

どうして義姉^{あね}が裏の世界に戻つてきたのか、どうして裏切つたのか、どうしてこんな大変な境遇に身を置いたのか。

（全部、私たちの生活を支えるためなんでしょう？　お金の面でも安全の面でも）

つまりは養われる立場でしかない夏華が、あーだこーだ言える問題ではなかつた。が、やはり納得がいくものではない。

（ひいう所も全部ひつくるめ潔癖症な性格だつた。

「きっとそちらが最も恐れているのは、冬治の動向でしょう。そり

やそうですよね。彼のおかげで、今の関東一の地位まで上り詰められたんだから。けど、彼はあなたとは違う。あなたみたく平氣で歌の力を暴力に変えるような、そんな人じやない

夏華がごちやごちや考へてる最中も、一人の会話は続いていく。

義姉のきつにお咎めに、母は何やら物思いに耽つてゐようだつた。

「どういうことだ？ 奴が無関係とするなら、一体誰が？ 私と奴以外でそんなこと、できようはずもない。そんなことができる人間などいるはずが

」

そこまで呟いた所で不意に、母は夏華と目を合わせた。

次いでその瞳が大きく見開かれる。

明らかにさつきまでと、佇む雰囲氣は変わつていた。

「ここまできて、まだしらを切り通すつもりですか？ もうネタは割れてるんですよ。それで結局どう示し、つけてくださるつもりか？」

片や問いつめる義姉は、母をこの崩落事件の犯人と見ているようだつた。そんな話の展開を、ただ聞くだけの立場ではいられなくなつた夏華。全身が訳もなく熱かつた。頭が熱に浮かされるように、何も考へられない。胸が不安でいっぱいになり、何故か右手で左腕を抱く。

自分を抱き締めたことで、よつやく体が震えてることに気づいたのだった。

「…………」

そんな夏華の動搖を知つてか知らずか、義姉の言葉に何の返答もしない母。会話のキヤツチボールがなされなくなつた場には、当然の如く静寂が訪れた。

気まずい沈黙が続くにつれ、次の一声^{ひといこゑ}が出しにくくなる空間。

皆が皆だんまりを決め込んでいる。

そして、やつと場を賑わせた声は異様だつた。

声は声でも笑い声。

部屋中に響き渡るほどの大笑いだつた。

卷之三

長く長い、母の嘲笑うような、蕭むような強い。不気味なそれは、笑顔でやっているところに深い哀愁が感じられる。

中華書局影印
卷之三

漠然と夏華はそう思つた。理由はない。そもそも、何で笑つてゐるかよく分からぬ。ただの直感。けれど親子だから分かる、確かな感覚だった。

「ほれ見たことか。何も変わらない。私の言つた通りになつたではないか。お前がいくら足搔いたとて、この血の宿命からは決して逃れられない。誰一人救われないんだ。うまく付き合つていいく他はない」と喋る母は、誰とも視線を合わせていなかつた。まるで「ここにはいない冬治に話しかけるよう」、斜め下に目線を落とす。

おの 猿にさがつた間にた

「せうにはやうでませんのうて」
その奇妙な様子に口を挟む義姉。彼女はどうか怪訝な顔つきをしていた。

「もうお前に用はない。近藤。帰るぞ。」

対する母は、唐突に話を打ち切るとソファーから腰を上げる。後、体を翻して自動扉に向かうと、近藤も彼女に付き従つた。実の娘には見向きもせずに。

正直な所、彼は娘息子には甘い、子煩惱ぶりが目立つ男であることを夏華は知つてゐる。それは息子のことを「千己坊」と呼び、よく構つてあげることからも明白だつた。勿論、娘にもそう接していた時期がある。が、彼女の裏切りを境に、父と娘の関係性は一変してしまつたのだ。それ以来、具体的に何がどう、ということはどうまく説明できないが少なくとも、お互ひ避け合つてゐる雰囲気は感じ取れる。

「ちよつと待つてください」

そんな一つの背中に声をかける義姉。敬語であることからそれは実の父ではなく、夏華の母に向けてのものだった。

「何よ？」

言つて彼女は振り返らず、歩みを止めることなく両扉の前まで来た。そこまで行くとウイーンという機械音と共に、扉が開かれる。「もう夏を巻き込むのはやめてあげてください。私は別に、冬治のよつに一切会うなんて偏つたことは言いませんが、にしたつてあんまりです。仮にもあの子は、この世界から足を洗つた身。お願いでですからもつと普通に接してあげてください。『華道会の一會長』ではなく』一母親』として」

「『家族』だつたな？ お前達は

訴えかけるような声調に変わつた義姉に対し、母の切り返しは脈略がなかつた。とはいへ、皮肉がたつぱり込められてるのはよく分かる。

そして彼女は告げた。これ以上ないくらい確信に満ちた瞳で。「その『家族』とやらだがな、後二日ももたずバラバラになるさ。まあ、しょせんは偽物。むしろここままでよく粘つたといつた所か」「いい加減にしてください。さつきからね、話が全然見えないんですよ。電波飛ばすならどうか他でやつて」

「夏は必ず華道会に戻つてくる。そう遠くないしひこ…………必ずだ」

必要最低限の、省かれた一言二言だった。おそらくは義姉にきちんと伝わらない、そんな内容であろう。

そんな母の言葉に、どうしてか夏華は胸を突かれる思いだった。さつきのように見つめられた訳でもないのに、額から嫌な汗が伝つていいく。

全てを見透かされてるよつな、やるせない気分だった。

一方、義姉はといふと、口元は動いているが声になつてない。口に出しそよつにもその言靈が持つ、妙な説得力にほだされてしまつてゐるよつだつた。言に返さないでいるといつたのまさにやら、一つの背中

は、じから見えなくなる位置まで遠ざかっていく。
こうして両扉は自動的に閉まり、話は後味の悪いものに終わった
のだった。

第一章 不確かなる眞実（うた）【華道念と血道念】

「はー、全く冷汗もんだわ。どんだけの威圧感だよ、あのババア。こつちはこつちで手一杯だつてのに。大体何のつもりで来たのかしら。最後までよく分からなかつたけど」

「…………」

一難去つたからか、義姉は軽口を叩けるようになるが、夏華の方はどうと深刻に口を噤んでいた。

（母さんに、知られた）

まず間違いない。そう思つには、十分すぎる反応だつた。どちらにせよあの異能が揮えるのは、母と兄以外には自分だけ。さつきの話にあつたように、「消去法」で導き出したのだろう。夏華が東京タワー崩落事件の、真犯人であることを。どうしてそれをここでバラさなかつたかは、分からぬ。どうして問い合わせてこなかつたかも。

どうして泣き笑いのよつた顔をしたのかも、分からぬ。ただ、それでも、

（必要な種は、きちんと撒いた）

ここまでは全て、夏華の思惑通りだつたのだ。

分かつていたのだ。こつなることは、と、こつよりもそつなるよう仕向けたと言つた方が正しい。後々の為に。

あの崩落事件の裏に隠された本当の田的「勸善懲惡」の為に。つまりは、今のところ順調だつこと。だつてのに、夏華は浮かない顔だつた。それは、想像と現実とのギャップがあまりに大きかつたから。

（恐、かつた）

考えもしなかつた。肉親である母が、あんな鋭い目つきで自分を

射抜くなんて。あの一瞬だけは確かに、華道会の長としての眼力が顔を覗かせていたのだ。

そして夏華は、頭が真っ白になつた。分かつてたことだというのに、恐がつてしまつた。震えてしまつていて。望んだことだというのに、嫌でたまらなくなつた。

何よりそんな矛盾した自分が、扱いきれない自分が不安でならない。

夏華は泣きそうだつた。

(恐い。自分が分からなくなる。恐いよ…………兄さん)

「 っ！ 夏！ ！」

刹那、耳をつんざく大声が、夏華を現実世界に引き戻す。義姉によるものだつた。

「 はいい！ ？」

かなり耳元で叫ばれたせいで、夏華は頭がぐらんぐらんする。耳鳴りがひどかつた。

「 ！」の私をわざわざ立たせ、名前を連呼せらるなんてアンタ。どういつで見よ？

怒りのベクトルが若干、おかしな方向にいつてる気がするが、それもまた「愛嬌」といつた所だらう。

「 あ、いや、その」

彼女の声に答えようとするも、すぐにはこつもの自分に戻れず、夏華は口ごもる。

「 アンタ大丈夫？ 何かすく疲れた顔してるけど」

さすがに毎日、衣食住を共にしてるだけあって、少しの動搖も義姉は見逃さなかつた。

(まづい。しつかりしないと)

気持ちを切りかえる意味で夏華は一度、大きく深呼吸する。

「 大丈夫です。ちょっと二人のぶつかり合いに、びっくりしただけで」

「 そう。まあ、あんなの滅多に見れるもんぢやないからね。にして

も、夏。お願いだから、もうこんなことに首を突っ込まないで。あなたのお兄さんが華道会と決別したのは全部、あなたに普通の生活

を送つてほしいからよ。なのに、こんなドロドロしたことに身を置いて……これじゃ冬治が浮かばれないわ

「それを姉さんに言われる筋合にはありません。兄さんが守りたか

つたのは、私だけじゃない。私達家族、みんなです。なのに姉さんは裏切つた。勝手に華道会に戻つて、勝手に

「おい」

言つて義姉は、夏華の両頬を一つまみする。加減がなかつた。

「いひやいひやいひやいひやい（痛い痛い痛い痛い）！？」

「子供のくせに、大人に口ガキ」たえしないの。分かつた？」

「ほひよひよひやひやいへふ（子供じゃないです）！」

「そういうところが子供なの。何でもかんでも、綺麗せっぱりとはいかないのよ。誰もが人には言えない悩みを抱えて生活してるの。それにアンタが口を挟む権利はない。オーケー？」

「はひやひへふははい（離してください）！」

「さすが潔癖症けっぴ。人の言つこと聞きやあしない。なら、こんなのはどう？」

「ひやふへふは（何ですか）！」

「夏がお母さんと会つてたこと、冬治に言つわ

齎しとしては十分すぎる言葉だつた。学校のパソコン室でぐいぐいいた義弟と同じく、震え上がる夏華。

姉妹そろつて兄を利用するあたり、家族といつのは齎し文句も似通つていた。

「アイツがこのことを知つたら、間違いなく家から叩き出されるでしょうね。まあ、でも家から追い出されるなんて昔はよくあつたことだし、たまにはいいかも。あ、言つとくけど、もうアンタもいひ歳なんだから、前みたく私の助けを期待しないようよ。可愛くない妹なんてね、ほっぽつとくに限るのよ」

頬を左右に引っ張る指は、なおも力を緩めそうにない。躍動感あ

ふれるその指さばきは、夏華をじんじん涙目にしていく。

どうあっても覆せない、姉妹間の上下関係。

絶体絶命の義妹が言うことといったら、一つだった。

「ほほほほへんひやひやい（「じじじじごめんなさい）……」

そうして、ようやく義妹は、頬をつまむのをやめたのだった。

片や夏華は、腫れた両頬を、跡が残らないようにとこすつしていく。色んな意味で心が折れていた。

「ひどいです。あんまりです。私はただ、学校帰りに姉さんの所に寄つて、お弁当を届けるだけだったんですよー？ それなのにいつのまにか黒ベニツに巻き込まれて、気づいたらここに」

「えーっと。話が見えないんだけど とりあえず落ち着いて。苦

労したんだろうなっていうのは伝わるから。冬冷には言わないわよ。

だから、大丈夫。そんな泣きそうな顔しないの……ほら、^き来いな

首を傾げながらも義妹は、弱つた義妹を抱き込む。夏華の鼻腔いつぱいに、女性特有の甘い香りがした。これだけで、もし自分が男だつたら惚れてしまうんじゃないか、そんな熱に浮かされてしまう。加えてこの包容力。

加藤千世羅という義妹は、紛れもなく大人な女性であつた。

夏華はそのたおやかな胸に顔を埋めると、温もりにただただ甘える。自分の髪が、優しげにと梳かれていくのを感じた。

「この甘えんぼうさんめ…………恐かつたでしょ？」

「はい」

「お姉ちゃんがいるから安心なさい。アンタを絶対、あのクソババアから守つてみせる」

「クソババアって、私のお母さんですよ？」

「娘を不幸にするだけの母親なんて、クソババアで十分。私の方がずっとアンタを思つてる。ずっとアンタを、幸せにしてみせる」

「……はい」

「こういう明け透けなく本音をズバズバ言うところは、極道の任侠からくるものだろうか。

それはよく分からぬけれど、夏華はたまらなく嬉しかった。少し、泣きべそもかいてしまつていて。

やつぱり夏華は、この家族が大好きだつた。だから失いたくない。バラバラになつてほしくないのだ。

「さーてど、ずいぶん遅くなつたけど、お昼じはんとしましようか。丁度お腹もすいてきたことだし」と、義姉が湿つぽくなる雰囲気を明るく変える。

「ですねですね」

夏華もそれに合わせ、元気に振舞う。

いひして義姉に肩を抱かれる中、手持ちの学生鞄を漁ると、最後の弁当箱を取り出した。その色は、赤。

二人は和気藹々なムードの中、いつものよつに中華弁当談議に花咲かせていく。お互い、少なからぬ悩みを持つていながらに、笑顔を絶やすことはなかつた。

姉妹で気遣い合う、思いやり合ひ、そんな光景。

それは痛々しいような、けれども微笑ましいような、相反する情感がたつぶり込められたものであつた。

第一章 不確かなる眞実（うた）【都市公園 世羅（せら）】

義姉の昼食に付き合つて後、長らくだべつていると、あつという間に時は過ぎていく。

二人が丸ビルを出る頃にはもう、外の街並みは真っ暗で、代わりにライトアップされた噴水広場が幻想的な色のハーモニーを見せていた。

「……綺麗」

夏華は自然と思ったことを口にする。その唇からは、白い靄がふわっと上がつていった。東京の冬は今日も冷えこんでいる。

「何というか、絵になるわね」

と言う義姉は感慨深げだった。

「はい？」

「可愛い子つてのは何をやつても許されるつて言ひけど、夏はその典型ね」

「それは嫌味ですか？ だつて姉さんの方がずっと綺麗だし、胸だつてあるし、大人の魅力たっぷりだし、それにそれに」

「はいはい、ありがとう。私が言つてるのはそういうことじゃなくてね、こう純真無垢つていうか、乙女つていうか……うまく説明できないうけど、要は『若いつていいな』つてこと」

「はあ。まあそりや、三十路手前の姉さんに比べれば」

途端、ゲンコツが夏華の脳天に直撃する。

「それにも、今日は人通りが多いわね」

「何がですか！」

まるで何事もなかつたかのように、同じ呼吸で会話をしようつとする暴力女。一方、夏華はといふと、頭を抱えて蹲つていた。

「後一〇年経てば、分かる」

「どうしたら人の頭かち割りたくなるつてんですかええ！」

「ぶち切れるとヤクザ口調になるなんて夏……可愛くない。お姉ち

やんは悲しいです。そして、可愛い妹であつてほしい。だから、ほ
ら

おもむろにしゃがみ込み、手を差しのべる義姉。彼女的にはここで、義妹に微笑んでほしいのだろう。その夏華はといふと、腕をへし折つてやろうかと思っていた。

けれども、しょせんは一時の感情。

夏華は義姉の手を握ると、起き上がる。結局、憎まれ口を叩くだけ終わったのだった。

そんなこんなで、二人は手を繋いで歩きだす。

この界隈は、人だかりでごつた返していた。

並び立つ高層ビル群を縫うように、できた道路脇の歩道を一人は進んでいく。道幅が狭いそこでは、誰もが窮屈そうにしていた。目につく人といつたら、会社帰りの忙しないサラリーマンや〇・しばかりで、まるで生活観が感じられない。その様は、まさにビジネス街一色といったところだろう。

そんな中、制服姿の夏華は明らかに浮いていた。ただ一人ではない分、恥ずかしいとまではいかない。というかそれ以上にこの服で問題なのは、

（寒い）

吹きつけるビルの隙間風が、無防備な膝下を凍えさせているのだ。加えて翻つてしまふスカート。

その端を押さえながらも夏華は、さつきから気になつてることを口にしたのだった。

「あの、ところで姉さん。私たち帰らないんですか？　まさか徒歩で帰るなんて言いませんよね？」

「んー。にしてもさつきの中華弁当、いつも余っちゃうのよねえ。まあ、ラーメンだけだったら食べられるんだけども」

「私はそういう姉さんに脱帽です。むしろアレ以外だつたらいける

と、普通はそうなるところですよ」

「そう? まあどうせ残つても夕食では、そういう余り物をつまんでアレンジした料理、作ってくれるからね」

「つてただ温め直すだけじゃないですか。それを『アレンジした料理』と表現するには、あまりに家族びいきかと」

「つて言いながらもアンタ、食べくるじゃない」

「うひ。け、けどそれは、チャーハンに限つての話です。あれなら、油を拭き取れば何とかいけますから」

「私だつてラーメンに限つてのことよ。で、ウチの実弟は確か、餃子だつたっけか?」

「千鶴ですか? ええ。今日、お昼を一緒にした時も分けてあげました」

「そりなんだ。まああの子の場合、ちょっとアレルギー体質で決まつたものしか食べれないからね」

「あー、そうでしたね。牛乳アレルギーでしたっけ?」

「ええ。だから田代いろ食事を気遣つてくれる冬治にはね、頭が下がる思いなの」

「いやいや姉さん。さつきからとていうか、毎度とていうか、兄さん贋^{いき}しそぎなんですよ。特に食事に關してなんて、褒められることは何一つしてないじゃないですか」

「……………そう?」

と、間を置く義姉の問いかけは、とても意味ありげだった。

「何ですか、その意味深さは?」

「いえいえ。単に冬治がかわいそだなあと。親の心子知らずといふか、兄の心妹知らずといふか」

「人を勝手に悪者扱いしないでください。だから何なんですか、その含みは? 兄さんが毎日毎週毎月毎年、中華を作り続けるのに、しかるべき理由があるとでも? 実は私が中華しか食べれなくて、そもそもつて中華は家族愛の象徴で、そこにはお涙ちょうどいの話が隠されてるとでも? ちなみに私の大好物はスイーツです」

「はいはい分かった分かった」

義姉は手を繋いでない方の左手で、癪癩を起しそうな義妹の頭を撫でる。

「納得できないことがあると、すぐ怒りっぽくなるんだから。ダメよ、そういう性格。何でもかんでも完璧にしなくたっていいの。夏が言つように、冬治が中華にこだわるのに理由なんてない。ないけどね……けど、素敵なの」

「はい？」

中華地獄に苦しめられた夏華としては、どうあっても納得できなかつた。

「ま、いいじゃない。そんなこと」

「ええ。どうでもいいですね、そんなこと。で 一体全体、どこ向かつてるんです？」

「んー。にしても」

「姉さん！」

さすがに夏華としては怒りっぽくなる。ただ、それは別に納得できないからではなく、義姉がはぐらかしてばかりいるから。とほいえ、

（どうせあそこに行くんだらうけど）

夏華には、どこに向かつてるかの検討くらいはついていた。なぜなら、毎度こいつこいつ展開だから。けれど、せめて言つてよと思つ。そしたら「おひと」としても言い返せるのだ。それが、無駄に終わるということを。

「公園に行つても兄さん、来ないですよ」

我慢しきれず先手を打つて、夏華は言いたいことを口にする。何せ手がかじかむほどの寒さだ。早く家に帰りたい心情からすれば、致し方なかつた。

「えーっと」

その決定打に、困つたように視線を彷徨わせる義姉。

「…………

その様子に、一切助け舟を出さない夏華。追い込まれた義姉は、あらぬことを口にしたのだった。

「何のこと?」

「今更知らぬ存ぜぬで通せるとでも!?」

すっとぼける義姉に、義妹の怒りはついに爆発した。

「大体どこまで恥ずかしがりや気が済むんですか! 別に私は、昔二人が恋仲だつたことは知つてますし、今でも惹かれ合つてるのは知つてますし、だから何で別れたのかなんて見当もつかないでけど、にしたつてその恋路に私を巻き込まんといでください! 寒空の下、来るはずもない人を待つ女性。それはとつても絵になるでしょうが、んなものより私にはコタツですよコタツ!」

「え? 惹かれ合つてるつて…………冬治、私のこと、好きつて?」

こんなにも言葉を羅列したといふのに、義姉が聞き返したところは本題と無関係だった。加えて頬を赤らめさせ、柄にもなくモジモジしている。

夏華が思うことは、一つだった。

(「コイツめんじくせえ)

中華中毒の兄といい、厨二病の義弟といい、少女漫画チックな義姉といい、夏華の家族は問題ばかりだった。

「あの、私帰ります」

と家族を見限つた所で、首根っこを引っ張られた。抱き込まれる。勿論、こちらとしても本当に帰るつもりはないのだが、見透かされるのも癪だった。なので、頬をぷくっと膨らませる。

「もう、今のは冗談に決まってるじゃない。だから、ぷりぷりしないの。それより、ほら。着いたわよ」

その言葉に、夏華は辺りを見渡す。すると左手に映つたのは、規則的な景色に逆行するかのようだ、開けた公園だった。だだつ広いそれは、さつきまでが息苦しかった分、憩いの空間としての印象を強く感じさせる。都会の大袈裟なくらいの眩しさと、園内に設置された電灯の光とが、所々生い茂る緑を美しく照らしだしていた。

夏華は入口部分にあるプレート、そこに彫られた文字を読み込んでみる。

『都市公園 世羅』。

そして夏華は、ため息をついたのだった。

第一章 不確定な眞実（うた）【都市公園 世羅（せら） 2】

おそらく『都市公園 世羅』の『世羅』は、義姉の名前 千世羅からきているのだろう。自分の買い占めた敷地名に、自分の名前を組み込むという利己主義^{ヒヨウイズム}つぶりには、ほとほとあきれるばかりである。

「……ここに来る度思うんですけどね、姉さん。もうちょっとマシンネーミング、考えられなかつたんですか？ これじゃまるで、自己顯示欲の塊みたいな人に思われるじゃないですか？」

「ん？ アンタ知らないの？ このご時世、女性が社会進出する時代なのよ」

「こんな進出、痛いだけです。ちなみに、さつきまでいた丸ビルの名前は？」

「『ツインビル 世羅』」

「いつビルがツインになつた！？」

「あーもう、口やかましい子だこと。別にビルが一つだつていいじゃない。何か住友ツインビルだつたり、三田ツインビルだつたり、大手つてそんな感じでしょ。その系列で」

「どんな系列ですか無関係もいいところ！」

無駄だと分かつてることに首を突っ込まれたイライラと、極度の寒さが、義姉への怒りを加速させていく。

「はあ。つづづくアンタのそういう性格は要改善ね。無駄だと分かつてたつていいじゃない。寄り道、していきましょう」

後ろから義妹の手を掴み、公園内へと強引に引っ張っていく義姉。一方夏華はとくとく、不機嫌極まりない顔つきをしていたのだった。

ここは、義姉の率いる白道会が買い占めた土地、その上に成り立つていてる公園である。

元々は中小企業のビルがこじんまりと建つていただけなのだが、いつしか買収され取り壊され、後にこの大公園ができた。

これらに関して、誰による介入があつたかまでは分からぬ。が、この話題になると黒い噂が絶えないということは、つまりはそういうことなのだろう。

そんなこんなでできた公園内は、整然としていた。真っ直ぐに奥へ伸びる一本道は横幅が広く、そこを通る姉妹に窮屈な思いをさせることはない。両脇には桜の木々が鬱蒼と茂っていた。今の時期は枯れ木にすぎないそれらは、春になるとこの道を桜色へと染め上げ、通行人の目を楽しませていく。

そして、更に奥へ進んだ所でようやく聴こえてきたのが、雑多な音楽。

見える前方の光景は、多くの聴衆で溢れていたのだった。

「 今日も盛況ね」

そう呟く義姉。夏華も、それはそうだなと思つ。

中心となる大広場には、野外のライブ会場が設置されていた。五人以上の人間が自由に立ち振る舞えるだけの、四角のステージ。その舞台裏には、最新の音響装置やら舞台装置やらが完備されており、現状どこのかの無名バンドがロック調の歌をうたつていて。その背後に控える大スクリーンでは、メインボーカルの顔がドアップで映し出されていた。

ド派手とまではいかないまでもそれなりの規模を誇る会場。

更には、常に絶えることのない観客の数。

それがこの公園の醍醐味でもあり、また、白道会がこの土地に手を出した狙いでもあつた。

白道会という組織は一暴力団であると共に、一エンターテインメント集団でもあるのだ。

暴力団排除条例が全国に施行されて以来、肩身の狭い思いを強い

られることになつたヤクザ稼業。華道会ほどの大組織ならいざ知らず、白道会程度の組織では、大手を振るつて本業に手を出せないでいた。

そんな中で見出されたのが、もう一つの才覚。堅気の世界に溶け込み、且つ出るところに出るといつ、光と闇の部分を併せ持つたプロデュース能力だった。

（にしても何人いるんだろう？）千人以上いるのは確かだけど）この大広場は、半円状に奥行きを持つてる構造だった。その収容スペースは千人単位は軽く入れる広さで、あまり有名でないでありますバンドを前にして、それなりの観客が動員されている。

その半円より奥、コンクリートの敷居を越えた先には、深闇の隅田川がたゆたつていた。

そして背景には、あの真つ一つにされた東京タワーが逆さまに映つて

「つ！？」

途端、胸が息苦しくなる。あの象徴的な赤光りが夜の景色から消えるだけで、与える物悲しさは計り知れなかつた。

それだけ自分が犯した罪は、重い。

「やっぱり私の見立ては間違つてなかつたわね。昨今、着歌やら着メロやらのダウンロードが主流になりつつある音楽業界。楽曲はMP3ファイルとして、データとして管理される時代になつた。で、今的情報化社会と。必然的に不正ダウンロードは横行し、歌が売れなくなる訳よ」

「…………」

「そこで私は生歌に目を付けたのよ。こんな時代でも、各アーティストによるライブの動員数だけは落ち込まなかつた。理由は単純。歌は不正にアップできても、ライブ映像は不正にアップできても、そこにある臨場感まではアップできないもの。皆、歌を生で聴けるのなら聴いてみたい。それが無料タダとあればなおさらよ」

「…………」

「勿論、じつちだつて慈善事業じやない。ステージに貼られる広告や、合間合間でスクリーンに映し出される宣伝には、がつたり広告料と宣伝費をかけるしね。なのに申請する企業が後を絶たないってのは、嬉しい悲鳴よ。おそらくはここがビジネス街の中心にあって、それだけに宣伝効果が高いっていつのがあるんでしょう」

「…………」
「ただ、こればかりは一概にそつとは言い切れないわ。だつて歌とビジネス街つて、およそ歌と無縁じやない。中年男がポツンチューんを聴きにくる絵つて、あんまり浮かびにくいやろ。そろそろ何か言つてほしいかな、なんて」

「…………」

「夏？ 夏！」

「はいはい。聞いてますつて。」このビジネス街で歌が成功した理由ですね？ 何だかんだで、歌つて取つ付きやすいからなんじやないですか。働き盛りの三〇代なら、若者ほどではないにしろ流行の曲についていつてるでしょうし、何より一緒になつて騒げるじやないですか。中年のおじさんだつて、お酒を一一一杯かつくらつてほろ酔い気分になつたら、よく分からぬ歌にだつて千鳥足で踊るでしょうじ

「さすがの洞察眼と言つたことこりだけビアンタ、冷めてるわね。まだ怒つてるの？」

「別に」

「そう？」

「まあいいんじやないです。結局は、この公園に住まう主のおかげつてことだ」

と、夏華は平氣な顔して、義姉の一一番痛いであろう部分を突く。対する彼女は、引きつたような笑みを浮かべていた。

「これまた、抽象的な呼び名を使つわね。いつものように兄さんと、そう呼べばいいのに」

「やめてください。誰かに聞かれでもしたら、大変なことになるじ

やないですか。前に知り合いだと思われて、ファンの人に揉みくちやにされたんですよ。主に姉さんのせいで、ですけどね

「いいじゃない。堂々としていれば。何一つ恥じることないわ」

「私は姉さんのように、神経図太くないんです。纖細なんです。こ

こでは無関係を装つんです」

まるでロボットのように、機械的に姉との会話をこなしていく夏華。

犯した罪に苛まれている。

そして、そんな雰囲気を知つてか知らずか、止まらない彼女の唇。正直煩わしかったのだが、いつしか彼女のペースに呑まれ、気をそらすことができていたのだった。

（……敵わないなあ）

素直に、夏華はそう思つ。どうしても家族故の羨妬目が出てしまうが、それを差し引いても姉という存在は別格だった。

飄々としているが、見るとこはちゃんと見てる。

傍若無人だが、誰より頭が切れる。

実際、こんなギャップが彼女の魅力、その本質だった。現にその奥深さに惹かれる異性は多い。

かくいう夏華の兄　冬治もその一人だった。

「けど何でもかんでも冬治の手柄にされたら、たまつたもんじゃないわね。私だつて頑張つたのよ？」

「どうしたつて行き着く先はそこじゃないですか。あの都市伝説が生まれなければ、ここまで人が殺到することはなかつたでしょ？」

「それはそうだけどお」

相変わらず、ぬけぬけと惚けてみせる姉。とはいゝえ夏華だけには分かっていた。彼女が、どれだけのことをしたかを。

加藤千世羅という義姉は、持てる知恵の全てを振り絞り、加藤冬治という兄を救つたのだ。

華道会と決別し、新たな家族を背負うことになつた冬治。元いた組織からは勘当され、けれども家族を養つていかなければいけなかつた。当時幼かつた夏華には、およそ理解の及ばない所であり、また、高校生の今に至つてもその苦労は推し量れないのだが、それでも彼が何を捨てたかくらいは分かる。

冬治は恋を、そして歌を捨てた。

義姉から聞いた話では、いい所までは行つていたらしい。路上ライブやインディーズで頭角を現し、メジャー・デビューのお声がけもあつたという。そんな矢先の、あのお家騒動。今でも夏華は、どうして親のスネをかじらないのかと思つてしまつ。浅はかな考え方かもしれないが、それでも意地なんて張ることないと思つたのだ。

けれど彼は、家族の為に何もかもを捨てた。

そして義姉はそんな融通の利かない兄を、歌の世界へと引っ張りだしたのだ。

「んー、でも確かに初めの頃は閑古鳥が鳴いてたものね。無人の公園に赤字ばかりの決済。このままじゃ一族路頭に迷つて、首をくくるしかないって所までいったもんよ」

いまだに義姉は本当のことをばぐらかしている。その様子にもどかしさを感じた夏華は、つい思つてたことが口を突いて出たのだった。

「そりなつたんじゃなくて…………そりなるよう仕向けた。違いますか？」

「私がわざと自分を苦境に立たせたとでも？ まさか」

「いいえ。姉さんはあえて苦難の道に飛び込んだんです。どうにもならなくなつて、につちもそつちもいかなくなれば、兄さんが助けてくれなくなりますから。そもそも考えてもみてください。ビジネスが本場の街に歌を盛り込むつて発想自体、どうかしてます。採

算、取れるはずないじゃ ないですか。聰明な姉さんにしては、あまりに不可解。理由は兄さんにもう一度歌つてもらう為 それ以外にないです」

「色々勘ぐつてくれてる所悪いけどね、夏。私はそんな殊勝な人間じゃないのよ。むしろ打算的な人間。で、上に立つ者ってのはね、皆そんなもんよ。下に付く者もんらの生活を背負つてるの。自分のことばかりとはいかないのよ」

（嘘だ）

確信を持つて思える。

彼女は嘘をついている。

義姉は、兄の為なら犠牲を厭わない人間だということを夏華は知つていて。実は献身的な女性だということも。

何より兄のことなら、彼女は誰より知り尽くしているのだ。だからきっと気づいている。自分が惚れられてることに。そして、必ず助けにきてくれることに。

この公園の成功、その舞台裏には互いに想い合つてるからこそ繰り出せる、そんな淡い駆け引きがあつたのだった。

「で、結局はあの兄さんを上手く丸め込んだじゃうんだから凄いです。どんだけ自分に自信あるんだ、って言いたくもなりますけどね」
「というか兄が義姉しふんにそつくりな姿形とはいえ、女をとつかえひつかえしてることに何も思わないのだろうか？」

そんな疑問が頭を過ぎるが、当の本人がそれを気にする素振りは見受けられない。割りきつた大人の関係といったところだろうか。それとも好色が、締めつけられた願望の捌け口になつてることを見越してゐるからだろうか。

仮にどちらかの推測が眞実を言い当てていたとしても、夏華のあすかとり知るところではない。

やつぱり夏華に慣れない恋愛こいことは、理解不能だった。

「んー、何か言つた？」

近くにいながら二人の会話は、もつ耳を澄まさなければ聞こえない状況に陥つてゐる。

ようやく一人は五万いざなといふ観衆、その後尾につけたのだった。

間近で響く大音量の音楽が、遍く人に歌を振り撒く。激しい楽曲の割には、それを聴き入る立ち見客は落ち着きがあつた。どちらかといふと冷めてゐる、そんな印象。差し詰め静観といったところだろうか。

（無名のバンドにここまで人が集まる訳ないし……と、なると、きっと今日の大トリを待つてゐるのね）

気づけば、時刻は夜中の九時前を示している。月9げくしかり九時といふのは、ここでは大トリ 最も注目されるべきミロージシャンだけが、歌うことを許された時間帯だった。今ではここは、スカウトマンが足しげく通うほど名が知れ渡つてゐる為、それ相応のバンド

でないとトリを張ることとは許されない。

最近でもこの時間帯でのパフォーマンスを許されたのは、次代を担うだけの実績あるインディーズバンドや、メジャー落ちしたが可能性を感じるバンド等々。メジャー「デビュー」の地に、ここが利用されることすらあるくらいなのだ。

それくらいに競争が激しく、また実を求める音楽業界。
とはいえ……

（早く帰りたいなあ）

そんなことより、一刻も早く家路に着きたい夏華であつた。
（大体、姉さんはどうして兄さんがここに来るつて思つたんだろう?
もし歌つんなら、必ず家族への事前連絡は欠かさない兄だし、
よほどのことがない限りは　）

そこで夏華は、ハツとした。

頭を巡らしてみて初めて気づく、自分の愚かさ。

少し考えればすぐに分かることじゃないかと。よほどのことなら起こつたじやないかと。自分が起こしたじやないかと。
あの、東京タワー崩落事件を。

（…………つー?）

訳もない罪悪感に駆られた夏華は、思わず一步後ずさりとした。
が、

（え?）

できない。というか、身動きが取れない。

振り返つてみる。

そこには前方と同じくらい、いやそれ以上の観衆が五万と尋めき合っていたのだった。

「……あ、ああ」

夏華は、変なうめき声を上げてしまつ。開いた口が塞がらない。
知らず、浮き足立つていた。

ついさっきまで、余裕をもって歩いていた桜並木道。そこに所狭しと並び立つ観衆。

こんな光景、初めてだった。

何でこんな事態になつてゐるのか？

そんな疑問に対する答えは歴然としていた。

皆、不安だったのだ。なんだかんだで、恐かったのだ。いつもあるはずの東京タワー、お馴染みの東京タワー、そして日本の象徴でもある東京タワー……それが、あんなことになつたことが。だから期待している。この公園の主 加藤冬治が見せる奇跡を。

あの、都市伝説を。

刹那、鼓膜が張り裂けんばかりの大歎声が、園内を席巻した。あまりの迫力に、夏華は右へ左へと体をフラつかせてしまつ。

軽く目眩を覚えながらも一呼吸置き、ゆっくりとライブ会場へ視線を戻す。

そこには

（兄さん）

彼がいた。確かにいたのだ。

堂々とそれでいて毅然と、ステージのど真ん中に佇むマイクスタンド、その前に立つて。小脇には、自宅にあつたあのアコースティックギターを抱えて。

時刻は夜の九時。

喝采は鳴り止まない。

いまだ收まりのつかない盛り上がりを噛み締めるように、兄は辺りを見渡している。不意に、彼は目元を拭うような仕草をみせた。その動きに夏華は、義姉の顔を覗いてみる。

強気な彼女、そのうつむき顔には一筋の涙が伝つていた。

他人には分からぬ、一人の感情の昂ぶり。

夏華には痛いほど伝わる、ここまで道のり。

兄はギターを真剣に身構え下を向くと、場に緊張を喚起する。たつそれだけのことと、嘘のように園内は静まり返ったのだった。まるで魔法にかけられたかのように、歌い手と聴衆の心がシンク口してやうだった。と、いうより聞き手は、そんな魔法にかけられたがつてのかもしれない。皆が皆、彼が作り出す歌の世界観に浸つていていたのだ。聴いていたい。あの、心躍る音楽を。そして遂に兄は、顔を上げる。それが始まりの合図。目に映った彼の顔つきは、これ以上ないくらいに勝氣で、これ以上ないくらいに幸せそうだった。

(来る)

第一章 不確かなる真実（うた）【都市公園 世羅（せら）4】

そしてギターは搔き鳴らされる。はじく指から導き出されるは、踊る旋律。目にも止まぬ速さで奏でられるイントロは、誰がどう見ても神業だった。更にはその作られたメロディーラインと共に鳴し合うかのように、独特的の体づかいでリズムを取る歌い手。

続く躍动感に、心奮わせるだけの音律。

加えて、ベースやドラム、エレキやストリングスといったバックサウンドが彼の楽曲に後押しする。

調和した音の総和は聞き手を圧倒させるだけの、そんな壯觀さで溢れていたのだった。

? Darling 僕はここにいます

息の詰まる このよごれた世界に

Darling 僕はここにいます

ニユースの絶えない このろくでもない世界に

Darling 僕はあなたといます

そんな世界で 笑つていられる為に

Darling 僕はあなたといます

そんな世界でも 愛すべきもんが Darling-?

Aメロは緩急がつけられたものだった。初めは激しくもなく、かといって緩やかでもない。滑らかに唇を震わせていった。声質は中性的でいながらに、人の聴覚を刺激するだけの力を持つている。加えて揮われるもう一つの力。

歌族生来の、異能の力。

彼が歌った、?僕はここにいます?というフレーズ。

瞬間辺りは暗くなり、設置された電灯、そこから放たれる光が異様な光景をみせる。

公園中を照らす電灯 照明、その全てが筋となり束となつて、

冬治だけに注がれたのだ。

「つー?」

あまりな出来事に夏華を含め、観客はざよめきだす。
幻覚と見紛うだけのありえない光景。

集められた光は、まるで生き物のように歌い手を慈しみ引き立たせ、ただただ彼の実存性を高めていく。

とはいえ光量が絞られてるのか、眩しいという訳ではなく、目に優しい加減で瞬いていた。

が、これで終わりではない。

?僕はあなたといます?で冬治は、手を観客へとふり^{かざ}翳^{かざ}す。

刹那、膨大な煌^{きらめ}きが、彼ら彼女らに降り注いだのだった。

冬治経由で放たれるそれは、まるで光のカーテンのように一息と、最前列から最後尾まで広がつていった。夏華もその帯^{おび}を浴びる。感じたのは眩しさと、そして温^{ぬく}さ。真冬だからこそありがたみあるその暖かみは、人に言いようのない歌心を感じさせる。

が、これで終わりではない。

締めに歌われた? D a r l i n g!-? の大声。

瞬間、電灯^{とけい} そのLED照明が激しい火花と共に、散つていったのだった。

結果、その灯具やらカバーやらの一切合財は弾け、一瞬にして園内を照らし上げて後、真っ暗にしていく。

打ち上げ花火のごとく最後の散り際をみせる、照明。その有り様は僕く、また殊のほか激烈だった。

?好きなもんを 挙げてみる

おにぎりおかげに 四季色とりどり

どんなちんけだつて どんな美だつて

噛み締められりや そりや結構なもんで？

Bメロはピートが上げられた、テンポのいい流れだつた。

一方、辺りはというと、舞台上に設置された照明も消され、完全なる闇に包まれている。そんな中にあつて響く歌声は、唯一の発信源であり道標。より人の耳に届く、そう工夫された環境だつた。彼が歌う？四季？。

瞬間、起こつた異変に誰もが気づいた訳ではなさそうだつた。ただ、夏華には分かる。というか人差し指に止まつてゐるのだ。夏の風物詩である、あの螢が。

?こんな

夏を抱き込んで 嫌つて 振り回され 好きになつて
くるくる

向き合い掴むは ちっぽけな現在 だとしても
あーだこーだ あつた過去

だから

どんな冬だつて 見つめて 悩み 泣き笑いして
くるくる

育み繋ぐ でつかな未来 もつともつと

嘆き 声を上げてく この素晴らしい春を？

サビが人に夢を見させる。

?夏?のところで真冬の公園に、無数の螢が舞い上がつたのだ。映つたのは、果てない緑光の粒と粒。その圧巻の光景は自然の、この世界の最も美しい部分を見せられてゐる氣さえする。

どこからか感嘆のため息が複数、ハモり合つて伝播していった。美しい。ただただ美しい。

?くるくる?で観客の頭上を旋回していく、緑の線と線。それは川となり渦となつて、夜空を席巻していく。人工の光が消えたせいか、ひょっこり顔を出した星々が、どういう訳か夏華の目に沁みた。長いことこんな景色、気にも留めたことなどない。

そして、クライマックスにあたる？春？。

瞬間、真冬の並木道に、満開の桜が咲き乱れたのだった。

「…………」

「ここまでくると、もはや誰も声を上げない。夏華はと、いつと圧倒されすぎて、現実の非現実さに頭がついていつてなかつた。ついさつきまで枯れ木にすぎなかつたそれが、彼によつて息吹をふき込まれ、薔薇を咲かせ、一斉に花開かせる。

不意に、ひらひらと舞い落ちる花弁が、夏華の鼻に止まつた。感じるのは春の訪れと、夏の奥深さ。桜を宿り木にする螢の光が、鮮やかな情景を映し出していた。倒錯した季節ならではの、不可思議な情緒。それが奇しくも、人々を魅了してゐるようだつた。

片や冬治は、と、曲を終わらせる頃合を見計らうかのように、ギターを搔き鳴らし続けている。聴衆の機微を読み、望むだけにひたすらとストロークを利かせていく。それはとりわけ長く、どれだけこの場を共有する観客一人ひとりが、この幻想的な雰囲気を味わつていていかががよく伝わる。

やがて伊智は飛び上がり、着地する。

と同時に、一斉に音楽は止み、何もかもがリセットされたのだった。

「…………」

際立つてゐるのは、終わつたと同時に焚かれたことになつていて、照明演出のみ。

螢は消え、桜は枯れ木に。電灯に至つては残らず壊されていた。静寂だけが園内を包み込む。

が、それは数瞬のこと。

「…………」

沈黙を切り裂く大音声が、追つて園内を塗り変え、混沌とさせた

だいおんじょう

いつた。

あまりな喝采。

夏華のすぐ近くでは両拳を突き上げ、謎の雄叫びを上げてる輩まで出てくる始末だ。

拍手は鳴り止まず、その熱狂ぶりはここいらにまで伝染する熱さと労いとがあった。

一方、その渦中にいる夏華はとこりと、理解できない頭で鳥肌をたてていた。

そんな中でふと、あの都市伝説のことが思い出される。

いつ、どこで、誰が広めたかも知れぬ風の噂。

『Jの公園には、魔法使いが住んでいる』

「ふふつ」

思わず、夏華は微笑してしまつ。なぜならこれでもかといふくらいに、二次元だから。

誰がやつたかなんて、一目瞭然。
千己がやつたことは、一目瞭然。

きつと持てる機械知識に託けて、ネット上にこの類の情報スラングをばら撒いたのだろう。そして、でっち上げた。無論、二次元っぽいとうだけで彼一人に絞り込めようはずがないのだが、この家族を長年やつてる夏華に見通せないことなどなかつた。

つまり、この兄を巡る歌の駆け引きは、単に一人の恋模様で繰られる、そんな薄っぺらいものではない。

家族の絆が絡んでいるのだ。

繋がっている。他人には分からぬ、深く深い奥底の部分で。

そしてそこには、冬治の手を引く千世羅あねがいて、冬治の背を押す千己おとじがいて

「…………」

そしてそこには唯一、夏華の姿だけ、どこにも見当たらなかつた

の
だ
つ
た。

第一章 不確かなる真実（うた）【都市公園 世羅（せら）5】

あらかたのお祭り」とが終わって後、夏華はしんみりとした雰囲気に浸つていて。集まつた大勢の観客も同じ気持ちなのか、すぐに帰ろうとせず、雑談をしながらもその余韻に浸つているようだつた。

すると、

「あ」

順々に明かりが灯されていく。ちらほらと、公園内を照らしだすLED照明。

わきほど異能の力によつて壊されたはずの電灯が、その力によつて修復され、気づけば元通りになつていたのだった。

（歌いながらに、終わつたら元通りになるよつ詞に込めてたのね。どこの部分がまでは分からぬけど……細部までパフォーマンスは欠かさないあたり、兄さんらしい）

本来なら螢や桜を消した時に、同時に電灯も元に戻せたはずだ。それをしなかつたのは、ひとえに演出の為。現にその照明は、この宴の終わりをきちんと印象付けていた。

最初から最後まで歌に対して真撃な冬冶。普段が大雑把なだけに、どれだけそれに心を碎いてるかがよく伝わる。

どうしようもなく歌つていていのだろう。たとえ、日の目を見ることがなくとも。

一方、観客はといつと、よつやく帰り支度を始めだす。これだけの奇異が起こつても騒ぎ立てない辺り、今の世といったところだ。おそらく勝手に最新の映像技術やら3Dの進化版やらで、自分の脳内に説明をつけてるのだろう。

無論、歌の異能によるものだと気づけるはずもない。それでも中

には、疑問に思つてパソコンの掲示板やツイッターに書き込む輩が出てきはするが、どれもこれも無為に終わつた。

表沙汰になつては何かと困る、もう一つの華道会がそれに蓋をしてるのだろう。

「うーん。さつてと、帰りますか」

と言つと義姉は、流れだした人ごみに合わせ公園出口へと向かう。ずっと繋がれていた彼女の手は離され、温もりが消えていった。

「え？ ちょっと姉さん！ セつかくだし帰るなら兄さんと一緒に」

そう夏華が声を上げたところで、義姉はふり返る気配さえ見せなかつた。ただ後ろ向きで、軽く手を振るだけ。何せこの人の数だ。すぐさま彼女は雑踏に紛れ、追いかけようとする夏華は、人のうねりに巻き込まれてしまつていた。

身動きがとれず、ぎゅうぎゅう詰めの中を右往左往するばかり。やつと人波が引いたと思つた頃にはもう、義姉の姿はどこにも見当たらなかつた。

「…………」

ぼつんと公園に取り残された夏華。勿論、他にもまだ遊んでいたい輩がいるにはいるが、身内に置いてけぼりにされたのは、いささかショックだつた。

とはいゝ、これはいつものこと。

かれこれ何年になるだろうか。

その期間が分からぬくらい長く、義姉は兄を避け続けている。

あれだけあからさまに想つてゐるのに。想われてるというのに。そして、それは兄も同じ。

これがかつて恋仲だつた二人の現状。別れた男女としては、あまりに変な話だつた。知つた人なら誰だつてこう思つ。

こんなのおかしいと。

（早くヨリを戻してほしい。いや、私が仲を取り持つんだ。私だってこの家族の一員なんだから）

自分が何の役にも立つ

ていない。

だから、夏華は力になりたかった。そう強く願っていた。もひづつと、ずっと前から。

「 夏?」

聞き違えることのない男声が聞こえる。兄だ。黒のダウン「ホール」を羽織つている。

考えに耽りながらも、とぼとぼ歩いていた夏華は、気づけばライブ会場の舞台袖まで来ていた。

ライブ終了後はいつもここに来ていたので、あまり意識せすとも辿り着けたようだ。

「あれ、兄さん?」

「それはどちらかといつて、ひつけのセリフだと想つんだが。何で夏がここに?」

「あー、それは姉さんが……いえ、やつぱり何でもないです」「ん?」

「そんなことより、もう終わつたんですね。帰りましょ帰りましょ。ていうか、寒くてたまらんのですよ」

すると、おもむろに兄は夏華の手を触れてみせる。

「お前、こんなに冷えてるじゃないか!? それにその格好……まさか学校帰りで、そのままここに?」

「え? え、ええ! その通りです」

さすがに、本当のこととは喋れない。

「こんな寒いってのにどうして? いやもういい。帰るぞ」

問答無用で夏華の手を取ると、公園出口まで引っ張つていく彼。正直、人前で兄と手を繋ぐことに恥ずかしさがないと言つたら嘘になるが、この通りな無神経男なので、あに「いきうと」身體としては色々諦められた。

第一章 不確かなる眞実（うた）【タクシーで帰宅】

案の定、無鉄砲に顔を出した冬治を、園内に残つてたファンらが丑さとく見つける。すぐさま取り囲まれた。が、当の彼は一切を取り合わない。黄色い歓声も聞こえてるだろうが、それにも応えようとしなかつた。

ただ集まつた人混みをかき分け公園出口に出ると、タクシーを止めるべく道路脇で手を上げている。

（……つぐづぐ融通の利かない人）

本当ならこんな等閑なこと、するはずがないのだ。歌い手であれば誰しも、聞き手がどれほど大事な存在か分かっているもの。それがメジャーバンドでなければ尚更だ。なのに、冬治は突き放す。というより、それ以上に優先すべきものがあるのだ。

（また、私のせいだ）

彼の中心にあるのは、いつだって家族だった。

思い出されるのは今朝のひと悶着。妹がお腹を空いているというだけで、兄は平気で恋人を切つて捨ててみせた。

『とりあえずお前、もう帰れ』

反芻される、あの突き放しの言葉。もし自分が彼女の立場だったらと思うと、たまたまものではない。

そのくらいに極端な、彼の家族愛。

つまり夏華は愛されていた。そして、それは同時に夢の足枷になつていることも意味する。

「 夏？ おーい。聞こえてるか？」

「え？ は、はい」

兄に声をかけられ、夏華の思考は現実に引き戻される。すると田の前、その道路端にはもう白塗りのタクシーが止まっていた。チカチカと、ハザードランプを点滅させつつ後部座席のドアを開かせている。

「お前、さつきからなんか変だぞ。ぼーっとしてばかりで」「いや、その、すみません」

「いいから。ほら」

と、兄は妹を中へと先導する。先にタクシーに入った夏華が奥に詰めると、追つて彼が乗り込んできた。

そのままの勢いで、兄は行き先をタクシードライバーへと告げる。ややもしてドアが閉められる音がした。白黒の制帽を田深にかぶつた中年男性が、ハンドルを道路へと切つていく。

目的地 二人の家へと、車を走らせていったのだった。

車内は暖房が利いており、暖かかった。車外との温度差に晒された夏華、その黒フレームのメガネは曇つてしまっている。

後部座席は三人が座れるくらいの余裕があった。とはいえ、夏華は兄にぴったり寄り添う。どうしてか人の温もりが欲しかった。そしてそれは、誰でもいいという訳じゃない。

「ん」

兄は、声にもならぬ声を発すと夏華を抱き寄せる。そのまま手を上げていくと、妹の長髪を撫でていく。とても自然な仕草で。

「着くまで寝てな。起こすから」

言つて夏華の頭を自分の右肩に預けてくる、冬治。ついさつきまであれだけの観客を相手に、あのパフォーマンスをやつてのけただ。真冬だというのに、兄の着るダウンは少し汗ばんでいた。おそらく中のシャツはびしょびしょだろう。

どちらが本当に疲れてるかは、はっきりしていた。

そして、それが悪いと分かつた上でも夏華は彼に甘えてしまう。ずっと長いこと、繰り返されてきたこと。慣れてしまつたというより、一人にはこれが日常だった。

夏華にとつて加藤冬治という人間は、兄であると同時に、母であり父でもあつたのだ。

幼い頃、華道家を飛び出してからこれまで、どんな時も一緒にいた。無論、いっぱい喧嘩した。いっぱい反抗もした。それは千己も同じで、当時、反抗期を迎えた二人を一手に受け止めた冬治には相当な苦労があつただろう。

それでも、全て受けきつてくれた。そして、いっぱいに笑い合つた。だから夏華は思う。強く、強く思う。

「へえ。そなんですか。にしてもやつぱり、不況の煽りですかねえ」

兄の声がする。タクシードライバーとたわいもない話をしているようだった。片や夏華はと、うとうとしていた。

彼の温もりに包まれるだけで、与えられる安心感は計り知れない。どんな恐怖も吹き飛び、どんな不安も拭い去られる。守られている、そう強く感じるだけの無条件の愛。

だから夏華は思つ。強く、強く思わずにはいられない。

加藤冬治といつ兄の、力になりたいと。

第一章 不確定な眞実（うた）【四人家族で和氣藪々】

車内に充满する暖氣に、寒氣が吹き込まれる。

ドアが開かれたのだ。

知らず、夏華の体が身震いをおこす。

「夏。着いたぞ」

兄に呼ばれ、肩を揺すられた。随分深い眠りについていたのか、夏華の意識はすぐには戻つてこない。

「……ん。んう」

寝言ともとれる猫なで声をこぼしてしまつ。タクシードライバーの「可愛い妹さんですね」との一言に、「ええ。ただ潔癖症なのが、たまに傷でして」と喋る兄。

どうやら一人は雑談中に、色々と身内話もしていたようだつた。

「兄、さん。着いたの？」

「あ、起きたか。先に降りてな。こつちは金払わんといかんから」「はいはーい」

まだ眠そうなだみ声を残しながらも、自分方面に開かれてるドアから外へと出る。

「寒つ」

冷えた外氣が、ぼんやりした頭を叩き起こしていく。
すると、見える景色が馴染みの家を映しだした。

夏華達の家だ。

それは、一階建ての一軒家。みすぼらしい、というほどではないがかなりの年季が入つてゐる。一階建てなので、大きいかと問われれば必ずしもそうではなく、こじんまりとしていた。色は近隣の住宅街に溶け込む中間色で、庭とも言えない敷地を跨いだ先に入口の扉がある。

一階を見上げてみると、窓からは、薄明かりが灯されていた。義姉、義弟共に、もう帰つてゐる頃合だらう。

帰る家があるという、迎えてくれる人がいるという」と。
夏華にとつてそれは当たり前で、だからこそ妙なテンションにな
っていた。

広げた手を頬に当てるど、

「帰つてきましたよー！」

「こら、夏。こんな夜中に近所迷惑だらうが」
すぐさまお叱りの声をもらつ。と同時に、ブロロという効果音も
耳にした。タクシーが帰つたのだろう。

「む。せつかくいい気分でしたのに」

「怪しいことをすな。それより、ほら。入つた入つた」

兄は妹の背中をポンと叩くと、先へと進む。その動きに合わせ、
夏華も後をくつついでいったのだった。

扉が開かれる。一人は家内へと入つた。

玄関に辿り着くとそこには

「あら。お帰り」

まるでばつたリ居合わせたかのようだ、そこには千世羅^{あね}がいた。
バスタオルで髪をくしゃくしゃに拭きながら、なんてことない言葉
をかける。

「ただいま」

冬治^{あい}がそれに答える。

結果、今日ここにきて初めて交わされることになつた、一人のや
り取り。

夏華は、義姉の顔を覗いてみる。

肩までかかるセミロングの髪 タオルケツトを被つたそこから
垣間見れた彼女の横顔は、あんまりな笑顔。

最高の、女性としての笑みだった。

(……姉さん)

「」の一時にかける義姉の思いに、夏華は胸打たれる。当然、鈍感^あ

男は、彼女のそんな横顔など見ていない。ただ靴を脱ぎ、夕食の支度をするためリビングに消えていった。

「こういう所は、いくら家族を第一に考えてるからって許せるものではない。」

「どうして気に留めてくれないのかと夏華は思う。」

「思いのほか水滴が飛び散つて、玄関前の床。」

「一階ではなく、二階に浴室があるという事実。」

「義姉の部屋は二階にあるという事実。」

「これらの中、一つでも気に留めればすぐに分かるはずなのだ。義姉がどうして玄関にいたのか。」

「夏もお帰り。もう少ししたら夕飯だから、着替えてきなさい」「その彼女に軽く声をかけられる。いつもの、自信満々な声色で。「了解です」

「だから夏華も元気よく応える。彼女の想いに。」

「あれこれ首をつつこむべきでないのだろう。少なくとも今は、とりあえず姉妹仲良く階段を上ると、それぞれの部屋に散つていいく。四人の部屋割りは明解で、階段側から兄、妹、義弟、義姉の順だった。ちなみに、奥側には洗面所兼浴室がある。夏華はすぐそばにある扉、そのノブに手をかけた。そして回す。開かれた自分の部屋。」

「瞬間、何かが飛び込んでくる。」

「映つたのは、ちびつ子の鬼気迫る表情。
千尋の泣き顔だった。」

第一章 不確かなる眞実（うた）【四人家族で和氣藪々】

「姉さん！」

抱きついてきた小柄な彼を、反射的に受けとめる夏華。少しのけ反つたが、踏ん張れるだけの重みだったので押しとどまる。

「つくりしたあ。一体全体、何でつてのよ？」

「無事だつたですか！？ 無事だつたんですね！ よかつたああ

次は勝手に納得して、勝手に安堵するという奇天烈ぶり。さすがに夏華としては、千己の言動が理解できなかつた。

「ちょっとチハチハ。どうしたのよ。それに、今さら敬語つて「いやだつて何度連絡しても繋がらなかつたから、心配で心配で」その言葉に、夏華は少し回想してみた。

（ああ）

そして思い当たる。確かに、千己のあまりな面倒くさげに、携帯の電源を切つてたんだつた。

（それで携帯が繋がらなかつたから、私のことを心配して……そつかあ）

敬語なのは、こちらが怒つてゐるんじゃないかといつのも心配してのことだらう。

どこまでも心配性な千己。

けれども、それもこれも自分を思つてのことだらうから、夏華は彼が可愛くてならなかつた。

少し強めに抱き返す。いまだ鼻につく臭いが潔癖症な由らを不快にさせたが、それ以上に愛でてあげたかったのだ。

「おバカ。私は大丈夫よ。大丈夫

ひねくれた義弟でも、根は優しいことを夏華は知つてゐる。何せこの家族の一員だ。

あの兄の愛がまんべんなく行き届いた家族。

そんな愛された環境だからこそ、互いが互いを思えるのかもしけ

ない。

「とにかく、ほら。着替えないといけないから廊下で待つて。で、一緒にリビングまで行こう。ね？」

「また夕食……^{デス・チャイニーズ}中華料理ですかね？」

「そうね。中華料理ね^{デス・チャイニーズ}」

穏やかな雰囲気になつた場に、歯がゆい沈黙ができる。

後、二人して吹き出したのだった。

わだかまりが無くなつた所で、夏華は千己を部屋の外へと促す。一人になると制服を脱ぎだし、黒フレームの眼鏡を外して近くの鏡台に置いた。花柄で、もこつとした部屋着に着直すと、上着に滑り込んだままの長髪を両手で外に追いやる。オシャレというよりは暖かさを重視したそれは、室内ならではだった。

着替え終るとドアの前で待つてた千己と共に、一階へと降りていぐ。そのまま右手に見えるリビングへと入った。

四角のリビングは真ん中にあるテーブルを中心に、奥には台所、右端にはテレビをと、まさに一家団らんの典型的仕様だった。この家一番の広さを誇るそこは、一軒家ならではのものもあり、それが左端にあるガラス戸である。そこを開けた先はあの庭とも言えない敷地が広がつており、つまりはすぐそばにプロック塀があつた。

そして、そこに目を向けた時に、事件は起つた。

夏華にとり目を疑う光景にして、許されざる行為。

ガラス戸が開けられた庭先にて兄が、タバコを吸つていたのだ。ふかふかと。

吹かしたところで、夏華の堪忍袋の緒が切れた。

一眼散に兄のところまで向かうと、その咥えタバコを奪い取る。

ただ、消そうにも近くに灰皿はない。有害物質を手にしてるだけでも我慢ならないというのに、その最たる副流煙がゆらゆら迫つてくるというのだから限界だった。

夏華はそれを床のフローリングにこすりつける。

「お前つ！？ 何で！」

「考えられない！！」

夏華による罵声を契機に三度、兄妹喧嘩の火花が散ったのだった。
「どうからか「よくやるわねえ」といった女声が聞こえる。義姉で
ありのア。

「どうからか「さすが潔癖症^{けっぴ}」といった男声が聞こえる。義弟であ
るア。

一人に見守られる中、口喧嘩する兄妹。

その有り様は騒がしく、だからこそ変わらずな家族の情景なので
あつた。

第一章 不確かなる眞実（うた）【明かされる眞実】

夕食を終えると皆が皆、寝支度に入る。

各々がそれぞれの明日のため、自分の寝床に入ったのだった。
結果、静まり返った二階の廊下。

その暗闇にあって何故か、一条の明かりが照っていた。

光源は奥側。

時刻は深夜〇時。

洗面所にいたのは、就寝したはずの夏華だった。

化粧をしている。ファンデーションやマスカラやらで整えられた顔つき。齡の割には背伸びした、そんな色香を漂わせていた。目には眼鏡の代わりにコンタクトを入れ、リップで唇に紅のルージュを塗つていく。

ふと、こんな時、父がいたらどうするのだろうと思つ。

兄と同じく、歌を人殺しの道具として揮つことを許さないのだろうか。

それとも、自分の苦心を汲んでくれて優しく抱き締めてくれるのだろうか。

いすれの問いかけも、今となつては答えを見ない。もう、何もかもが手遅れだから。

父は殺されたのだ。あの東京タワーの警備員にして、白道会の元組員である室井健人に。

夏華が洗面所から廊下に出ると、声がした。かすかな咽び声。
音源は扉を隔てて向こう側から。義姉の部屋からだった。

（姉さん）

彼女は泣いていた。声質はぐぐもつていて、布団を被つて必死に声量を抑えようとしてるのがよく分かる。それでも伝わる、どうしようもない悲壮感。

特に兄の歌を聴いた後に、それは激しさを増すのだ。一度や一度

じゃない。

もう何度も、何度も彼女の涙声を聞いてきた。

「…………

ふと、こんな時、義姉の母がいたらどうするのだろうと思つ。兄と同じく、家族第一の傍観者を氣取るのだろうか。

それとも、義姉の恋心を汲んで優しく抱き締めてくれるのだろうか。いずれの問いかけも、今となつては答えを見ない。もう、何もかもが手遅れだから。

義姉の母は殺されたのだ。華道会の、ある組員に。

そして、この一人の殺人事件は同時刻、同じ場所で起こつてゐる。そして、その翌日、加藤冬治と加藤千世羅は、長い付き合いに終止符を打つたのだった。

チャリラリーラーン

場違いに陽気な着メロが流れる。それを一音でとると電話に出た。「まだ、階段のところよ」

気づけば夏華は、階段を下りるところまで來ていた。とはいへ、家族を起こしてはいけないので小声で話す。

相手からの音声はない。沈黙が場を支配した。

ややもして、プツツという音が聞こえる。電話が切れたのだろう。

夏華は玄関まで辿り着くと重い出口への扉、そのロックを外す。

音を立てないよう、扉を開けると外に出る。するとそこには、

「あ、やつときた」

さつき電話をかけてきた主 一
ード「ノートを纏い、小脇には小型のノートパソコンを抱えている。

「じめんじめん。下準備に手間取つてね」

言つて二人並ぶと、扉から離れていった。ゆっくりと外に向かつて歩みを進める。

その間際、夏華は振り返ると見上げた。

送つた視線、その先にあるのは兄の部屋だった。

（……兄さん、待つて。私が全部終わらせてくるから。そしたらまた、みんなで笑い合おうね。兄さんが恋を押し殺す訳でもなく、姉さんが恋で嘆くこともない。そんな本当の家族に、きっとなれるから）

夏華は胸の内に今一度強く、念を込める。

そうして一人は、夜の暗闇に消えていったのだった。

加藤千己が立つていた。厚着のフ

第一章 確かな代償（うた）【某パークセンター】（前書き）

視点が、主人公（夏華）からある人物へ変わってます。

第一章 確かな代償（うた）【某バー・カウンター】

第二章 確かな代償（うた）

深夜 某バー・カウンター

そのカウンター席に男はいた。

ロックグラスに、なみなみ注がれたウイスキーを流し込む。水割りでもなく、ソーダ割りでもなく、ただ氷一つで喉を通らせていつた。アルコール度数が高いせいか、首筋と耳元が熱い。顔は真っ赤で、すでに泥酔するほどの量を飲み干していた。が、向かいにいるバーテンダーに空いたグラスを置く。その仕草に、彼は少し引きつった笑みを浮かべながらも、すぐさま愛想笑いをふりまいていった。それもそのはず。

男の顔形は、とても堅気の^{かたき}人間のそれではなかつた。

黒スーツに、黒のサングラス。厳しい風貌に加え、ごつい骨格をしている。髪型はスプレーにより固めたオールバックで、明らかに他人を寄せつけなかつた。現に人気の多い店内にあって、彼のいるカウンター席には誰もいない。

男はぐらんぐらんする瞳で、辺りを見渡す。そこでは、バスドラムの拍子が特徴的なハウス・ミュージックに合わせ、男女が踊り乱れる様が見て取れた。上部に設置された巨大なミラー・ボールがきらきらと、うす暗い店内に細切れの光を差していく。くすんだ地下にあつてそこは、言わばナイトクラブといったところだろう。

（どいつもこいつも）

荒れた心で覗く景色は、気に入るものではなかつた。

男は女を誘うために、女はそんな危険を味わうために、腰を振つてるようにしか見えない。そんな、発情した獣の如きまぐわいは嘲

笑を呼ぶものでしかなかった。

再びカウンターに目線を落とすと、なみなみ注がれたウイスキーがある。震えた手でそれを掴むと、一気に流し込む。喉元がいやに熱い。覚束ないグラスの持ち手が、当然の結果を生んだ。

手からするりと抜けたグラス。それがテーブルに落ち、次いで転がつて床に落ちた。パリンと、割れたガラス音が耳に障る。やおら拳をテーブルに叩きつけた。強い打音と共に痛々しい光景が、バーテンダーの体をピクつかせ、顔をしかめさせていく。

(ちくしょう…………ちくしょう)

男は気に食わなかつた。これ以上ないくらいに不機嫌だつた。

「わしらを守つてくれるつて そういう話じやなかつたのかえ」途端、今度は急に涙声へと変わる酒びたり。感情の起伏が激しいが、どちらにせよ最悪な気分であることに変わりはない。

やはり、頭を何度もかけ巡るのはあの、東京タワー崩落事件。これがあの異能の力によるものだといふことは、男も分かつていた。

なぜなら男もまた、その華道会のれつきとした組員なのだから。(やつぱり華道会の会長がやつたに違ひねえ。けど、だつたら何で一度はわしらを助けたんだ? 殺そうと思えばいくらでも手があつたはず。何であんな惨いことを)

と、思つたところで吐き気を催し、堪らずカウンター席で嘔吐する。口いっぱいに酸っぱさが広がつた。こんな面前でみつともない真似をしてるといふのに、どこか他人事のように思える。ただせり上がるままに、吐き出していつた。

凶太い男声に加え、広がる生臭さ。

そんな中だつた。

ふと、背中をさすられたのは。

「ああん!!」

これが極道の性^{さが}なのか、むやみやたらに虚勢を張る男。そして、睨んだ先にいたのは、あまりに予想外な人物だつた。

女性だ。それもどびつきりの上物で、長髪な。

目、鼻、胸、腰回り 映る四体の全てが、整っていた。均整の取れた美といった所だろうか。少しけばいとも取れる化粧の濃さも、幼さの残る顔を隠すという意味では、きちんと力を持つていた。

年齢の割には背伸びした、そんな色香を漂わせている。

とはいっても、それ以上に男が気になつたのは、彼女の服装だった。冬だというのに露出度の高い真紅のドレスを着こなしている。開けた胸元にはたわわな谷間が見え、スカートのスリットから見え隠れする脚のラインが、男をそそらせていた。

ここまで露骨にアピールされると、さすがに男は事態が呑み込んでくる。自分の腕にはめた高級腕時計をさすると、自嘲的な笑みを浮かべたのだった。一体自分は何を期待してたんだと。

その女がかける第一声は、やはり甘い誘惑であった。

「大丈夫ですか？」

「……ああ。悪いな」

「いえ。でも、まだ顔色がよくないですね。無理に飲みすぎたんでしょう？」

言つて女は、床下まき散らされた嘔吐物を取り出したハンカチで拭いていく。無論、多量に水分を含んだ惨状だ。ハンカチ一つで、どうにかできるものではない。

つまりはパフォーマンス。密引きのための。

「お嬢ちゃん。店はこの近くなのか？」

「はい？」

まずはすつろけてみせる女。最低限の演出は心得ているらしい。

「ふん。ならそれでいい。名前は？」

「名前、ですか」

そうオウム返しする女。顔は窺えない。男からの田線では、しゃがみ込む彼女の後ろ姿だけが見えていた。

そうしてじきに、彼女がふり返る。映った顔つきは、悪戯っぽい笑みだった。

「私、夏^{なつ}つていいます」

「ナツ？ それが店での名前か。珍しいな」

およそキヤバクラやクラブでは耳にしない源氏名だった。かくいう彼女は、困ったような笑みに表情を変えていく。その仕草が妙に色っぽくて、男のツボでもあった。

第一章 確かな代償（うた）【某パークセンター2】

「何か、お話でもしましょうか？」

と女は喋ると男の真横、その座席にすわる。肩肘をテーブルに付くと、長髪を耳元までかき上げた。そんな一挙手一投足が、男の情欲を駆り立てていく。

「…………」

そして、女は無言になつた。

自分で話を持ちかけておきながら、黙り込むという行為。聞き手に徹するというのもまた、夜の世界で学んだテクニックなのだろう。

（よくできた女だ）^{スケ}

同時に、計算高い女だとも言える。が、男にとつてそれはもうどうでもよかつた。この溜まりに溜まつた鬱憤を誰かにぶちまけたい。そんな気分だったのだ。それがたかだか遊女なら、なおさらのこと。べつぴんな女を前にして男は、次第に饒舌になつていつた。

「わしを見て、何か思わないか？」

「何かとは？」

「わしを見て、周りの人間と同じに見えるのかと、そう聞いているその言葉に、女は人差し指をおでこに当てる。考え込んでいるようだ。後、返ってきた答えは、うまくぼかされたものだった。

「どう、なんでしょうね」

「はつ。そこまでの気配りは無用だ。この形を見れば誰だつて分かるだろう。わしやあ金筋（筋金入りの極道）よ。それもどびつきり悪のな」^{なり}

「どびつきり？」

「ああ。わしはある、華道会の人間だ」

その一言に、女は驚いたように瞳孔を開かせる。更には両手で唇を覆つたみせた。

絶句している。

「恐いか?」

と、男が低音で言うのに対し、女は視線をテーブルに落とした。

小刻みに体を震わしている。少しの間を置いて後、

「ええ」

「そう声を震わせる。が、すぐに顔を上げると彼に向かって、こう切り返してみせた。

「けれど、そういう危険な香りを嗅ぎつけるのが、夜の蝶じゃありません?」

「……ははっ。いい女だな、お前は」

まさかそんな言い回しを使つてくるとは思わなかつたので、男はあっけに取られると共に、唸つてしまつ。気丈な女には、何とも言えない清楚さが醸しだされていた。

(まあどうせ、この女に話した所で何が起るでもあるまい)

上機嫌になつた男は、ようやく口を滑らせていった。

「わしゃあ今、命を狙われてるんだ。その華道会の親玉にな

「命を? これまたどうして?」

「それはこつちが聞きたいくらいよ。一度はわしらの罪を揉み消してくれて、公にもしなかつた。あれだけ守つてくれたといつのに、匿つてくれたつていつのに……今更になつて何で!!--

我慢ならず再度、拳をテーブルに叩きつける。三度ふり上げようとして

「な!?」

瞬間、腕をひしひと掴まれた。真横にいた女がその前身を使って、その腕に抱きついていたのだ。突然の出来事に、開いた口が塞がらない。ただ固まってしまつっていた。

第一章 確かな代償（つた）【夜の歓楽街1】

「「」白愛くだわー」

声と体を震わせながらも、全力で掴みにかかる女。「ーーのふくら
みが惜しげもなく、服ごしに暖かな感触を伝わらせる。

男が疑問に思うことは当然だった。いくら密引きの為とはこえ、
そこまでするものかと。もしかしたら本当に心配してくれてるので
はと。

そんな妄想に酔った男に、女が耳元で甘く囁く。

「その、わしらつて？」

その質問は唐突で、だが舞い上がった男が気にできるほどのも
ではなかつた。

「ん、ああ。東京タワー崩落事件、知つてるか？」

「それは勿論。確かに元暴力団の方が犠牲になつたとか」

「ああ。その室井健人つちゅう奴とわしが、あの
と口にしたところで、ハツとする。今自分は何を言おうとしてた
のかと。」

何を言わせられようとしていたのかと。

「おんぢれえ（お前）」

男の、女を見る目つきが変わる。

一方、女も笑みを変えていく。

悪女なそれへと。

「よつやく、酔いが冷めましたようですね。ちょっと夜風にでも当
たりましょうか」

そう囁くと男の腕をするとと抜け、女は出口への階段に向か歩い
ていく。男もすぐさま追つて、その上り階段に駆けていった。が、
まっすぐ進んでるつもりが千鳥足になつてしまい、知らず横転する。

「ちくしょうがああ！！」

叫んでみた所で、何が好転するわけでもない。女はもう階段をのぼっている。

（待てってんだ！）

男は焦っていた。嫌な予感が頭をもたげる。

痛めた体を抱え、トンネル型で地上に伸びる階段を一段一段、這いつくばって上がっていく。立つて階段をのぼれるだけの力はもう、残つていなかつた。それくらいに酒に呑まれた飲兵衛^{のんべえ}。

どこをどうのぼってきたかまで覚えていない。その後、どこをどう歩いてきたのか。

気づけば陰湿な空間を抜け、掃き溜めに潰れていた。

ここは夜の歓楽街。

深夜ならではの華やかさが、眠らない街に確かに彩を与えている。路上で人が途絶えるということではなく、往来する人波に呼び込みの男女が声を上げていた。

両脇に並び立つビル群、そこで隙間なく展開される怪しげな店の数々。

その建物らから突き出すようにひしめく看板が、休まらないネオンを映し出していた。

道端にまで溢れかえる、その店々の雰囲気に合つたメロディーがこの界隈を妖艶にみせている。

かくいう男がいるのは、その中心街を一步外れた路地裏。一張羅のスースを汚すだけ汚し、ゴミ袋の山に体をうずめていた。

朦朧とする意識では、女を追つていたということくらいしか分からぬ。

「あらあら。完全に潰れちゃいましたかね」

声がする。さきほどの女の声。すぐ背後からだ。

男は最後の力をふり絞り、翻つて女に飛びかかる。が、体は空を切るばかり。

今度は地べたに顔をうずめたのだった。

「くそつたれがあ！」

自分の体だというのに口づけたことを聞いてくれない。口内からほ、鉄の味がした。どうやら唇を切つたらしい。

見上げると、そこには震むよつた瞳の女に見下ろされていた。ただでさえジメジメした陰鬱さがある場所だといふに、そんな視線を浴びせられるものだから堪つたものではない。

「近藤千恵」

唐突に、彼女が告げた個人名。

その名に男は、震え上がつた。

「お、おうあ！？ おどれ（お前）どひー」

「殺しましたね？」 あなた

冷めた口つきで、女は淡々と事実だけを連ねていく。

「近藤千恵 華道会若頭である近藤の妻」

「おんどうれえ……何者や？」

「何故、殺したんですね？」

「わしの質問に答えるや、ドリマアーーー。」

「何故、殺したんですね？」

「おんどうれに答える義理なんてもんはねえーーー。」

呂律の回らない唇で、それでも口いつぱいに虚勢を張る。それぐらいに男は恐怖していた。何故だかは分からぬ。伝わるのは女の瞳に宿る苛烈な意思だけ。さきほどのナイトクラブとはまるで違つ、嗜虐的な瞳。

（殺られる）

漠然と、だが確信をもつてそう思えてしまつ。なぜなら身に覚えがあるから。たかだか遊女相手に気が動転するのは、味わつたことがあるからだつた。

「この、圧倒される眼差しを。

「義理？ ならありますよ。だつてあなた達、私の父……殺したで

「う？」

「つー？」

「まだ気づかないんですか？ 私ですよ。あなたとグルだつた室井健人 東京タワー崩落事件で犠牲になつた元組員が、殺した人物の娘です」

「あ、ああ」

「そう。あなたの華道会の親玉、華道花の娘なんですよ。私は」と、女は明かしたところで不気味の笑みをみせる。その様は、まさに悪の真骨頂といったところだらう。

対する男は啞然としていた。口をぱくぱくさせている。と同時に、どこか納得すべくでもあつた。それもそうだと。

何せあの会長の娘だ。あの末恐ろしい瞳にデジヤブを覚えたのも、今では分かる。会長と同じ強さをもつた瞳。

「ナツ……夏華お嬢様、ですね？ となると、そういうことでしたか」

「ええ。おそれくは全部、あなたの思つてゐる通りですよ」

男には思ひもよらない出来事だつた。しかし、いつもなると色々説明がついてしまう。

「にしてもどうやってわしらのことを？ 真実はすべて、闇に葬られたはず」

「この情報化社会。隠しきれることなんてあるはずがない。それにウチには、じうじう調べじとにめっぽう強い弟がいるんでね」

第一章 確かな代償（つた）【夜の歓楽街2】

「わしを、どうするおつもりか？」

「どうする？ 決まってるでしょう」

「同じですよ」

「同じ」といふことは、あの東京タワーで犠牲になつた男と同じ末路といふこと。

どどのつまり、救われないと云つことだつた。

刹那、男の体に異変が起つた。

絶望を、死を突きつけられたからこそくる、どうしようもない怯え。男は噛みあわない歯を幾度となくかち合はせ、唇を震わせている。酔いなんでもう吹き飛んでしまつていた。

ただ怖い。逃げ出したい。

従つて次に起こす行動は決まつていた。

「何故、殺したんですね？」

夏華がくり返した質問を契機に、男は雄叫びとともに起き上がる。あまりの鬼気迫る勢いのおかげなのか、彼女は悲鳴を上げると尻餅をついた。

それを見返すまでもなく男は瞬時に地を蹴る。光の差す方へ。

（大勢の中に紛れられればまだつー）

男は生きたかった。とにかくどんなことをしてでも生きたかったのだ。それがどんなに往生際悪く、みつともないものだとしても。ふらつきながらも必死に、足を引きずらせ雑踏に飛び込む。その拍子に足がつんのめつて、前のめりになつてバランスを崩した。無関係の歩行者を数人巻きこみながらも、人混みの中心に倒れこむ。何事かと覗きこむ野次馬や、倒されたことに文句を言つ輩もいたが、男の風貌を見るや否や一目散に去つていく。

ここは夜の歓楽街。

相変わらず人通りは絶えず、ちょっとした騒ぎなどは氣にも留めない、都会の冷たさが身に沁みる。

だが、男にとつてそれはどうでもよかつた。重要なのは、人混みに紛れられたこと。

ふり返つてみる。そこでは夏華の姿どころか、数多の顔形が行き交つており、誰が誰を特定することなど不可能のように思えた。

（助、かつた……助かつた！－）

ボロ雑巾のような格好ながら男は、小さくガツッポーズをする。一時的な危機から逃れられたためか、安堵できていた。ホツとしていた。

そして、少し浮かれていたのだ。だからかもしれない。

流れる音楽が変調をきたしている そのことに気づけなかつたのは。

種々雑多だつたはずのメロディーが、同一のイントロを利かせはじめる。それはダーク調で、かつディストーションがよく震わされた、暗くも莊厳な曲調。

響く重厚感は、ともすると地獄の黙示録を思わせる、そんな音律だつた。

第一章 確かな代償（うた）【夜の歡樂街3】

O r ?
D o
y o u
w a n n a
b e
a n
e a r t h
m a n ?

アフロはノル前導ノアで一度 無音の空間が生まれる

そこに上書きされた加工が施された機械ボイス どんなにエフロクトがかけられていたとしても、それが異様だということは明確だった。

それは音痴な歌声
あんまりな女声だつた。

「！？」

？earth man？の所で男は、ありえない重力に打ちひしがれる。

刹那、全身がアスファルトの路面に叩き付けられ、且つ抉つこまれ、めり込まれた。

一
か
は
二
！
？

顔中に鼻血のものか鮮血が舞い散り、過度の痛みに四肢の自由が奪われる。

型近くで隆起している。

が、それで終わりではない。

? flying man? の所で男は、ありえない浮力を得る。

刹那、
全身が夜空に飛ひたつ

!

絶叫マシンと宣げゝ慾に止められ、落とされる。

違つるのは安全の保証など全くなく、己の身一つだとこり」と。

?白染まりの僕 ネクタイを絞めるだけ締めたならほ
り

街へ繰り出すのさ

ブレスケアは忘れずに 髪形までばっちり決めたならほ
り
街中の女共がほら そこら中で逃げ回ってるさ
黒染まりの僕 とりあえず近場の人間を殴つたならほ
り
街へ繰り出すのさ

プライドは忘れずに ちっぽけな凶器を内に秘めたならほ
り
街中の女共がほら ふり返つては引つ叩いていくさ?

Aメロは音量を極限まで上げられたものだった。夜空を舞う男に
さえ聞こえる、不気味な声調。それはまるで眼下に広がる夜景、そ
の綺麗さが男を死に誘つているような錯覚を覚える。

妖艶な女に似た、美しくも残酷な光景。

それが男の脳内を沸騰させ、また狂わせていく。

が、男に休む猶予は与えられない。

?街へ繰り出すのさ?の所で男は、ありえない引力を受ける。
刹那、歓楽街の中でも目立つビル、そのてっぺんに立てかけられ
ているトタン板の大看板に頭から突っ込まれた。

反動で肢体が掻き回され、口からは予想だにしない嘔吐物を吐き
だす。

血。

おびただしい量の血反吐だつた。

?黒に限りなく近い白 白に限りなく近い黒

グレーゾーンめがけ

置きにいつた自分は あつけなく打ち返され?

Bメロが否応なく夜の街に映えていく。

男はたまらず体を強張らせようとするが、それすらもうできない。
体のどの部分がおかしくなつてゐるのかは分からぬ。と、いうより
どこかもかしこも瓦解していた。

ガラクタになつた心身。

そんな人間が考えることといつたら決まつてゐる。

切望。渴望。乞う。願う。生を乞うてるのだ。

これまでしたことに対する懺悔など、脇に置いて。

（頼む頼む助けてくれ頼むよおおおおおお！）

？あっけなく打ち返され？の所で男は、ありえない衝撃をみぞおちに受ける。

刹那、まるでバットに打ち返されたボールの如く、この身は弧を描いて歡樂街にアーチを利かせる。

？灰 愛なマントたなびかせ 飛び立つスーパーマン

誰を救うつていうの？

灰 哀なマントたなびかせ 飛び立つスーパーマン

誰が救えるつていうの？

何せ裸の王様 かれこれな玉虫色さ ベテラン 何でも聞いておくれなら どんなマントにすりやいいの？ つてスーパーマン

誰色に染まるうつていうの？

んな 格好つかないことするくらいなら スーパーマン

ありつたけの十人十色ぶちまけるんだ

誰にも理解されない ヒカル 自分になつたならほら 街へ繰り出すのさ

そしたらほら 蹲つて泣いてる僕キミ ぐらい 救えるだらつた？

（メロ（サビ）が、男に悪夢を見させる。

？スーパーマン？の所で男は、ありえない魔法にかけられる。操り人形になる魔法。

刹那、男はまるで、どこかの戦隊もののように体を回転させ宙返りしてみせては、中空で演舞する。 そして、最後にはヒーロー よろしく、格好いい着地の仕方で道行く人々を驚かせた。

そして、その歡樂街の中心で粋なセリフを吐くでもなく、血だらけの男は絶叫した。

？誰が救えるつていうの？？の所で男は、最悪の終焉を迎える。

刹那、横殴りの衝撃が男の全身を弾けさせ、転がらせていった。

とはいって、相も変わらず歌は続いている。
どこまでも人を震わせる、身の毛もよだつ楽曲。
結局のところ最初から最後まで贖罪はなく、また『えられること
もなかつたのであった。

第一章 確かな代償（つた）【夜の歓楽街4】

「起きてください。聞こえてるはずですよ。意識は失わないよ、
そう詞に込めてたんですから」

声と共にピシピシと、男は頬を叩かれていた。とはいって、皮膚から伝わる感覚はない。どこもかしこも腫れ上がったこの身ではもう、痛覚が麻痺していた。

「あ、うあ」

男は、何かにうなされたかのような呻きを上げる。徹底的に打ちのめされたのに、意識はあるという不条理。声だけは上げれるという生殺し状態は、まさに異能ならではの悪夢だった。

「助けてくれえ……助けてくれよお」

「もうろくするのには後にしてください。わあ、私の質問にお答えを。何故、殺したなんですか？」

「違う……違うんだ。俺じゃない。殺したのは俺でも、俺じゃないんだお」

「？ どうしたことですか？」

「歌が……歌が聞こえたんだ。で、気づいたらあのご夫人を首を絞め

喋つてる最中のその口から血飛沫を上げ、悶絶する男。全身を痙攣させつつ、陰湿な路面をのたうつ。

この満身創痍ではもう、少しの長説も許されなかつた。

（熱い。痛い。痛い。寒い）

もはや男に理性は残されてない。ただ本性に任せるままに這つ五感に苛まれていた。

「やはり言つことは東京タワーのあの元組員と同じ、ですか。ここまで重なると、単に命乞いによる返答と切つて捨てる訳にもいかなくなりますね。となると事件の黒幕は、そういうことになるんですね。とても信じられた話ではないですが」

確信めいた弦きとともに、どこか納得ずくの夏華。一方、男にとつてはそんなのどうでもよかつた。ただ生きたい。殺されたくない。男の頭を占めてるのは、生への執着だけだった。

他方、夏華は携帯を取り出し、誰かに電話をかけている。少しして後、受話口から耳を離す彼女。

刹那、再び歓楽街に、あのダーク調のメロディーが響き渡ったのだった。

「ひぎーっ！？」

まだ何もされてないというのに、された後のような奇声を上げる男。経験からくる条件反射のよつなものだった。

「そういう反応もともすると、あの元組員と似てるやもしませんね」

と喧うと夏華は、ループしたメロディーに合わせ歌おうとする。が、その中途を遮ったのは、他ならぬ男その人だった。

足元に縋りつき泣き言からの懇願を、往生際の悪さをさらし続ける。オールバックにしていたリーゼントはくしゃくしゃに乱れ、外見からくる威圧感は欠片もなかつた。

「お願ひだ。助け」

「知つてます？あなた達が犯した罪のせいでの苦しんでる人達がいることを。ある兄は、恋しくてならぬ人と別れ、それでも別の女性にその人の面影を求めています。ある弟の反抗期が酷かつたのも今思えば、お母さんをあんな形で亡くしたんですものね。荒れて当然です。でですね、知つてます？」ある姉はあの事件以来ずっと、今この時も泣き腫らしてゐんですよ

男の言葉を一蹴する夏華。その語感に込められたニユアンスは殊のほか冷淡で、また内に秘められた激情が吐露されたかのような、そんな重みが感じられた。

えもいわれぬ迫力に返す言葉を失う男。口うたえなど許さない、

そのくらいに苛烈な眼差し。一介の極道を事もなげに怯ませるさまは、華道会を一手に背負つあの会長に瓜二つだつた。

「教えてください。これって、許せますかね？」

問い合わせる夏華に、ただ震えるだけの男。

分かつていた。

これは質問ではない。こちらに答えを求めてるでもない。初めから何もかも決まっていたのだ。

結論ありきの反語。

男は、自分に降りかかるであろう災厄を悲観するしかできなかつた。

故に発狂する。

訳もなく。一抹の生をこの世界に主張するかのよひに。

「ごめんなさい。私、家族を傷つける人間だけは……。どうしても許せそうにはないです」

その言葉が、男に対する最後の手向けだつた。

夏華は音楽に合わせ、歌をうたおうとする。そして、次の瞬間だつた。

響いたのは歌声ではなく、ぐぐもつた声ばかりに終わつたのだつた。

何故だかなんて男には分からない。といつより、極度の興奮と緊張で頭は真っ白になり、まともな視野すら得られてなかつた。

そんな自虐の結果、落ちゆく意識。

定かでない視界の中、男が最後に捉えた二つの面影。

それは小柄な女性のものともう一つ、大柄な男性のものなのであつた。

第一章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街5】（前書き）

視点が、男からある人物へと変わってます。

第一章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街5】

「んぐむうつー？」

夏華の歌おうとする声は、ぐぐもつた声を上げるに留まつた。それもそのはず。

紅のルージュに濡れた唇は、男のじつい掌に覆われていたのだ。と同時に、右手を絡め取られ後ろ手に回され、固定される。

夏華は何者かの手によつてあつさり拘束されたのだった。

鍛錬された身のこなしに、抗えようのない腕力。

もがこうとしても非力な自らでは、どうやら太刀打ちできそうになかった。

仕方なく夏華は無為無策でじつとしとると、ようやく相手方の男が言葉を発する。その声質は馴染みの、予想通りの男声だった。

「何でことを……もうこれでは取り返しがつかない」

その声色は華道会若頭、近藤その人のものだつた。その目は、口から泡を吹き動かなくなつた男に向けられている。

そして、異変は不意に起こつた。

さつきまで流れていた同一のメロディーが、雑多なメロディーに戻つて夜の歓楽街を賑わせていく。おそらくは華道会の力が働いたのだろう。

「さつきの曲で歌の異能を揮つたんですね？ 何といつ惨いことを」と、近藤が嘆きつつも夏華の口を塞いでいた左手を離す。後ろ手に固定した右手だけは外すことなく。

「いいんですか？ 私の口を押さえていないで。これで、いつでもあなたを殺れるんですよ？」

「強がりはあやめぐださい」

「強がり？ 何を」

「こんなに 震えてるじやありませんか」

「ー？」

言われたとおり夏華は激しく震えていた。気づかれない程度に小刻みと、だがこの間中ずっと震えていた。酔った男には分からなくとも、愚直な近藤には分かってしまうだけの怯え。

どれだけ自分が無理をしてるかは明らかだった。

それでもやらなければない。やらなければいけないのだ。

夏華の頭を占めてるのは、家族みんなが真に笑い合える、そんな憧憬。

この体は言うことを見かなくて済むの心には、一切のブレがなかつたのだった。

「身の程をわきまえないからこんなことになるんです。あなたはまだ高校生の身分なんですよ？ そして、異能の力は二〇歳までは使うことを見されない。撻というものはえてして、そう戒められるだけの理由があるんです。なぜなら多くの先人らによる知恵の積み重ねが、撻として後世に伝わっていくのですから。その訓戒を無視してまで何かを成し遂げた所で、報われることなど何一つとしてありません。理解できていいでか？ あなたはもうすでに取り返しのつかない所まできていふことを」

「近藤。御託は無用です。それより早く呼んでくださいよ。あの母を。いのいとは言わせませんよ。きちんとここまで足を運んでくださいよう、そうお呼び立てしたのですから」

「お呼び立て」 それは、あの白道会の丸ビル『ツインビル 世羅』でのひと悶着にあつた。夏華はわざと東京タワー崩落事件という奇天烈、且つ大袈裟な演出をみせることで、自分が事の真犯人であることを母に知らせた。たまたま母がその真相に気づいたのがあの丸ビルでだったというだけで、たとえあそこでなくても母はこの事件の実態を究明できたであつた。そのくらいに華道花という人間は聰明で、また狡猾なのだ。

他に一線を画すほどの老獴さに加え、誰もが平伏すだけの威厳。

それが東日本一の規模を誇る暴力団組織、華道会の長というものである。

第一章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街⑥】

「あなたのような頭でつからちでは口口まで辿り着けようはずがない。いるんでしょう？ 母が。早く出してください。私はあの人用があるんです」

見かけ倒しだとしても毅然と、夏華は唇を震わせていく。それに会わせるようにまた、相対する近藤の目の色が変わつていった。

極道のそれへと。

「あなたは本当に何も分かつてないようですね。あなたは踏み越えてしまつたんですよ？ 踏み越えてはならない一線を。裏側の世界へと。はつきりさせてあげましょう。私はね」

それは唐突だった。

いきなり夏華は、近藤の腕力により前のめりに屈まされて後、顔を路面に擦りつけられた。乾いたアスファルトの表面に頬が擦れて、いくつかの擦り傷を生む。

「きやあっ！？」

驚きを隠せない夏華に追い討ちをかけるように、近藤は懷から何かを取り出すと引き抜く。そして首筋にあつたてたのだった。

それは短刀。

「…………」

あまりの出来事に夏華はビビり反応するかを通り越して、放心してしまつっていた。

あの温厚な近藤が今現在、刀の切つ先を自らの首筋に当てるという事実。それに対して何を言葉にしていいかも分からぬし、何より言葉にできなかつた。

何より近藤が夏華に与えるプレッシャーには、並々ならぬものがあつたのだ。

「 あなたを殺すことだってできる」

と、彼はドスの利いた声で脅す。重低音なその声は殊こじついた場面で恐ろしいほどの効果をもつていた。

片や夏華は何も言い返せなくなつていて。突きつけられた冷遇に、返す言葉など考えられなかつた。事前に脳内シミュレーションであつたはずの理論立てはあつけなく崩れ去り、後に残るのは自分の未熟さばかり。

だからなのかもしれない。この身が危険に陥つた場合、どうなるかまで想定が及ばなかつたのは、

それもまた唐突だつた。

声が聞こえる。幼い咆哮。

大好きな義弟による精いっぽいの虚勢だつた。

「うわああああああ！」

オタクな彼が見せる、ひ弱なもやしつ子が見せる全力のタックル。それが近藤の背中をしたたかに打つが、全くもつてビクともしない。逆に義弟の方が反動で、弾かれるように転んでいった。

「 千己！？」 アンタ何 んなことより早く逃げなさい！ アンタじゃどうしたつて

「離せ！… 夏を離せよ！… 離せつて！…」

夏華の制止を振りきつて義弟は、近藤の首に飛びかかる。そのままで暴れ回るが、うんともすんともならなかつた。

騒ぐ二人にため息をつく近藤。

そして次にみせた拳動は夏華にとり、目を疑うものだつた。

近藤が実の息子の、顔面を殴る。

殴られた千己は鮮血とともに、えび反りになつて後方の壁にぶち当たる。散見される飛び散つた歯のいくらかが、その無遠慮さを夏華に伝えた。

「つー？ 千己…！」

近藤の手が義弟に回ったことで、拘束から解かれた夏華。ありつたけの憎悪を彼に向けると、立ち上がるうとして、

「え？」

立ち上がりへたれ込んだ。それもそのはず。

気づけば夏華は、起き上がりないほどに腰を抜かしていたのだった。

第一章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街】

「 ははっ。可愛い稚児^{ややこ}よな。夏は」

声がある。いつも耳にする声色でありながら、いつもとは全く違う含蓄をもつたそれ。

その音源に向け夏華は振り返る。

するとそこには案の定、あの人人が佇んでいた。

数十の同胞を背後に引き連れ、悠然と。小脇にはあのノートパソコンを抱えている。

それは夏華が家を出る際、義弟が抱えていたはずのものだった。

「 ……母、さん」

「 今や歓楽街はちょっとした騒ぎになつておるよ。にしてもまさか、この街中の音楽を軒並みハック（改变）するとは。およそ大人では思いもつかない所業よ。どうやつてやつたかは知らぬが、パソコンの力なんだろうよ。いやあ、そつちを收拾させるのに大分時間をとられてしまったわいな。まあ、それも夏の計算の内やもしれんがな。つくづく私の娘やなと思はれるとかわるわ。底の知れぬ子よ。可愛い可愛い稚児」

と、母は褒めながら夏華のところまでやつて来る。そして、うつ伏せに俯く娘の長髪を慈しむように梳いていく。

そして、次の瞬間だった。

母は娘の長髪をわし掴むと、無理矢理に引っ張り上げたのだった。

「 つー？」

痛みに顔を歪ませる夏華を冷笑で迎え入れる母。その顔つきに親の面影は微塵も感じられなかつた。

顔を上げられた状態そのままに、母は自身の頭を夏華のそれにぶつける。

当たつたなんて柔いものではなく、強烈なる頭突き。

脳天にぐらんぐらんと鈍痛が響くが、そんなもの夏華にとつては些事だつた。

頭がうまく回らない。

信じられない出来事の連続で、ショックのあまり何もかもが絵空事のようにしか見えなかつた。

自分の息子を「千己坊ちいぼう」と呼び、溺愛していたはずの父がその子を殴り飛ばすという現実。

自分の娘を「夏」と呼び、愛してしてくれてたはずの母がその子に頭突きを見舞うという現実。

とても鶉呑みにはできない数々に、夏華は正常な判断ができなくなつていた。

そんな、呆然としてる娘に母は告げる。

これ以上ない一言を。

「舐めんじやねえぞわれえ」

それは夏華の田を覚まさせるには十分すぎる、衝撃的な一幕だつた。

「母、さん。じりじり」

「近藤」

娘の弱音を無視して母は近藤を呼ぶ。その彼はといつと、倒れた千己を引きずつて起き上がりせると、そのこめかみに田を蹴つむのを突きつけた。

銃チャカだ。

力チリと、撃鉄が起これれる。

「千己！？」

まるで豹変したかのように叫びながら、一心不乱に近藤に掴みかかろうとする夏華。ブチブチと髪の毛がいくらか抜ける嫌な音がしたが、構いもしない。

「」おら夏。自分の置かれた状況をよく見てから動け。例えばお前が近藤のところまで辿り着けたとして、まかり間違つて千鶴を助けられたとしてだ……たかだか子供ガキ一人にそこから何ができると?」

そこまで言わされてハツとした。辺りを見渡してみる。

一対の建物に挟まるるようにしてできた路地裏、その両出口に所狭しと並び立つ男ら。数にして数十。強面だが精悍ある様は、一高校生などが抗えられるような雰囲気ではない。

こちらの「」り知らぬうちに出来上がった包囲網は隙がなく、いつのまにやら夏華達は袋小路へと追いやられていたのだった。

第一章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街8】

「それにこの暗がりで面つむまでは押めないが、千円せんえんは氣絶してるだろうよ。実の父に銃口突きつけられても、ピクリともしないからね。にしても何だ、夏。随分と背伸びしたものよな。まあ、お前がそこまでする理由は分からぬもない。が、にしたつて身の丈に合わんのだよ。お前が踏み込んでどうにかなる問題ではない」

と決めつける母の言い方に夏華は反論したかった。が、結果的には押し黙る。そうせざるをえないのだ。

その胸中にあるのは、義弟の心配ばかりであった。

「お前の計画は差し詰めこんなところだらう。まずは大仰な事件を起こすこと、私にだけ事の真相が分かるよう仕組んだ。また、いわく付きの男を手にかけることで口くちにおびき出す為の伏線も張つたと。同時に、私にだけ自分が何を目的に動いてるかも知らせ、で、ここでのサシの話し合いを求めていた。いや、それこそ事の真相を暴きたかったのやもしかんな。私が本当に、あの二人を殺した黒幕なのがどうかを」

歯に衣着せぬ物言いに夏華は顔をしかめる。

夏華の狙いはまさに、母が言った通りのものだつたのだ。

夏華達の父は、東京タワー崩落事件の犠牲になつた白道会の元組員 室井健人によつて殺された。その加害者である彼がいまわの際、口をついて出たのが「歌が聞こえて、気づいたら殺つてしまつていた」との言い訳。

また、千円達の母 近藤千恵は、すぐそこで泡を吹き倒れてる華道会の組員によつて殺された。その加害者である彼もまたいまわの際に、口をついて出たのは同じような言い訳。

これらのことと鑑みるにつけ、結論は一つである。

殺された二人は、異能たる歌の力に巻き込まれたのだ。

そしてそれを行使できるのは、この世に三人だけ。夏華とその兄、

後はその母ばかりなのだ。

無論、兄が歌を人殺しの道具に利用するはずがない。かくいう夏華も身に覚えのない話だった。となると残された可能性は一つ。「だが、残念なのはその詰めの甘さだな。私は夏がどういう人間のかよく知つておる。お前は潔癖症で、且つ完璧主義な子よ。私は裏返せば、一度構築された理論は絶対と疑わない愚かさにつながる。お前は普段の私から、娘に甘い母親像を思い描いていたのだろうよ。近藤についても同じく、優男だと踏んでたんだろう。だからこうなることは思いもよらなかつた。考えもしなかつたゆえに、ショックは計り知れないだろうよ。でな、それが……私の狙いでもある

「つー？」

「いいか、夏。私はお前がショックで腰を抜かすことを確信しながらに、もしもの場合に備え脇もこの通り固めてきた。千己の心配性を読み、無謀にも近藤に飛びかかるのを見越しながらに、もしもの場合に備えパソコンのIPアドレスも辿らせていた。私が何を言いたいか分かるか？ 夏。分からぬなら教えてやろうぞ」

「母さ」

「バカか、お前は」

「！？」

その痛烈な口ぶりは、住む世界の違いを見せつけるには十分すぎるものだった。

「お前はな、してはならない一歩を踏みだしここまで来たんだ。こ^{さかづき}はな、家族の血縁よりも兄弟の益^{さかづき}、その益が最優先される。つまりな、私らの目障りになるようなものは誰であれ、死ぬ覚悟をする必要があるのだよ。お前にその覚悟はあるのか？ 例えば私を追い詰め、真相を吐かせたとしてその後は？ 私を裁く、殺すだけの覚悟はあるのかと聞いている

「それは……」

脳裏を過ぎるのは自分が掲げた、「勸善懲惡」の四文字。その意

味からいえば、母は罰せられるべき存在なのかもしれない。ただどうしても心の奥底では、母が殺人者であつてほしくないとの淡い願望を抱いてしまっていた。可能性がなくとも縋つてしまふのだ。どうしたつて自分の肉親に変わりないのだから。

そんな、都合のいい滑稽さに終止符を打つかのように母は告げる。
これ以上ない事実を。

「あの一人ならな、間違いなく

私が殺したさ」

第一章 確かな代償（つた）【夜の歓楽街⑨】

瞬間、夏華の脳内は田まぐるしく沸騰した。母が大好きな人達の肉親を殺めたという事実。母が実の父を殺したという不条理。声を上げようにも内に渦巻く激情に、胸を詰ませるばかりだった。言葉にならない。言葉にしようがない。その苦しい胸の内を抑えろかのように、胸元のドレス生地を掴むと田につぱいに叫んだ。意味をなさない罵声を。

「どうしてっ！…」

「おお。腰を抜かすほど怖いだろうに、よくそれだけの大聲が出せたものよ。中々に夏の逆鱗に触れてしまつたようよな。にしても、今さら理由を聞いてどうする？ 何もかももつ終いの」と

「どうしてっ！…」

夏華の悲痛の叫びはなおも收まらない。三度、四度、五度六度と静寂の中、声を嗄らしていく。本当は理由なんてどうでもよかつた。分かつてしまつたから。誰も彼も救えないことを。救しようのないことを。

兄と義姉は、決して結ばれることのないことを。

だから叫ぶ。ただただこの悲劇を嘆ぐ。兄の母が義姉の母を殺したという、当事者同士ではどうにもならない、この悲恋の末路を。とはいへ、すぐさまその稚拙さはいなされる。母による再度の虐すき使によつて。

腫れ上がつたおでこに打ちひしがれたボロボロの心。その心身に追い込みをかける母は母であつて、とても母には思えなかつた。『どうして殺したかつて？ 決まつてるじゃないか。愛してたから

わ』

「…………え？」

「夫とは、仮にも好き合つた仲よ。好きで殺すなんて、あるはずがなかろう? もう一人の千己とあの千世羅の母も、私の一番の理解者であり唯一無一の親友だったさ」

そう喋る母の瞳は心なしか、どこか遠くを見つめてるようだった。

「母、さん?」

「身に余る力を揮えれば、必ずその代償を支払うことになる。因果応報、何だってそうよ。この歌という異能の場合、その代償が愛すべき人だったということだけのこと。つまりは私も未熟だったということよな 夏と同じく」

「一体、何を?」

「まだピンと来てないのか? 私とて好きで一人を殺したわけではないと、そう言つている。まあ簡潔にいけば、未熟な人間が歌の異能を揮えば、その代償として最愛の人を殺すことになるということよ」

次第に話が噛み砕かれていくにつれ、夏華の頭まで上つていた血がサーーッと引いていく。真冬だというのに首筋から、汗の雫が伝うのを感じた。その冷汗を実感できたことで我に返る白ら。

背筋が、そして血が凍る思いだつた。

「ところで、未熟にも一七という幼さで歌の異能を揮つた我が娘よ。私からお前に、聞きたいことがある」

「嘘」

「お前にとつて最愛の人とは、誰に当たる?」

「嘘」

「私が? 残念ながらそれは違うだろうな

「嘘よ」

「そこの千己か? いやそれも違うだろうな

「嘘!」

金切り声を上げ両耳を手で塞ぐ夏華。その取り乱した様にも、母は涼しい顔色を変えない。そのまま唇を娘の耳元まで近づけると、こともなげに囁いた。悪魔めいた死の宣告を。

それは問いかけではなく、非情な念押しであった。

「加藤、冬冶だな？」

と挑むような母の瞳に、夏華はこの日初めてにして一番の睨みを返す。そこに宿る憤怒は自分の中にある何かの瓶たがが外れたかのよう

な、抑えようのない激情の表れだった。

「まるで親の敵でも見るかのよつたつきよな。母としては何とも言えん、複雑な気持ちよ。といつた、誤解してるよつたが私が冬治を殺すわけではない。冬治が殺されるのはあくまで、未熟者が異能を揮つてしまつたが為の代償、その結果としてだ。つまりな、冬治を殺すのは 夏、お前よ」

「ありえない」

すぐさま否定から入り、夏華は母と真っ向から対立する。一方その母はとこつと、変わらずの能面で淡々と言葉を返していった。
「ありえない？ 人生経験十数年の甘ちゃんが何をもつてそう断定できる？ この世なんてもんはの、おみそ信じがたい」とばかりが起つる、そんな世よ

「ありえない」

「わつきつから言つ」とといつたが、同じことの繰り返しよな。まあ、回らない頭ではそれが限界といつたといふか。とにかくにも今のお前は、我らの害であつて益もある。何せあの田障りな冬治おとうじを消してくれるのだからな。願つたり叶つたりよ

辛辣な言い回しで、息子の死を歓迎する母。とても理解できない発言の数々に、夏華の思考はそこでストップしてしまつっていた。

すると、

「安心しない。役に立つ内は殺しがせん。近藤」

母はおもむろに近藤の名を呼ぶ。と同時に、彼は自分の息子に突きつけていた銃を降ろしたのだった。「お前の車で、そこの二人を家まで送つてやれ。お帰りだ」

その一言を最後に、母は掴んでいた娘の長髪を離すと背を向ける。そのままネオン煌く夜の喧騒へと、一步を踏みだしていつたのだった。お付きの黒ずくめな男らもその歩調に合わせ雑踏に紛れると、やがて見えなくなつていいく。

唇を震わせ、ただ固まってるだけの夏華には何もできなかつた。
そんな臆病者に近藤が告げるのは、指示された通りの一言三言。
そこに父親としての情、人としての情けは微塵も感じられなかつた。

「近くの駐車場に車を停めてあります。行きましょう

第一章 確かな代償（うた）【帰宅】

夏華が乗せられた車は、あの下校時に見た馴染みのベンツだった。ぐつたりした千己は前の座席、その運転席でハンドルを切る近藤のすぐそばに横たえられている。夜の帳が下りた景色は覗いたところで定かではないが、夏華の俯いた視線は自分の足元、そのハイヒールの赤に注がれていた。流動する夜景など気にも留めず、かといって何を考えるでもなく下を向きつづける。

そういうしてゐ内に、イヤの擦れるようなブレーキ音と共に車は停められた。

乗つてからこれまで、どのくらいの時間が流れたのだろうか。そう思つてしまふくらいに麻痺した体感。この身では普通の人ができる事でさえ、億劫になつてしまつていた。

「着きましたよ。降りてください」

と、振り向きざまに近藤が言つ。一方、夏華はとつとつと扉を開けると外に出たのだった。そこはもう、あの家からは目と鼻の先。

少しすると近藤が、千己を抱えながらも外に出てくる。そして、お姫様抱っこに体勢を変えると夏華の元までやつて來た。その後、ゆっくりした動きで小さな体躯を預けてくる。合わせるようにして義弟を抱く形になつた夏華。

「それでは」

こうして近藤は別れを告げると車に乗り込み、それを走らせていく。結果、閑散した通りに取り残された一人。

静かな家並みを縫うように夜風が一陣、二人の肌を撫でていった。

それから、どれだけの時間が経つたのかは分からぬ。

次に夏華が気づいた時にはもう、暗闇は白みがかり、朝日が顔を出し始めていたのだった。

ただ何もせず、また何もできない。早朝の冷えこみは激しく、息

づかいをする唇からは絶えず白い吐息が舞い上がりっていた。

だからだったのかもしれない。

一人でいることの救いようのなさを、家族がいてくれることの幸せを噛み締められたのは。

「ん……んう」

声が聞こえる。声変わりをしてもなお、幼い男声。義弟によるものだった。

「千己！？」

一気に目を覚ました夏華が、意識が戻ったであろう義弟の体を揺さぶっていく。そうしてると、ぐつたりしてた彼の瞳に少しずつ生気が戻っていく。まぶたが開かれるとようやく、その眼差しが夏華へと注がれたのだった。

「良かつた。夏……無事で」

それが服を擦りきれさせ、前歯が数本欠けた義弟が発する第一声だった。口内は血で真っ赤に染まり、泣きそうなくらいに痛いはずなのに 夏華の身を心配している。

「つ」

夏華はそんな義弟を強く抱いた。涙ぐみ、かといつて彼の前では弱さは見せまいと顔を伏せると、涙をこらえる。こらえられそうになかった。

「ごめんね。本当に、ごめんなさい」

震えながらも彼の温かみを肌で確かめる夏華。申し訳なさが込み上げるばかりだった。守つてあげられないどころか、自分のせいで傷つけてしまった。

悔やんでも悔やみきれようはずもない。けれども、ならばじつすれば良かつたのかと思わずに入れなかつた。

何がいけなかつたかも、これからどうすればいいのかも夏華には分からぬ。ただ今は、ここにある温もりに安堵していた。義弟が生きている、それだけでもう十分だった。

感極まるあまり夏華が咽返つていて、そんな光景を見かねてか

義弟も弱々しいながら抱き返す。加えて、背中まで回らない華奢な手のひらで、あやすようにトントンと叩いた。

「何か今日は疲れたよ。家に帰ろう」

そのくたびれた声に応えるように、夏華は大きくうなづく。何はともあれ、義弟の怪我を診てもらうのが先だ。

夏華は体を痛める彼を労わり肩を貸すと、起き上がらせる。家は実はもう真横にあってすぐそばのブロック塀、その角を曲がれば入口に到着できる。あまり無理をさせないよう、そつと義弟を先導していった。

ややもして角を曲がって見えた入口。そこには、

「！？」

そこには、あらうことか誰かが立っていたのだ。

ギラギラと。

照り返す逆光に夏華の視界は遮られる。そんな日の光をバックに佇む人影。ゆっくりこちらを振り向いていく。

その人は、光沢あるシルク素材のパジャマを着こなしていた。その上にはこじやれたカーディガンを羽織り、その下にはサンダルを履いたままの状態で。

真冬にしてはあまりな軽装ぶり。ただその服装からいつて、誰であるかははつきりしていた。なので夏華は頭が真っ白になる。

これでもう、何もかもが万事休すなのだ。

「おかえり」

そう言って迎え入れる、義姉。

送られる眼差しは、いつもそれとは全くと言つていいほど違つていたのだった。

夏華の朝は、いつもと少し変わっていた。

田覚ましのアラーム その着メロが、頭に響いてくる。
すかさず一音で止めるとはいがむ、サビが終わってもなお夏華の
眠気は続いていた。

起きたくない。とにかく寝ていい。

そうこうしてみると、携帯から鳴り響く音が聞こえなくなつていつた。一時だが、部屋に待望の静けさがやつてくる。とはいって、夏華という人間は潔癖症な性分。もし起きたらこうことも想定した上での準備には、事欠かなかつた。

ジリリー！ と、今度は置時計から耳をつんざく田覚まし音が部屋中をにぎわす。最後の皆用に買ったそれは、凄まじい音量だつた。たまらず夏華は眠気眼で音の鳴る方へ、手を伸ばしまさぐつていく。だが完璧主義の自らが、手の届く範囲にそれを設置してゐるはずもなかつた。

それは夏華の部屋、そのドア付近に置かれていた。なので一度はベッドから抜け出さなければならぬ、そう計算された距離である。まだ目覚めないままに、夏華は寝床から這い出すとカーペットの床を四つんばいで進みゆく。そうすることでやつと、けたたましい音を止めることができたのだった。

起きぬけの冴えない頭で、寝癖でくしゃくしゃになつた長髪を一撫でする。とりあえずは床に膝つき、背伸びしつつあぐびもする夏華。

「ふわああ

思わず出てしまつへタレ声は相変わらずだつた。それでも、いまいち緊張感なくいられるのは義姉という存在、その後ろ盾の大きさからくるのかもしねない。

何を隠そう、義姉はこちら側の肩を持つてくれたのだ。

てっきり兄と同じく、歌の異能を暴力として扱うことに否定的な立場の人間だと思っていた。とはいえた事が事だ。それだけに、多少のことは目を瞑つてくれたのだ。頭でつかちな兄ではこうはいかない。

だからこそ義姉は最後にああ言ったのだ。

思い返されるのは、彼女との約束事。

『冬治だけには知られたら終いよ』

その言葉が、義姉がこちら側に付いてくれたんだと教えてくれた。同時に、その一言から義姉は全ての顛末を把握したんだと確認できる。何も言わなくても義姉という人間は、一を知つて一〇以上を知れる、そんな家族一の切れ者なのだ。

ゆえに夏華達がいないことにいち早く気づき、極寒の屋外で待つていたのだろう。自分で手一杯のはずなのに、着の身着のまま胸騒ぎのままに。

とじのつまり、夏華は義姉に対し頭が下がる思いだつた。あの後、義弟の応急処置から何から何まで彼女がやつてくれたのだ。勿論、手伝おうとしたのだが「いいからアンタは早く寝なさい!」とのお咎めを受け、門前払いされる始末。ただ彼女に任せた方がうまくいくだろうから、その時は頼りがいある家族に甘えることにしたのだった。

義姉というこれ以上ない味方ができたこと。それがどれだけ夏華の心を救つたかは、言葉に言い表せないほどである。こんな中でもぐつすり眠れたのは、そういう心強さを得られたからであつた。

とはいえ、

「…………」「

一段落したことで考えさせられるのは、やはり昨夜の出来事。その際に最も心を痛めた、あの母の発言だつた。

『冬治殺すのは 夏、お前よ』

ふり返るや否や、首をブンブンと横に振る夏華。ありえない。落ち着きを取り戻した今に至つてもなお、その心に変わりはなかつた。（どうして母さんはあんなデタラメを？ 私が兄さんを殺すために歌うなんて、起きるはずもないのに）

むしろ夏華は、母の言ったことを額面どおりには受け取つてなかつた。

何か裏があるのでないか？ 一いちらの心理を揺さぶることに狙いがあつたのではないか？ いや、それ以前に理由などなく、単に脅しのため口をついて出た戯言ではないのか？

こう頭を巡らしてみるが、どれもこれもしつくつしない。

結局の所、不気味な面持ちのまま問題を棚上げせざるを得なかつたのだった。

第一章 確かな代償（つた）【翌朝の騒動②】

「………… むしー。」

とにかくにも、夏華は気持ちを切り換えた。暗い顔ばかりしていても何も始まらないのだ。どんな糸余曲折はあれど、それを兄に知られては本末転倒。なので今では習慣になつての自己暗示をかける。別人になるよう言い聞かすのだ。犯した罪に悩む女ではなく、明るい一家族の妹として。

夏華は口じるの手順よろしく、いつものように起き上がるベッドを這い出し、窓側に向かつた。

「くわつーー？」

不意に嗅がされた異臭に、出鼻をくじかれる。たまらず夏華は後ずさつた。

あんまりな刺激に、カーテンの布地を警戒するように距離を置く自ら。無論、初めてのことだった。が、冷静に考えてみるとこのカーテンが臭いを放つてるのは到底認められない。何せ夏華は潔癖症なのだ。清潔を心がける中にあって、こんな身の毛もよだつような悪臭をほっぽとく訳がない。加えて窓はきちんと閉めたはずだし留め金もしてある。と、なると諸悪の根源は窓を離れた先にあるといつこと。

夏華は恐る恐る窓際まで近づくと、カーテンの裾をつかんだ。その一つまみのままに押し広げ、外を覗いてみる。

そこには、逆さに吊るされた義弟のミイラ顔がおがドアップで映し出されたのだった。

「きやああーー！」

断末魔の悲鳴を上げ、逃げまどつ夏華。尻餅をついてしまつて、

た。

すると、詰まつた笑い声が聞こえてくる。音源は包帯でぐるぐる巻きになつた蓑虫みのむしから。

それは、義弟の高笑いだつた。

「くははは。これだよこれ！ 僕がずつとしたかつたのはこうこうことなのだよ、夏！ アイドルへの早朝ドッキリ然り、朝というのはイベントフラグ全開フルスロットルなのだよ、夏！ 更には義兄弟という設定に同居という決まり」とがありながら、それを生かしきれてないという鬱憤うつむけん今ここに極まりなのだよ、夏！ さあ、夏！ 後は君次第だ。何も言わなくとも分かってるだろ？ そう、夏！

君の思つてる通りさ。むろん加減はいらない。一息に田をキランと輝かせやつてくれたまえ…… さあ、この俺をぶつ飛ばして空の彼方へ！！

昨夜はあんなことがあつたといつて、この通りけりつとしている義弟。

本来であれば実の父に殴られた翌朝である。彼の泣きつ面があつても決しておかしくはないのだが、本人はご覽の通り元気にふるまつていた。

（無理しちゃつてまあ）

義弟が本当は気の弱い、心配性な人間であるということを夏華は知つてゐる。けれどもそれを表に出さないのはきっと男の意地、誇りイドというものが関係してゐるのだろう。夏華にはとても理解できたものではないが、傷つけてはいけないものだといつことは経験上分かつてゐる。

従つてそんな彼に夏華が言えることといつたら、あたり障りない朝の挨拶くらいだつた。

「あーチコチコ。おはよつ

「あー、おはよつ……じゃねええ！！ 違うだろ！？ それ何か違うだろ！？ もっとこう、ここでは問答無用のアクションシーンが求められてる訳だよオーケー？」

「だつてアンタ、怪我してるじゃない」

「それは殴つてから気づくものなの！…」

「はい？ 何を怒られてるかよく分からんんだけど。てか、それ以前に窓閉めきつたままだし」

「そこは窓かち割つて許されるところだらうが！…」

歯が抜けて、口内はぼろぼろのくせして大声を出すものだから、喋るたびに悶絶する義弟。蓑虫が」とある「」とにフルフル震えるさまは、いい笑い者だつた。

「にしたつてアンタ、そこで何してるのよ？」

そう言いながら窓越しに、義弟の姿を見返してみる。彼は包帯で全身をぐるぐる巻きにされており、逆さ向きに呪わされていた。その足先からは、複数の包帯の束が屋上に伸びている。とても一人ではできない作業工程だつた。

「というかこれ、姉さんがやつたの？」

「うん。何か兄さん対策だつて」

「兄さん対策？」

その言葉に三度、義弟の姿を見返してみる。彼は目と鼻以外は包帯でぐるぐる巻きに隠されており、外見からではおよそ傷を負つてるとは分かりそうになかった。

（なるほど。包帯で傷口を隠したんだ……いや、正確にはチコチコに触れさせないようにしたつてとこかな）

それが夏華の部屋、その窓際に義弟を吊るした理由なのかもしねない。

まずもつて兄が彼のあられもない姿を見ようものなら、真っ先に駆けつけて介抱するに決まつて。が、それでは誰かに殴られたことに気づかれてしまう。そこで義姉は夏華の部屋に目をつけたのだ。ここなら、たとえ彼の包帯姿を見てもすぐには駆けつけられない。そこに辿り着くためには、就寝中の夏華の部屋を跨がなければならないからだ。家族思いの兄が、妹の安眠を邪魔する行為に打つて出るはずもない。

兄の性格を熟知してゐるからこそできるその仕掛けは、まさに隙がなかつた。

第一章 確かな代償（つた）【翌朝の騒動③】

「ん？ けどそれって、もう兄さんにチコチコの姿は見られてるってことになるんじや」

「うん。ついたまげ、ゴリゴリしてて兄さんに見られたばかり」

「あらそつ。それはそれは 何ですってええ！？」

会話の途中、思いもしなかつた出来事におつたまげる夏華。兄が義弟のこんな姿を目の当たりにしようものなら、たとえここまで来れなくとも動かないなんてあるはずがない。そして、この仕掛けからいつて義姉は単身、あの兄を迎撃つ氣なのである。それがどんな修羅場を招くかは言つまでもない。

とにかく夏華は、すぐさま自分の部屋を出のべく足を走らせたところで、

「あーダメダメ」

鏡台にたてかけられた鏡に自分の顔が映つたところで、急いで引き返す。あの昨晩、近藤につけられた擦り傷がいまだ生々しく残っていたのだ。

焦る手つきで引き出しから化粧箱を取り出すと、そこに入つてるファンデーションを取り出し塗りたくる。

少しの時間をかけて後、傷口の赤をファンデーションの肌色に染め上げる夏華。階下に向かおうとして、

「いやいやいや、なに普通に俺をスルーしてやがりますか！ そんなまさかの放置プレイ！？ い、嫌だーつ！ 本当は鬱血しちまくりプラス逆さ吊りプラス頭に血が上りMAXなんですよ？ ただ格好がつかないから我慢してただけで、もうどうに限界はきておつたのですよ？ 夏、あ、いやお姉さまー！ こっちを振り向いてくださいお願ひします」

背後から、わめく男性が泣き言が聞こえる。さつままで一次元に酔いしれ、随分楽しそうだったところに置いていかれると見るや

否や、騒ぎだす蓑虫。

かわいそなので一応ふり返つてみる。そこには潤んだ瞳で救助を待つ、子犬に似た可憐さがあった。というか、それを必死に演出してゐる愚弟。ちょっと痛々しかつた。

「ごめん。今は急いでるからまた後でね。すぐ戻つてくるから」窓を隔てるから聞こえにくいため、だらうが、口を動かし扉へと翻す。刹那、

「い、嫌だーつ！！ 何が悲しくて真冬にアクロバット飛行」「あーもう、うつさい！」

義弟の大騒ぎを一喝する夏華。ふり返つてみる。

蓑虫がぴょんぴょんと、必死にもがき飛び交つていた。

「はあ」

夏華は一度ため息をつくと、ベッド下に置かれた自分の学生鞄のところまで歩みを進める。次にその中をまわぐると取り出したのは、義弟用にと備えられたマスクと制汗スプレー。

瞬間、彼の顔色がみるみる青ざめていく。加えて後ろに飛び退き、振り子の原理で窓にぶち当たつていた。

「おのれ貴様も闇に墮ちたか！！」

「まだ私、何もやつてないんだけど」

勝手にこれから起きるであろうことを悲観し、暴れる義弟。とはいへ、過去にもこうこうことは多々あつたので、夏華としては慣れたものだつた。

「おのれ三次元。この俺をそっち側に誘おうといふのか？ 笑止！ この不肖千己。たとえお姉ちゃんつ子の願望に破れようとも、退かぬ。退かぬぞお」

やたら騒ぎ立てる義弟を尻目に、夏華はマスクをして防臭対策をする。そして手に持つたスプレーを構え、臨戦状態の面持ちで彼に向かつていた。

「えーっと、何かおかしくなくない？ てかこれ完全にデッドンドへの伏線じやね」

「全部、アンタが悪いのよ」

「その台詞キター！ てかそれ以前に選択肢は！？ 」この土壇場で

あるもんだろ生死分け目の選択肢！」

「だつて、臭いんだもの」

「わわわ分かつた。これは俺が試されてるんだな。ここで俺が『命乞いをする』を選べば、上手くいくように見えてその実、デッドエンドになると。ならば俺は座して『真実を話す』を選択しよう。断腸の思いだが、背に腹は代えられぬ」

電波を飛ばす義弟は無視して、夏華は窓にかけられた留め金を外すと覚悟を決める。

一気に、窓を開け放つた。と同時にスプレーを吹っかけようとしたのだが、如何せん彼から放たれるオーラは尋常でなかつた。

思わずたじろぐ夏華。片や義弟はといつと、某少年漫画ばりの熱き血潮が宿つた瞳で、名ゼリフでも吐かんかのような風格だ。

終には一旦うつむき、溜めまで作る始末。それはあの『都市公園世羅』でのライブ、そこで兄が見せた拳動と瓜二つだった。

そして義弟は顔を上げる。それが始まりの合図。

目に映つた彼の顔つきはこれ以上ないくらいに勝氣で、これ以上ないくらい自信に満ちたものだった。

（ 来る）

「俺は…………夏のパンツをくんかくんかしたことがある！－！」

そして非情にもスプレーは、その自信に満ちた瞳へと噴射されたのだった。

一階にて断末魔の雄叫びがこだまする頃、一階もまた悲惨な状況になつてることを心配せずにいられない夏華。ただ当の義弟は頑丈に固定されていたため、ハサミで切る工程は困難を極めた。ようやく切り終え、小さなその体を屋内に入れた時にはすでに、中々の時間が経っていた。急いで私室を出ると廊下を走り、階段を下りていく。そのまま半円に回り込んでリビングに入ると、そこはもう修羅場なんて言葉では言い表せない緊張感が漂っていた。

兄と義姉がテーブルを挟み、向き合つ形で座つている。

この状況ですら家族にとつては稀なこと。だというのに、ここから窺える兄の表情が、取り返しのつかない現状をあからさまに伝えていた。

怒つているなんてものじやない。鬼の形相なんてものでもない。有無言わぬ苛烈な眼差し。その張りつめた雰囲気を前にしては、どんな言い訳も口にしてはいけないよう、そんな異様なプレッシャーがかけられていた。

現にリビングに入った瞬間から、夏華は固まつてしまつていて。動くことも、音を立てることも許されない行為のように思えてしまつていて。息をしてるのに息苦しい。知らず、呼吸さえも控えられてるようだつた。

きっと義姉も同じ心持ちだろう。夏華の視界に映つてるのは彼女の後ろ姿だけだが、現に彼女の体には目に見えての変化がみられる。あれほど強気だった義姉、その肩が絶えず震えてるのだ。
(このままじやいけない)

幸い兄が向ける視線の対象は、義姉であつて夏華ではない。それが夏華に、ほんの少しの勇気をくれた。

夏華は何も言えない代わりにしゃかりきに駆けると、義姉に飛びつく。意味なんものはなかつた。ただ助けたい、力になりたいと

いう気持ちが先に立つてこんな行為に走ってしまったていたのだ。

一方、後ろから抱きつかれた義姉は「……」と思ひもよらなかつたのか体をビクッと波立たせる。対する夏華は「……」構わず彼女の頬に自分のそれを擦りつけていた。加えてできる限り強く、めいっぱいの気持ちを込めて抱き締めにかかる。

「夏？ おはよう」

とりあえずといった感じで声をかけてくる兄。当然、その声色には怪訝なものがあった。おそらくはいきなり義姉に抱きついたのを、不審に思つたからであろう。分かっていない。兄は、自分がどれだけ人を怖れさせてるかまるで分かっていないのだ。

すると、不意に長髪が撫でられた。彼女によつて。

「……ありがとう」

と、心のこもつた囁きしてくる義姉。その内緒話に夏華がふり向くと、目に映つたのは負けん気たつぶりの彼女その人だつた。

（良かつたあ）

微笑む夏華、そのほっぺに義姉が口づけをする。それはよくされる愛情表現の一つで、つまりはいつもの彼女になつた証でもあつた。

「夏? とにかく起きたなら、お前の部屋に少しお邪魔をせてもらひや」

そう告げ、冬治はにべもなくリビングを出ようとする。が、その進行先を塞ぐように手が掲げられた。義姉によつて。

何
方

元による冷めた一言が、夏華の胸に突き刺さる。実際、言われてるのは義姉なのだが、普段の彼とあまりに違うものだから怖くてならない。

る。これでもかと張りつめた雰囲気を一新する、これ以上ない緩和へと。

そして、それは投下された。放られたその生地は丸まつたまま宙を舞うと、三人が見守る中、ふわっとテーブルのど真ん中に軟着陸する。合わせて縮こまっていた柔い形状が開かれ、その正体があらわになる。

レース生地で色は純白。

それは、夏華のパンツだつた。

氣づけば絶叫アトラクションばかりの悲鳴が、閑静な住宅街を賑わせていった。

片や家にいる夏華は、一瞬にしてその元凶を書き消すと、真っ赤な顔してプルプル震えている。後ろに回された手、その握った拳にはあの下着が極限まで握りつぶされていた。

(最低)

確かに、さっきまでの緊張が嘘のようではある。全くもって効果

覗面なのかもしれない。が、夏華にはとても納得できる話ではなかつた。

(私を利用したわね、姉さん)

とんでも裏切り行為に及んだ彼女を睨みつける。その横顔はとくに、わざとらしく俯かれていた。

そして、義姉がやさぐれた空氣感のまま口にした暴露。

それは夏華にとり、生理的嫌悪そのものだった。

「それね……弟の部屋にあつたの」

「何ですつ むぐぐむう！？」

兄そつちのけで物申そうとした口を、義姉の手が塞ぐ。彼女の鼻はひくついており、怒つてるのが目に見えて分かつた。

「こんのおバカ。今はそれどころと違つでしようが。いいからここはお姉ちゃんに任せせるの」

「そうしたくてもですね、できないほどにこの話題はタイムリーなのですよ！ついさきほどですね、パンツ嗅いでたつて垂れ込みがあつたんですよ。本人から！大体これ、ちょっとくらい前に下着ドロに入られたつてあの子が騒いでた下着ものじゃないですか。姉さんのもあつたのに何で自分のだけと思つてましたが、まさかあの子の自演だったなんて……一体姉さんは、いつからこのことを知つてたつていうんですか！？」

ひそひそ話で済むはずの内容はいつのまにやら、兄に箇抜けなほどの音量になつていた。

ボリューム

第一章 確かな代償（つた）【翌朝の騒動⑥】

とはいえ、救いだつたのは兄が鈍感で且つ、どんな時でも家族を最優先に考えるといふ。

「悪いが、俺は用があるんでな」と、案の定まったく相手にしない兄。一方、義姉としても埒が明かないと思ったのか、夏華の弱点 まだ癒えぬおでこに「ハッポン」をかますと、蹲らせ黙らせる。

その間に再度、兄に向け語りかけたのだった。「だからそれに関係してたる話なの。昨日の夜ね、偶然にも見かけちゃつたのよ」

「話が見えないんだが」

「最後まで言わないと分からぬ、か。了解。その時ね、夏の部屋だけ扉が少し開いてたの。で、私は変に思つて扉を開けてみたら…」

「…後の説明はいらないわよね？」

「はあ？」

「あーもひー」了解。もう遠回しに言いませんよはつきり言つ。つまりね ウチの弟はアンタの妹に発情して、夜な夜なパンツを盗み出してはくんかくんかしまくつてたつてこと…」

「！？ なん」

「何ですつてええ！？」

兄の驚きをかき消すほどの仰天でもつて、声を荒げてしまつ夏華。むろん昨夜は義弟と一緒にいたため、嘘なのは確かなのだが、問題はどこまでが嘘なのかということである。

妙に真実味めいた、生々しい内容に夏華はショックを隠せていかつた。

「で、さすがにそういう現場を押さえた以上、叱らないっていうのは問題じやない。かといって警察に突き出すなんてことしたくないし。それは冬治も同じ考え方よね？」

「それはそうだが、にしたってあの千鶴がまさかそんなことを？」「どの千鶴のこと言つたら、そんな発言になるのよ。どの面切り取つてみせても、千鶴つてつたらムツツリスクべの典型じやない。まあでも、あの年頃の子にはよくありがちなことよね？ アンタだって実は子供の頃、好きな女の子の縦笛、舐めたりしてたんじやないの？」

夏華の心情をむげにし、軽口を叩き一矢つぶ義姉。もう完全に彼女のペースになっていた。

「ありえない。俺は女に惚れたら、まず自分の想いを相手に伝える。お前の時だつてそつだつたろ？」「うが

「あ

瞬間、沸騰したヤカンの音とく、ポツと顔を赤らめさせる義姉。それどころか、まるで頭から湯気でも出んばかりに狼狽すると、視線をさまよわせていた。明らかにその落ち着かないさまは、恋する乙女。

（何だろ？ ）の煮えたぎる愛憎は

本当は微笑ましい光景のはずなのに、夏華はこの甘つたるい雰囲気が憎たらしくてならない。自分をダシにして作られたムードに、この上ない理不尽さを感じていた。

「しかしながら、それだけのことがあつたとはいえ、寒い屋外であんな風に逆さ吊りにするなんて、お仕置きにしては度を越えてるんじゃないかな？」

もう口答えする兄は、どこか自信なさげだった。それもそのはず。いつもテリコケートな問題は男性にとり、特に苦手とするところである。

「だから毎度テリカシーがないって言われるのよ。見なさい、夏華。こんなにも震えるじゃない」

片や自信満々の義姉は、利用できるものは何でも利用する性質らしい。かくいう夏華が体をプルプルさせてるのは、この気に食わないムードに対してであつて、決して変質者おとつしやを怖れてではない。むし

ろ今の夏華なら、喜んで義弟のあの要望に応えそなものだ。
「ナックルトゥーバタフライ」よろしく、お決まりのはつ倒しで。

第一章 確かな代償（つた）【翌朝の騒動】

「そ、そうだったのか。こればっかり同じ男としては何ともな。世羅。この問題はお前に任せていいか?」

「…………」

「世羅?」

「ひやひやひやい! も、もちろんよ。私に任せといて」

「? ああ、頼む。もう仕事に行かないとまずい頃合だしな。食事とかもろもろ用意してあるから、後で暖め直して食べててくれ」

なぜか慌てふためく義姉に、時間に追われる兄。もはや夏華は完全に蚊帳の外だった。

一連の話がまとまって後、兄はいつたん一階に上がり、すぐ下りてくる。身支度を済ませにいったのだ。現にさつきまでの部屋着とは打つて変わって、格式張ったスーツを着こなしている。さらにはネクタイもばっちり締められたというその正装には、どことなく男の色気を感じさせた。元々が整った顔立ちなので、その端整さに大人っぽいスーツという組み合わせは、お互に引き立つ仕様のようと思える。

つまりは、見惚れんばかりの美しさとこづい」と。

「いい」

と声を漏らす義姉。かくいう夏華も同じ印象だったのだが、ここはあえて口は噤んでいた。やはり納得がいかない。下着を盗まれ、挙句の果てには変態行為に及ばれた被害者そつちのけで展開される、甘酸っぱいムード。

夏華は笑顔でいながらに、この茶番をぶち壊しにするタイミングを虎視眈々と狙っていた。

「じゃあ行つてくる」

そうリビングから見える玄関にて、出かける挨拶をする兄。

「行つてらつしゃい」

と、まるで新婚ほやほやのよつよつたるい声で見送る義姉。そして兄は外へと繰り出し、夏華の内にはじむ黒い感情が芽生えたのだった。

片や、そんなことなど知る由もない義姉。嬉しさのあまりか夏華の肩をビシバシ叩きだす。

「ね！ 今の聞いた？ 聞いたわよね！？ 私のこと『世羅』って呼んだのよ、あの冬治が！ ここ何年も名前でなんて呼ばれたことなかつたのに、もう私びっくりしす、！？」

刹那、なめらかだつた唇の動きがピタリと止まる。いじられても微動だにしない夏華、その真顔に当てられたためである。うう。

どうやらよつやく、事態の深刻さを呑みこめたようだつた。

「姉さん…………ずいぶんと楽しそうですね。私があんなにも卑劣な、痴漢行為に遭つたつていうのに」

「またまたあ、大袈裟な」

軽い口ぶりで「愛嬌とばかり、腕をグリグリしてくる義姉。夏華はそんなおふざけをひと睨みで一蹴すると、彼女の方にふり向く。

「何て野郎なの、その千口つてヤツは！ ！ そうよね！？ 私もちようど今そう思つてたところよ」

次いで旗色が悪いと見るや、手のひらを返す彼女。そのお下劣さに挑むように今、姉妹喧嘩の幕が切つて落とされる。

「まつ待ちなさい！ アンタ学校は！？」

最後の抵抗とばかり、悪あがきを口にする義姉。そんな逃げ腰な彼女をあしらうべく夏華は腕をふり上げると、壁を指差す。

そこに掛けられてるのは、カレンダーだった。何の変哲もないオーソドックスな一覧表。そこには、今日の日付けも赤色で記載されている。つまりは休日といつこと。

「オーマイガッ！」

「姉さん…………あなたという人はあつ！」

ふざけることで問題をつやむやにしよつとする義姉に、飛びかかる夏華。

一人の取つ組み合いは地味に長く、それでいてねちっこいものになつていつたのだった。

第一章 確かな代償（うた）【目的地に向け移動】

文化の日しきり、勤労感謝の日しきり、一週間の規則的な学校生活を送つてゐる夏華にとり、たまにやつて來る祝日は願つてもないことであり、また持て余すものもある。何せ日頃つながりが深いのが極道な人たちであるから、プライベートで遊べる同性の友達など皆無に等しかつた。

そんな寂しさを氣づかつてか、はたまたあの取つ組み合いに対する謝罪の気持ちからか、夏華は義姉に誘われ、指定する場所まで来るようになつて言われた。そこで一緒に遊ぼうということなのだ。

とはいへ、おかしいのはその招かれ方。普通、誰かと遊びにいく場合はどこかで待ち合わせしてから、映画館なり喫茶店なりの目的地に繰り出すようなものである。現に義姉との付き合いは、往々にしてそういうものばかりだつた。

なので直に、しかも別々に向かつて現地集合しづらなんてことは初めてのことである。

（絶対に何か企んでる）

「うあからさまだと、逆にそつ氣づかせることが彼女の狙いなんじやないかと穿つた見方をしてしまう。少なくともこちらの思つてるような展開にならることは確かだ。それがあの取つ組み合いに対する報復なのか、それとも何かのサプライズなのかは分からぬ。ただ特にすることない夏華にとつて、誰かに誘われるということはそれ 자체、甘い誘惑だつた。

逆らえない。というか逆らおつものなら家で一人つきりだ。脳裏に過ぎるのは、その結果できた義弟という前例。愛用のノートパソコンを「ミキ」と呼ぶことで、引き籠もりを成功させてしまつたような子だ。おそらくはその妙にありがちなネーミングからいつて、実在する人物 クラスで気になつてゐる子からの引用であろう。

じつは成れの果てを目の当たりにするにつけ、夏華は喜んで

義姉の計略にかかつたのだった。

とはいひものの、指定された場所はおよそ家からすぐセヒトはない距離だった。電車をいくつも乗りつき、その度ガタンゴトーンとこう効果音とともにこの身も揺らされていく。祝日ということもあってか車内は多くの人でじつた返しており、立たされるはめになる夏華としては勘弁してよと言いたくなる心境だった。ただでさえ昨日の出来事で疲れてるのに、それに輪をかけておしくらまんじゅうが繰り返されるという始末。これは着いた先に何があるというわけではなく、むしろ着くまでに嫌がらせをしようという魂胆でもあるのではないか、そう嘆きたくなる圧迫感だった。

そうして何とか数時間かけ、言われた駅のホームに降りたつ夏華。その頃にはもう時刻はお昼をすぎていた。遊ぶ前からぐつたりしてしまつてるのはどうかと思うが、そもそもしていられないで改札を出ると目的地に向かう。義姉が書いてくれた拙いメモを頼りに、あつちこつちに歩き回る自ら。

その後も四苦八苦する」と、ようやく辿り着けたのだった。
「嘘、でしょ、…………」これは一体、どうこうことなんですか?
そしてぶつける。当然の疑問を。

その相手は、仕事で家を出たはずの兄なのであった。

第一章 確かな代償（うた）【テーマパーク】

「夏？　お前こそ何をやつている？　ここは、俺の職場だぞ」「職場！？　てかここって　遊園地、ですよね？」

改めて辺りを見渡してみる。そこら中カップルやら親子連れでごつた返しており、近くの券売所でチケットを買つては、きやつきやしながら中に入つていった。見上げると小高い山々を背景に、今にも覆いかぶさつてきそうな巨大観覧車が迫力をもつて夏華を迎えていた。その視界の端には、もの凄いスピードでうねり狂うジェットコースターが映つており、そこからの女性の絶叫がここまで聞こえている。

（ディズニーランドほどとはいかないけど、随分な規模なのね）

全体的に中規模ではあるが、個々の設備はなかなかの物だつた。外觀がどことなくお伽話風じげばなしゆうで、メルヘンチックな面があるのはさておき、時代の最先端を見据えてるのは確かだ。現に入場ゲートを通る客らの中には、そこに付属された認証端末に携帯を繫かぎして通る人もちらほら見受けられる。かつての磁気カードを用いるものから、配信されるQRコードを携帯に取りこみ活用する、現在の多元化社会にそつた対応がなされている証だつた。

「へえ。兄さんは、ここの支配人か何かですか？　にしても落ちぶれましたねえ。仮にもあの華道会を関東一の暴力団組織にのし上げた立役者ですのに」

かくいう夏華は、兄の現在における職業や過去における暴力団時代について、全くといつていいほど教えられなかつた。といふか教えてくれなかつたのだ。理由は横暴。前者はそんなこと気にしている暇があつたら勉強しようとあしらわれ、後者は教育上よろしくないとあしらわれた。

つまりは古風なのだ。いつもは女関係でちやらんぱらんとしてるのに、それが家族に関係することに及ぶと神経をこれでもかと尖ら

せる。

なので夏華の「華道会を関東一の暴力団にのし上げた立役者」との話は、あの『ツインビル 世羅』で義姉が言つてたこと然り、人づてに聞いたものにすぎなかつた。

「やはり裏社会を仕切ることとテーマパーク運営とでは、煙がまったく違いますものね。とはいへ、あれだけ混沌とした世界を一手に引き受けっていたというじゃないですか。こうこう諺あるの知つてます？ 柔よくを制す。兄さんに足りないのは、まさにそういう所なのですよ。もつとできるはずです。だつて私の兄ですから」

愛ある叱咤激励のつもりで、言葉を連ねる夏華。対する兄はとうと、首をかしげていた。

「お前なに勝手に勘違いしてるんだ。俺はな、ここの一従業員にすぎない」

「またまたあ。謙遜なんてしないでくださいよ」

「謙遜つて、夏は俺がそんなことするような人間に見えるのか？」

「うちの兄が謙遜？ まさか！ 女心一つ分かつてない兄さんが自分をへりくだるなんて器用なこと、できるはずないじゃないですか」「お前、何言つてんだ？」

「ですね」

「だな」

短い会話が応酬されて後、一時の沈黙が流れる。

「ななな何ですつてええ！？」

次いで、お決まりの口癖で仰天する夏華。

「こおら、夏。人前でみつともない」

「な、だ、だつておかしいですよ兄さんなんですよあの！－ 私の中での兄さんはこう、完全無欠明朗かいかつ奇奇怪怪な完ぺき超人の天才少年で」

「だからお前、何言つてんだ。ちょっと落ち着きなさい」

「いいから支配人をちゃつちやと出してくださいよさあ！ もう我慢なりません私は。だいたいこのテーマパーク、なんていう名前な

んですか？ どうせやくでもないハゲたおっさんか考えそつなネーミングセンスの

とテーマパーク、その入場ゲートにかかる半円形のアーチを田にするや否や、夏華は口をあんぐりとせる。女性なのはしたないとか、そんなこと言つてられるような状況ではなかつた。

花柄でファンシーなアーチに浮き彫りとなつて明示された、この遊園地の名称。それは……

『テーマパーク SERA』。

「ファ

！」

ゴルフのキャディよろしく支配人といひのね、夏華ひとつ最も警告すべき想定外な世羅あねだった。

第一章 確かな代償（うた）【テーマパーク2】

夏華たちが入園した先の光景は、日常から切り離された架空の世界を樂しめるよう意識づけされた空間だった。どこもかしこも現実くささはなく、足元の区分けされたブロックには違和感のない範囲でカラフルなペイントが施されている。所々、マンホールの生活観をごまかすべく、義姉に似たキャラクター「ゴ」があしらわれていた。近場にあるマスコットのふれあいコーナーでは、義弟そつくりのぬいぐるみにちびっ子たちが襲いかかっている。現在、何かの演目のぬいぐるみ中最中らしく、入ってすぐのステージ上では夏華に瓜二つのぬいぐるみが世界の平和を脅かすらしき悪党に捕まっていた。つまりは絶体絶命の危機。そんなとき図つたようにどこからか、わざとらしいMCからの女声がマイクを通して聞こえてきた。

「まあ大変！ ナツちゃんが悪者たちに捕まっちゃった。このままではいけないわ。さあ、みんなの力を貸してちょうどだい。せーの呼んでみましょう。せーのっ！」

「トーヤーーーーー！」

兄の名前がお子ちゃま達に呼ばれる。

瞬間「とうつ！」というかけ声とともに、兄の顔そつくりの戦隊マスクを被つた何某か^{なにがし}が、羽織つたマントをはためかせド派手に登場する。同時に、ドカンと爆発は起こるわ煙は起こるわ火花は散るわで、なぜかそこだけ経費のかけ方が尋常じゃなかつた。

戦隊ものを丸パクリするという暴挙に加え、完全なる兄びいき。

（これは酷い）

現に、子供達の「がんばれえ！」とか「負けるなあ！」といった力タルシスを与える間もなく撃退される敵方。一〇秒と待たず世界を救う正義の味方。まさに子供にとり、ひんしゅくの対象だった。

客らを見渡すと、小さな子はポカンと口を開け呆然とし、大人は顔を引きつらせ困った顔をしている。

「トーヤーはいつ見ても強いなあ。一撃あげるだけで敵を全滅させちまうんだから……にしては強すぎるとか」

「兄さんのせいでしょうが……」

本当は彼のせいではないのだが、その責任の一端は必ず担つてると考えざるをえない。とても見過いせない三文芝居の数々に、夏華はほとほとあきれるばかりだった。

「何ですかこの、姉の道楽により生みだされた自己中な世界は。こんな所で兄さんは働いてるっていうんですか？」

「さつきからお前は何を言つてるんだ。世羅は、口口とは何の関係もないんだぞ」

「……ハア？」

「それにしても夏。先に俺の質問に答える。ついさっき、ここ^オの支配人からの指示だつてんでわざわざ仕事を中断してまで外に出たら

な、お前とばつたり会つたんだよ。これつて一体どういうことだ？」

その言葉に夏華はがく然とした。これだけ義姉を匂わすヒントが散りばめられていながら、兄は何一つ分かつてないのだ。もうここまでくると鈍感とかそういうレベルで語られるものではない。バカなのだ。救いようのない家族バカ。

この時に至り夏華は、兄を相手にすることの虚^{むな}しさを悟つたのだった。

パラレルワールド

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9099w/>

歌の力～混沌に咲く絆（はな）～

2011年11月25日18時57分発行